

327

692

6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

始

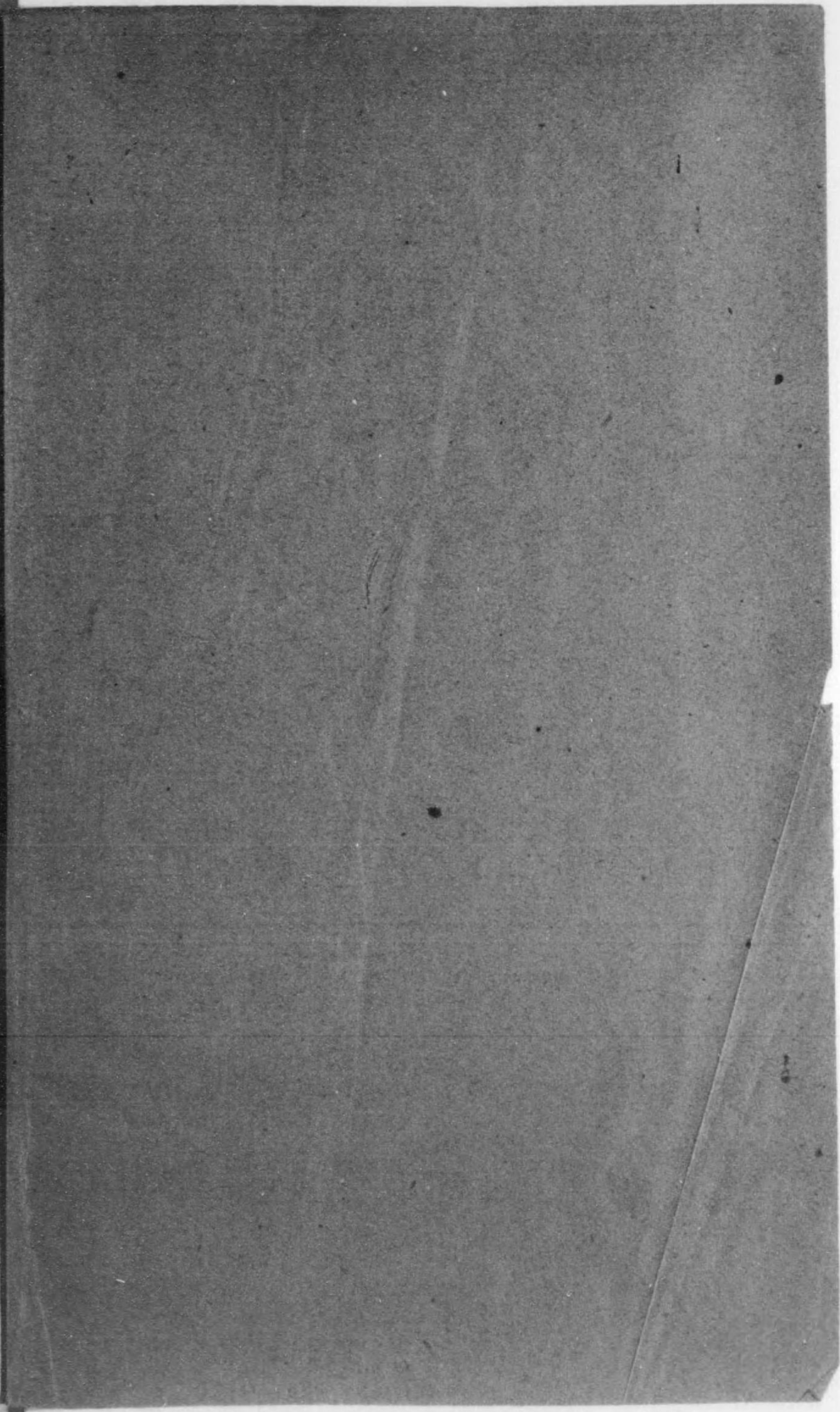


327

692



東京女子家政學院編纂
裁縫秘術寶典



327-692

皇后陛下御尊影
侯爵久我通久閣下題字

裁縫

祕術寶典

全

東京女子家政學院編纂

大正
4. 1. 28
内交



傳芳

傳芳

源通久題

源通久

源通久

はしかき

從來裁縫書なるものは種類がまことに澤山ありますが、孰れも教科書用のものか、参考用のものでありまして、説明が複雑であつたり、圖解が簡略であつたりしますから、書物に就いて實際に裁縫を覚え、又習熟することはなかく、に困難な業であります。諸姉が家庭に居られて、師につくか、或ひは先輩の指導に由つて習得せらるゝ人には、さほど難事ではありませぬが、斯様な便宜を得られぬ人には、其都度分り易き書物に就いて習得すること、が最も捷徑であります。未だ裁縫の心得なき人でも、或る種の分り易き書物に由つて學べば、知らず識らずの中に覚え込むことが出来るのであります。又此の道を心得て居る人でも、家庭の用務や其他で忙しき人は、

時に要點を忘却れぬことが無いとも限りません其やうな場合には適當な書物さへあつたならば直ぐに記憶を喚び起すことが出來ます即ち本書は此の點を補はんが爲めに編したるものでありますから繁雜なる説明や理解に苦むやうな點を省きまして専ら圖解に因つて如何なる縫ひ物でも直ぐに理解し實際に役立つやうに仕組んだものであります殊に諸姉が平常手にしたことの無い部類まで節を分ち圖を以て分り易く説明してありますし猶小兒用の端物及び衣類の保存法に至るまで委しく注意してありますから諸姉にとりては唯一無二の師匠であります。

大正四年一月三日

編者しるす

裁縫祕術寶典目次

第一章 裁縫に就ての注意	一
第一節 運針法	一
第二節 普通帛布類の丈及び幅	二
第三節 衣服各部の名稱	三
第四節 解物	五
第五節 とめ糸	七
第六節 衣類を縫ふ順序	八
第二章 一ツ身	九
第一節 一ツ身襦袢篋付標準寸法	九
第二節 一ツ身襦袢裁方及び積り方	一〇
第三節 一ツ身襦袢の篋標付方	二〇
第四節 一ツ身襦袢の縫方	二二
第五節 一ツ身長着	二四
第六節 一ツ身袖無羽織	二〇
第七節 一ツ身袖無被布	二三
第八節 一ツ身長着篋付順序及び方	二三
第九節 一ツ身長着の縫方	二五
第十節 一ツ身袖無羽織の縫方	二六
第三章 三ツ身	二七
第一節 三ツ身長着篋付標準寸法	二七
第二節 三ツ身長着の裁方及び積り方	二八
第三節 車裁(追送り裁ち)	三三
第四節 帯かくれ裁	三三
第五節 三ツ身中幅物	三五
第六節 三ツ身筒袖と長着の裁合	三五
第七節 三ツ身長着篋標付方	三五
第八節 三ツ身長着の縫方	三七
第九節 三ツ身胴抜の表周圍裁方	三七
第十節 三ツ身胴抜長着の篋標附及び縫方	三七
第十一節 三ツ身比翼裁方	三六
第十二節 三ツ身比翼の篋標付及び縫方	三六
第十三節 三ツ身重物詰め方の寸法	三六
第十四節 三ツ身羽織の篋付標準寸法	三六

目次

一

第十五節 三ツ身羽織の裁方……………四〇
 第十六節 三ツ身被布の籠標付標準寸法……………四二
 第十七節 三ツ身被布の裁方……………四三
 第十八節 三ツ身被布の籠標付及び縫方……………四四
 第十九節 三ツ身道行の裁方……………四五
 第二十節 三ツ身被布及び合羽の縫方……………四六
 第二十一節 三ツ身道行の籠標付標準寸法……………四七
 第二十二節 三ツ身被布合羽の籠標付標準寸法……………四八
第四章 四ツ身……………四九
 第一節 四ツ身長着籠標付標準寸法……………五〇
 第二節 四ツ身長着の裁方及び積り方……………五一
 第三節 四ツ身長着籠標付の順序……………五二
 第四節 四ツ身胴拔表周囲の裁方……………五三
 第五節 四ツ身胴拔長着の籠標付及び縫方……………五四

第七節 四ツ身比翼の裁方……………五五
 第八節 四ツ身比翼の籠標付及び縫方……………五六
 第九節 四ツ身羽織の裁方……………五七
 第十節 四ツ身羽織の籠標付及び縫方……………五八
 第十一節 四ツ身被布の籠標付標準寸法……………五九
 第十二節 四ツ身被布の裁方……………六〇
 第十三節 四ツ身被布の籠標付及び縫方……………六一
 第十四節 四ツ身道行の籠標付標準寸法……………六二
 第十五節 四ツ身道行の裁方……………六三
 第十六節 四ツ身被布合羽の籠標付標準寸法……………六四
 第十七節 四ツ身被布合羽の裁方……………六五
 第十八節 五ツ身長着……………六六
第五章 本裁……………六七
 第一節 本裁女物長着の籠標付標準寸法……………六八
 第二節 本裁男物長着の籠標付標準寸法……………六九

第三節 本裁男女長着の重ものつめ方寸法……………七〇
 第四節 三枚重は中を普通となし上をのびし下をつめる振袖の寸法……………七一
 第五節 本裁長着の籠標付方法と要所……………七二
 第六節 縫方順序……………七三
 第七節 本裁胴拔の周圍裁方……………七四
 第八節 本裁胴拔ムクの周圍裁方……………七五
 第九節 胴拔長着の籠標付……………七六
 第十節 胴拔長着の縫方……………七七
 第十一節 本裁比翼の裁方……………七八
 第十二節 比翼の籠標付寸法……………七九
 第十三節 比翼の縫方方法……………八〇
 第十四節 附比翼……………八一
 第十五節 附比翼の籠標付方及び縫方……………八二
 第十六節 単衣の重ねに就て……………八三
 第十七節 重ね衣服に就ての要所……………八四
 第十八節 本裁女物袴纏の籠標付標準寸法……………八五

第十九節 本裁男物袴纏の 標付標準寸法……………八七
 第二十節 本裁女物袴纏の裁方……………八八
 第二十一節 本裁男物袴纏の裁方……………八九
 第二十二節 男物綿入袴纏の縫方順序……………九〇
 第二十三節 本裁女物羽織の籠標付標準寸法……………九一
 第二十四節 本裁男物羽織の籠標付標準寸法……………九二
 第二十五節 本裁羽織の裁方……………九三
 第二十六節 積り方算式の解……………九四
 第二十七節 羽織籠標付の順序方法……………九五
 第二十八節 羽織襟造りに就いての要所……………九六
 第二十九節 羽織縫方の順序……………九七
 第三十節 本裁道行の裁方……………九八
 第三十一節 本裁被布合羽の裁方……………九九
 第三十二節 本裁被布の裁方……………一〇〇
 第三十三節 被布籠標付の方法……………一〇一
 第三十四節 被布縫方の順序方法……………一〇二
第六章 袴……………一〇三

第一節	女物袴の範標付標準寸法	二二
第二節	男物袴の範標付標準寸法	二三
第三節	男女袴の各部名稱	二四
第四節	女物袴の裁方	二四
第五節	女子袴の範標付方法	二八
第六節	女子袴の縫方	二九
第七節	男子用袴の裁方	三〇
第八節	男袴の範標付方法	三三
第九節	男袴の縫方	三五
第十節	袴腰板の造り方	三六
第十一節	男女袴要所の寸法	三六
第七章	男女帯の造り方	三〇
第一節	腹合女帯の造り方	三〇
第二節	男帯の造り方	三三
第八章	和服端物	三六
第一節	春褌西洋前掛の裁方	三六
第二節	春褌アブロン前掛の縫方	三六
第三節	春ボタン西洋前掛の裁方	四〇
第四節	春ボタン西洋前掛の縫方	四〇
第五節	寝冷え知らずの裁方	四三
第六節	寝冷え知らずの縫方	四三
第七節	簡易なる寝冷え知らずの裁	四五

第八章	方	四四
第九節	シャツの裁方	四四
第十節	シャツの縫方	四七
第十一節	ズボン下の裁方	五〇
第十二節	ズボン下の縫方	五一
第十三節	足袋の造り方	五一
第十三節	足袋の縫方	五二
第九章	注意のかずく	一五
第一節	衣服の調製	一五
第二節	衣服の保存法	一六
第三節	汚点抜き法	一六
第四節	衣服の洗濯	一六

目次終

裁縫祕術寶典

東京女子家政學院編纂

第一章 裁縫に就ての注意

第一節 運針法

運針は單純な技術ではあるけれども、衣服を縫ふ上に於ては、第一の要素である、而して其仕立あげた品物が、手際よく出来ると出来ぬとは、取りもなほさず運針の上手下手に由るものであるから、初學者は勿論、熟達して居るものでも、修業中は充分に練習しなければならぬ。

運針をなすに當りては、先づ姿勢を整へ、(胸部を少し張る様にし、體を眞直にそして頭を少しく前方に屈す)布を胸部の向ふ眼先八九寸位離して持ち、

裁縫に就ての注意

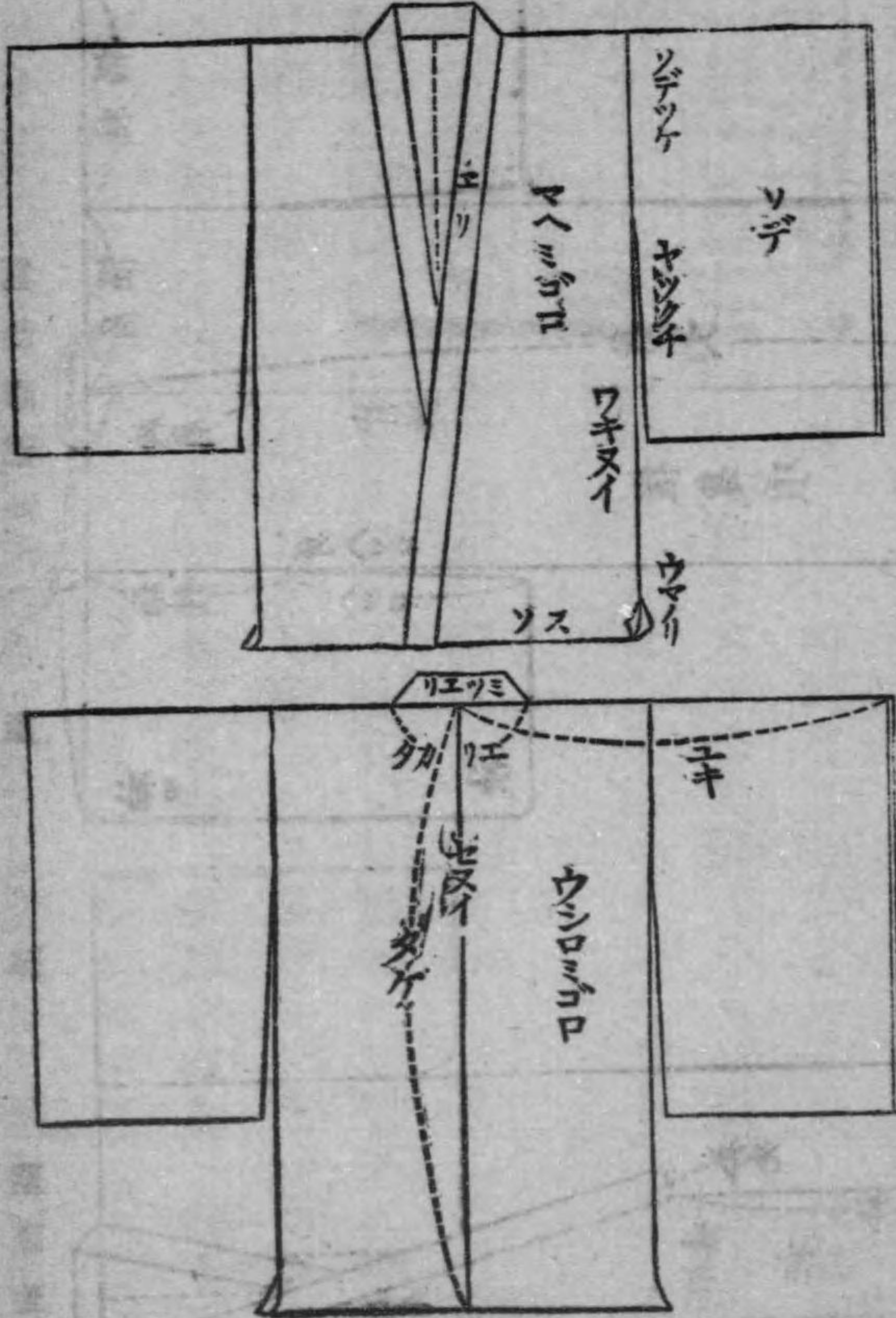
兩臂を離して兩手を同時に動かしながら縫ふのである、それで運針用布は二尺位の布を二つ折にして、始めは針目を意とせず、専ら針の運びを練習し、追々慣れるにしたがつて、針目を注意して直線に速く縫ひ得る様につとめるのである。然して充分運針法に熟練したならば、實物の縫ひ方に移るのである。實物の縫ひ方に當りては、其の針目は綿布ならば凡そ一分五厘、絹布ならば凡そ一分を適當とするのである。

第二節 普通帛布類の丈及び幅

木綿類 普通反物の丈は二丈五六尺乃至八尺、幅は八寸五分より九寸五分位までであるのが通例である、之を稱して一反といひ、二反續きたるものを一疋といふのである。

大幅物 縮緬又はモスリンなどは、幅一尺六七寸より二尺位あるものを大幅物と云ひ、一尺二三寸位あるものを中幅、九寸五分以上一尺位あるものを通

第一圖 襦袢各部の名稱



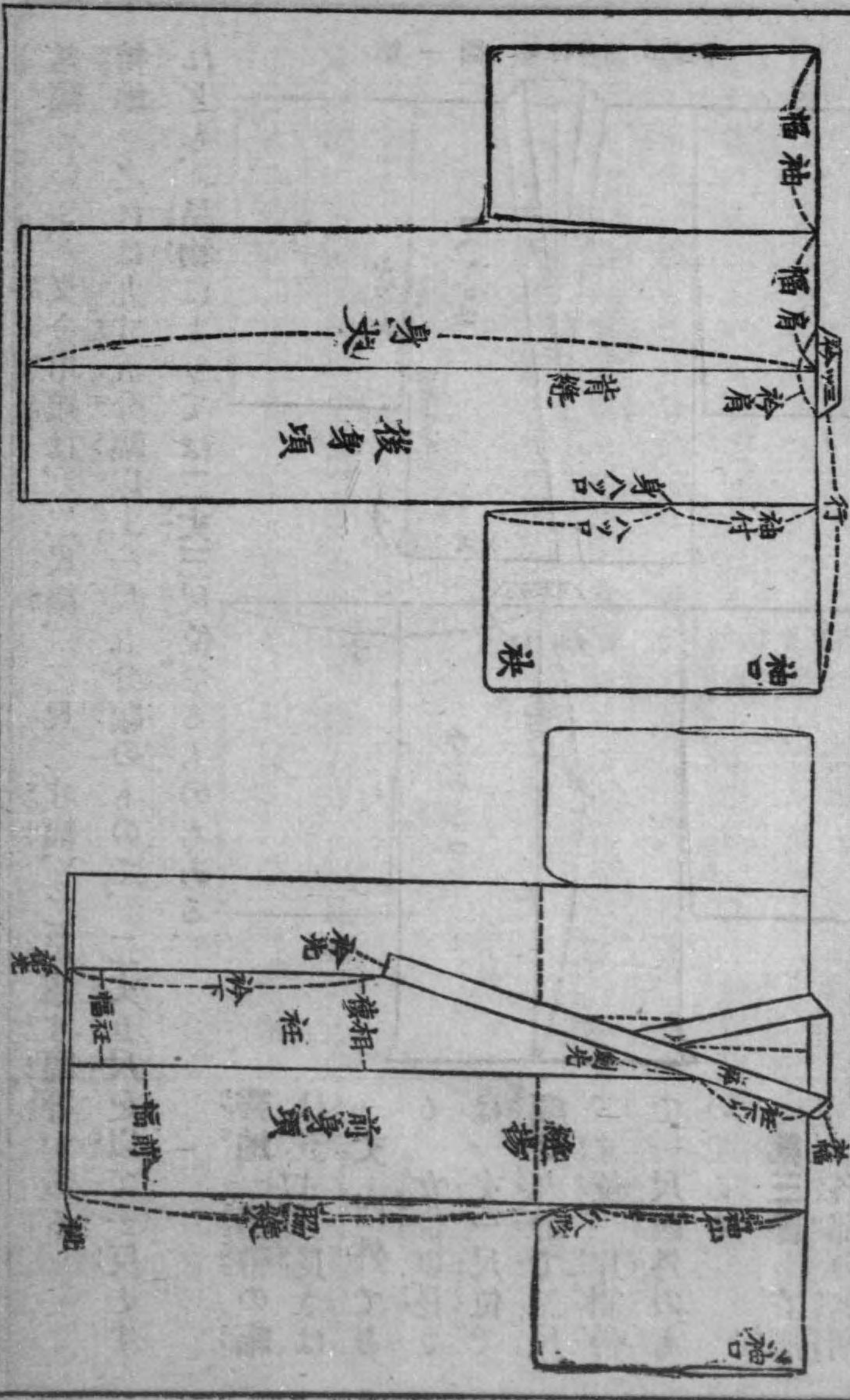
常幅といふ、又金巾類は、二尺幅、二尺二寸幅、二尺四寸幅等がある。
袴地 之れは九寸五分幅以上一尺五分幅のもので、二丈五尺を以て一反とす
れども、品物によりては二丈三尺位なるものもある。

帶地 男帶の幅は五寸、長さは一丈内外である、女帶の長さは一丈一尺位で幅は丸帶で二尺二寸位、片側帶で一尺内外のものである。

第三節 衣服各部の名稱

裁縫に就ての注意

女服後面圖 第二圖



男服前面圖 第四圖

第四節 解物

衣服を裁縫する以前に、解物の練習も又非常の参考になるものである、然し之を解き行く内にも、其の如何なる縫方であるか、又如何なる裁ち方であるかといふことに一々注意すべきは勿論である、只順序もなく解くときは、絲屑を拵らへるのみにて、或は布を傷める恐れがある故、左に其順序を略述することとする。

- 一、女襦袢の解き方 衿裏を解いて、衿を外し、次に、裾、兩袖を解き、兩脇を放し、脊筋より袖口、袖下、人形という順序に解くのである。
- 一、単衣の解き方 袖口より人形、次に裏衿、衿下(高づま)裾を解き、それより表衿を外して衿を取り、兩衽、兩袖を取り、袖下、兩脇、脊すぢを解くのである。
- 一、袴の解き方 裏衿より始め、衿下(高づま)裾のトヂを外し裾を解き、

衿トヂを取つて兩袖口のトヂより兩脇トヂ脊トヂを取つて表裏を二つに放し、表の衿先き、兩袖、兩衿、兩脇、脊すちを取り、次いで裏の袖口（女物なれば人形あり）を取り表と同じ順序で解くのである。

一、綿入の解き方 順序は衿と殆んど同じである、然しトヂが無いだけ手数を要しない、尤も綿の抜き方は兩袖口のヒツ、ケ、人形のヒツ、ケを解いて、兩袖より衿、衿より脇、脇より裾、それより脊を放せばよいのである、綿は抜くとき形を崩さぬやう注意しなければならぬ、不潔にならぬ以上は、再度使用し得らるゝのである。

一、羽織の解き方 表衿を解いて衿を取り、衿トヂを取つて次ぎに袖口、袖下を解いて袖を取り、襦、脊筋を解のである。尤も是れは衿羽織の解き方を示せるものにて單羽織にはトヂは無いのである。

一、袴の解き方 袴は衣類と仕立の異なるだけ、其の解方も又相違してゐる、是は初めに紐の緒目を解き、腰板を外し、裾を解き、次ぎに、相引き、さ

さ襷、相のり、奥布、襦と、解くのを順序とする。

第五節 とめ 糸

とめ糸とは、衣類裁縫の時、糸もて止むる箇所にて大略左の通りである。

一、襦袢 衿の左と右に二ヶ所、三ツ衿に一ヶ所、右と左の衿先きに二ヶ所、右と左の袖付に二ヶ所、左右の袖口に二ヶ所、左右脇縫に二ヶ所、裾口に五ヶ所、以上十六ヶ所。

一、男衣類 袖形二ヶ所、袖口二ヶ所、脊縫一ヶ所、脇縫二ヶ所、衿縫目二ヶ所、劍先二ヶ所、衿先二ヶ所、三ツ衿一ヶ所、袖付け二ヶ所、裾先二ヶ所、以上十八ヶ所。

一、女衣類 袖形二ヶ所、袖口二ヶ所、脊縫一ヶ所、脇縫二ヶ所、衿縫目二ヶ所、劍先二ヶ所、三ツ衿一ヶ所、袖付け四ヶ所、八ツ口二ヶ所、衿先二ヶ所、裾先二ヶ所、以上二十二ヶ所。

一、羽織 袖形二ヶ所、袖口二ヶ所、脊縫一ヶ所、襠四ヶ所、紐付け二ヶ所、三ツ衿一ヶ所、衿先き二ヶ所、袖付け二ヶ所(女物は袖付)の十六ヶ所。

第六節 衣類を縫ふ順序

一、単衣 初めに袖を拵へ、次ぎに脊筋(是れは二度縫をするのである)を縫ひ、兩衿を付け、次ぎに衿を付け、それより兩脇を縫ひ、衿下(高裙)より裙へ拵け、衿を付け袖を付けるのである。

二、袷 裏袖口を付け袖を拵へ、次ぎに裏表の脊筋を縫ひ、以下は単衣の順序に同じ、然し袷は裏布と表とを四ツ縫にするのである。(四ツ縫ひとは裏と表と同時に縫ふのである。)

一、綿入れ 大體に於て袷と變りなし、四ツ縫は要せず、裏表共に拵へた後、袖を付け、裙を合せ、然して綿を入れ、袖口、衿下(高裙)、衿裏等を拵るのである、但し綿を押へるため、袖口、裾、衿下(高裙)の三ヶ所にトヂ糸を入れねばならぬ。

總じて衣類を作るに當りては其の初めに於て、袖拵へをすることが最も肝要である。

第二章 一ツ身

第一節 一ツ身襦袢 篋付標準寸法

人によつて、大小がありますから、寸法を一定することは不可能であるが、大體左の標準によれば充分である。

袖丈	五寸以上	身八ツ口	二寸
袖幅	一ばい	馬乗	二寸
袖付け	三寸五分	衿肩	八分
身丈	一尺以上	衿幅	八分
身幅	後幅、前幅一ばい		

第二節

一ツ身襦袢裁方及び積り方

一、常幅(九寸五分)長さ四尺五寸の布を以て一ツ身襦袢の裁方、積り方は第三圖の如し。

圖三第

寸九	寸二尺一	寸六
リ エ	マ	ウ シ
リ エ	エリカダ	九寸五分
リ エ	ヘ	ソ
		テ

積り方 $(45 - 6 \times 2 - 9) \div 2 = 12$ 身丈

圖四第

同	同	同	同	同	同
七寸	袖	袖	九寸五分	ウ シ	エリカダ
三寸	リ	エ	分五尺一	マ	ヘ

身丈 $(42 - 5.25 \times 4) \div 2 = 10.5$

二、常幅 四尺二寸の布を以ての裁方と積り方(第四圖)

三、常幅の布にて、衿を別切に

常幅	衿肩明	身丈	衿幅	衿丈	袖幅	袖丈
八分	八分	一尺五分	二寸五分	一尺五分	七寸	五寸二分五厘

しての裁方と、積り方(第五圖)

圖五第

尺一	尺一	寸五	寸五
マ	エリカダ	ウ シ	九寸五分
ヘ			袖

用布 $(5 \times 2) + (10 \times 2) = 30$

寸三	尺二
リ	エ

衿丈 $(10 + 1.5) \times 2 = 23$

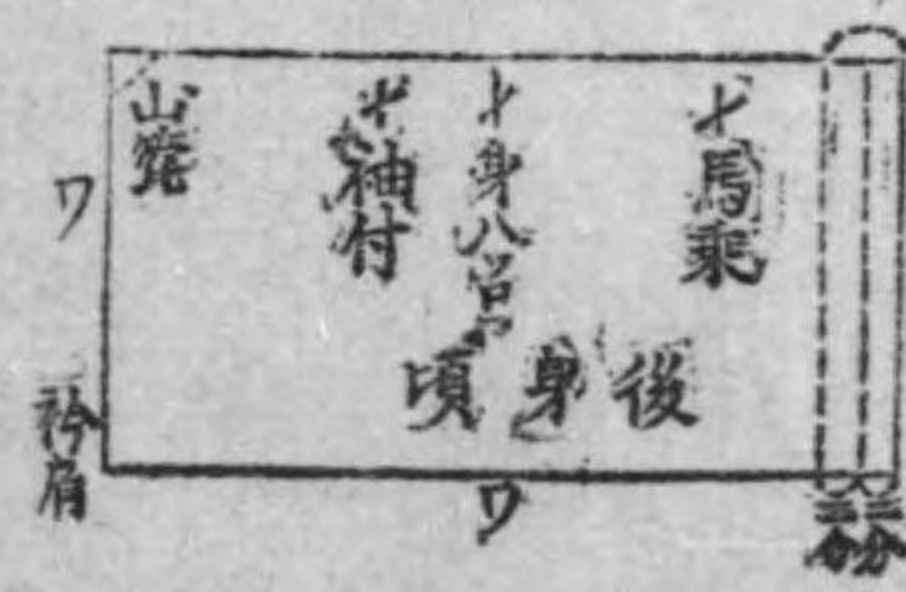
衿肩	身丈	袖幅	袖丈	長さ	幅
八分	一尺	四寸七分五厘	五寸	二尺三寸	二寸五分

第三節 一ツ身襦袢籠標付方

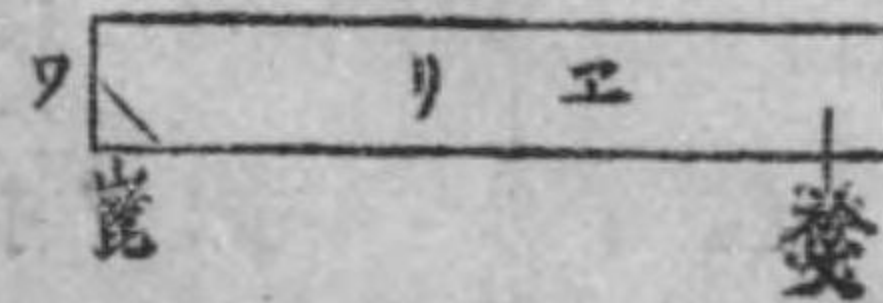
第六圖 方付標籠袖



方付標籠頭身



方付標籠衿



第四節 一ツ身襦袢の縫方

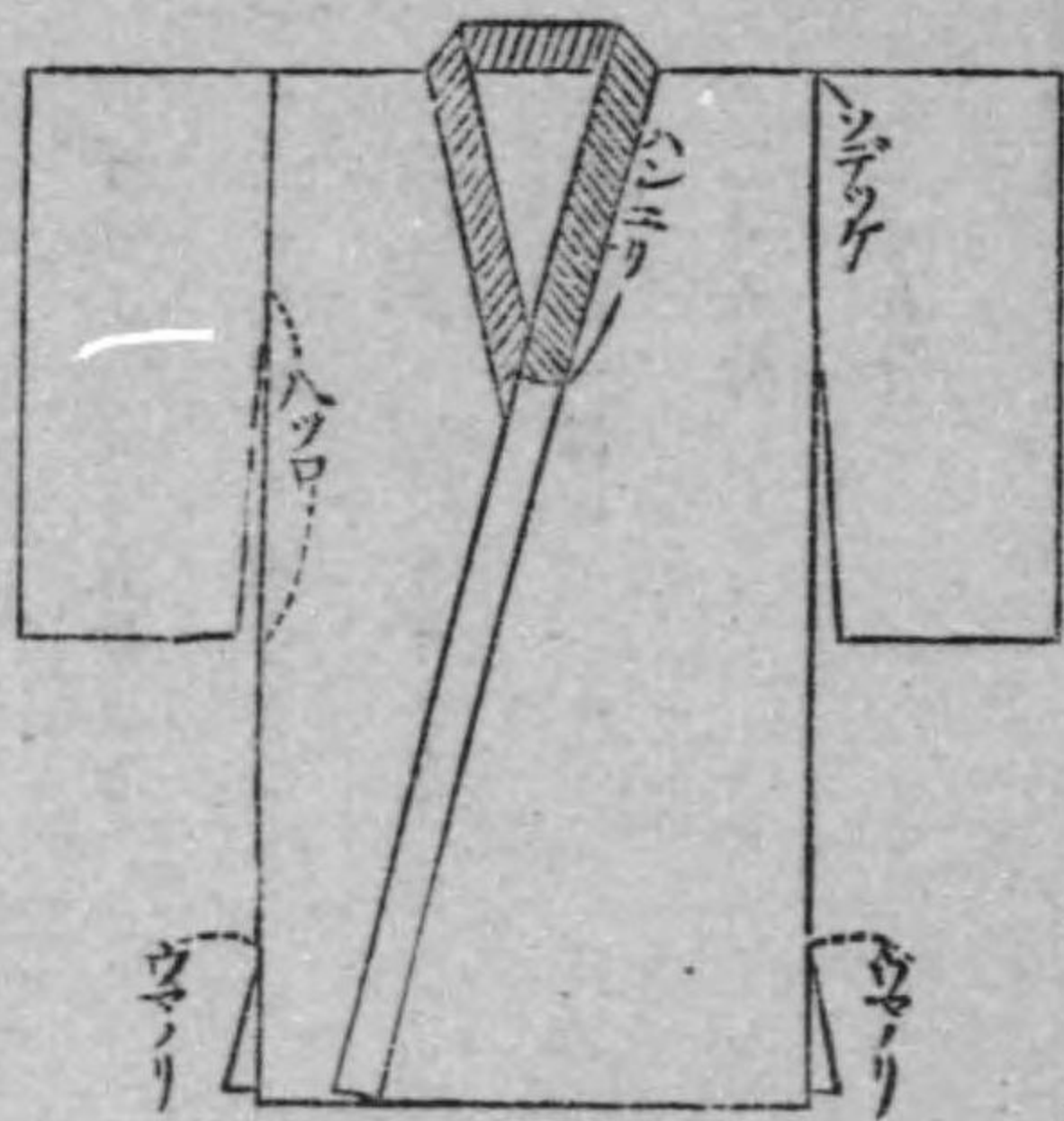
縫方の順序としては、初めに袖を拵らへるのである、即ち袖の表を一分通り程に縫ひ、是れを引返して裏から二分通り程縫ふのである、是を袋縫とい

ふ、然し袖付けの處だけは残しておくのである。

次に胸は衿肩の處から前と後を二つに折り、身八ツ口の籠標付より、馬

第七圖

形籠の衿襦身ツ一り上縫



込みは裏の方へ返し、次に衿を拵け半衿をかけ、袖を付け縫目を袖の方に返し、次で身八ツ口を耳拵するのである。

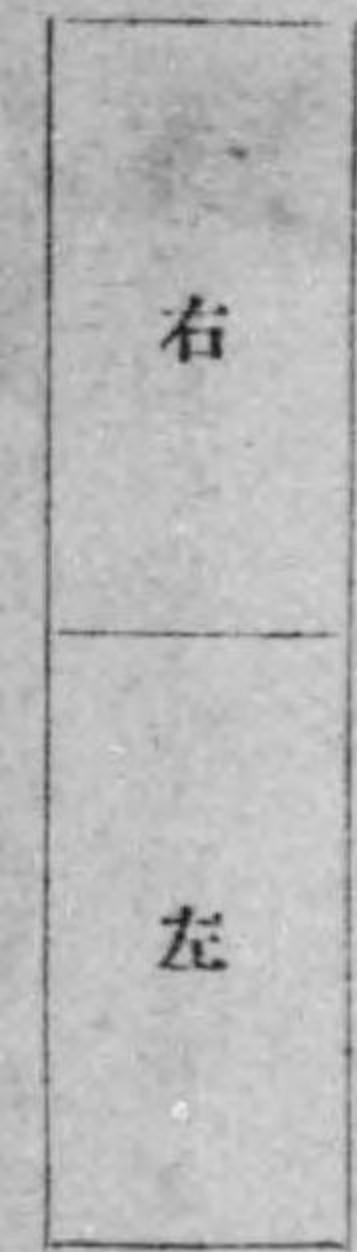
乗の籠標付まで脇縫をして充分に折を付け、次に馬乗を拵け、裾拵けをなし、次で衿に及ぶのである、此の衿は衿肩より前幅の處まで斜めに一杯に折をつけ、其の折目の通りに衿を付けるのである。然し其の衿の縫目は、衿の方へ返し、衿先は一分ほど中を縫ひ、縫

第五節 一ツ身長着

一、一ツ身長着箇附標準寸法

- 袖丈 一尺より一尺四寸まで
- 袖幅 五寸より五寸五分まで
- 袖付 三寸五分より四寸まで
- 身丈 二尺より二尺五寸まで
- 身幅 前後共一ばい
- 下やつ 二寸五分
- 衽下 二寸五分

第八圖 方裁の衽



だき幅 前裾より四分づめ

衽幅 二寸五分より三寸まで

裙下 五寸内外

相裙 衽幅より二分づめ

襟幅 八分より一寸まで

襟肩 八分より一寸まで

二、一ツ身長着裁方及び積り方

裁方の以前に衽の二三を参考に示すこととする。
第八圖は普通の裁方である、棒衽

といふのは是れである。

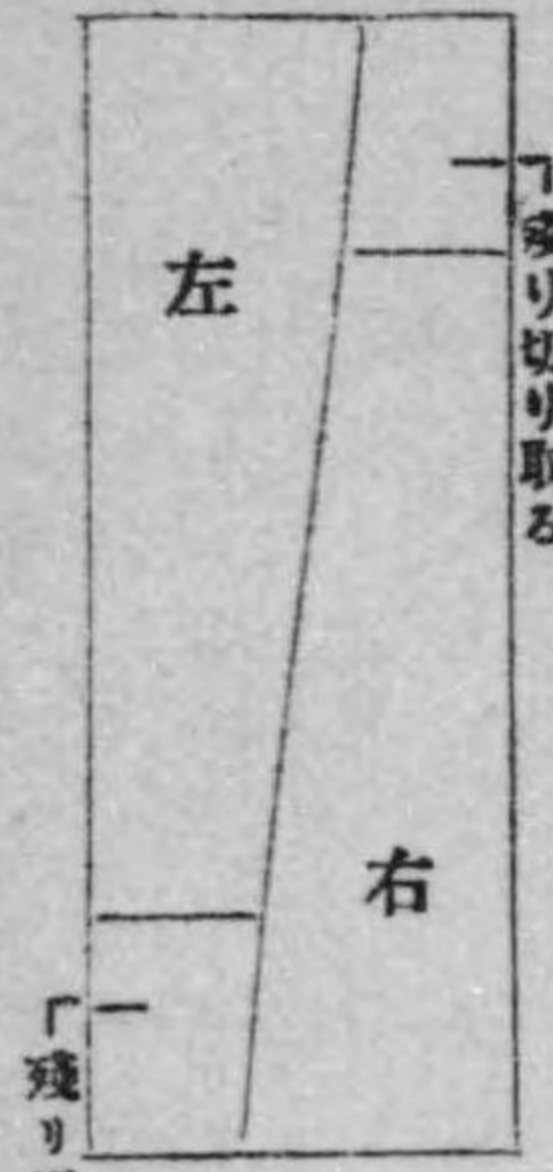
第九圖は鍵衽裁ちといふ、是れは用布の丈けに不足を生じたる場合に用ゆるものである、然し此裁方は裁断とときに充分注意しなければならぬ、萬一裁ち誤まつた時は取り返しが出来ぬ故、縫ひ替の時に自由が利くやうにしなければ、第八圖の裁方に出来得る限り倣ふべきである。

第九圖 方裁の衽



ばならない、自由が利くやうにするには、第八圖の裁方に出来得る限り倣ふべきである。

第十圖 方裁の衽



布の時に裁つ方法である。

第十圖は俗に柳衽、又は斜衽とも云ふ、是れは第一の衽には勿論のこと寸法が足らず、第二の衽には短かすと云ふやうな用

第十一圖は第十圖の變つた裁方で、第十圖の布よりも尙短かき布の時に用

ふる方法である。圖の如く第十圖は各劍

先きに豫猶の裂を殘してあるけれども、

是れは一ばいに使ふのである。

總じて衣類を仕立あげるについては、

裁方の積りは最も大切なものである故、充分に注意をしなければならぬ。

第十圖 裁方の証



並幅 (九寸五分) 長さ一丈の布を以て、棒衽としての裁方及び積り方 (第

十二圖

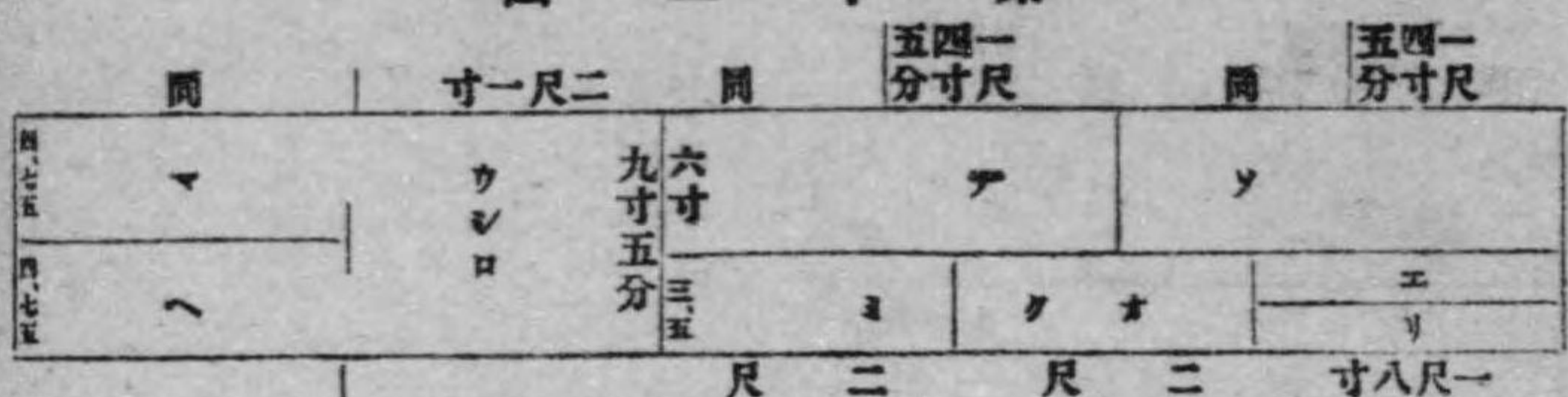
四、釣 衽 裁

並幅用布一丈を以て、袖丈は少し短くとも、身丈を長く作らんとする場合

は、次の裁方によるのである。(第十三圖)

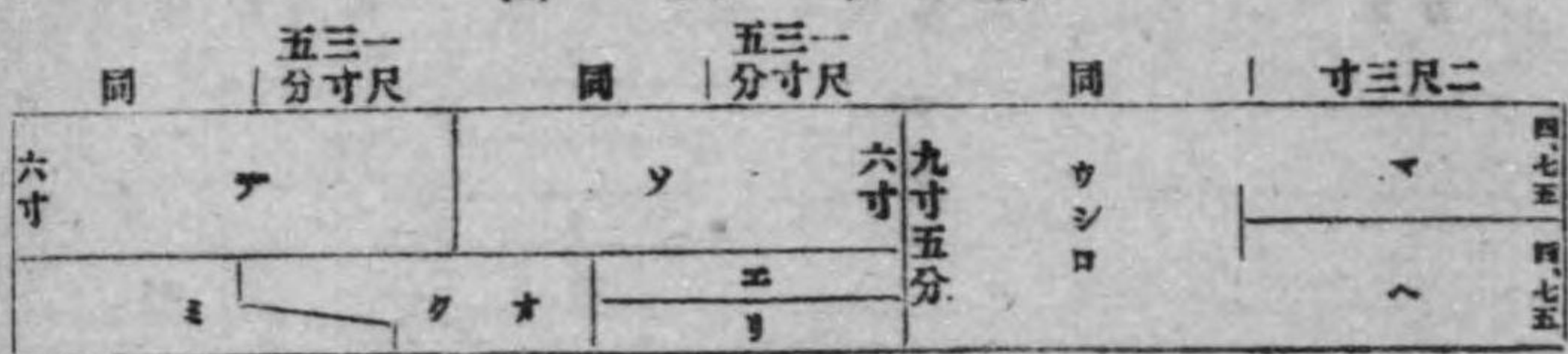
五、別 衽 裁

第二十圖



身丈 (100. - 14.5 × 4) ÷ 2 = 21.

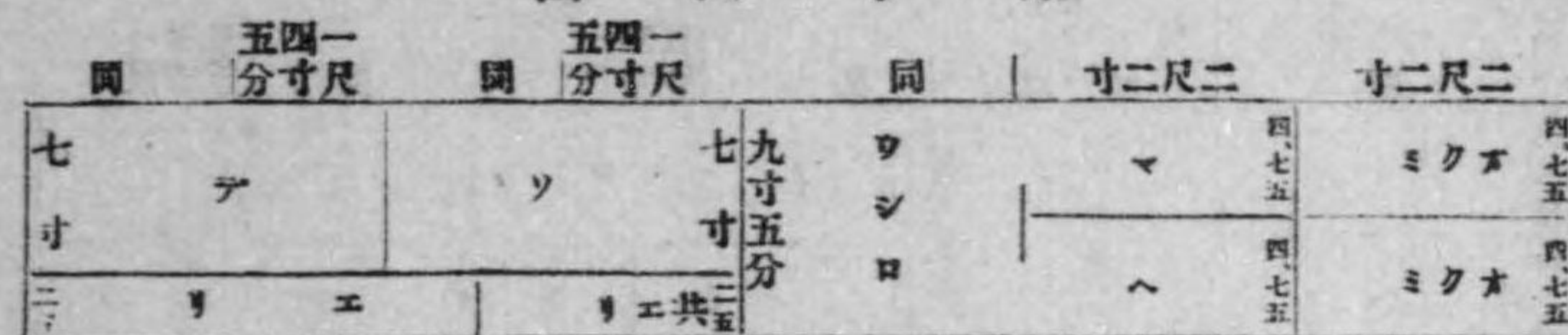
第三十圖



身丈 (100. - 13.5 × 4) ÷ 2 = 23.

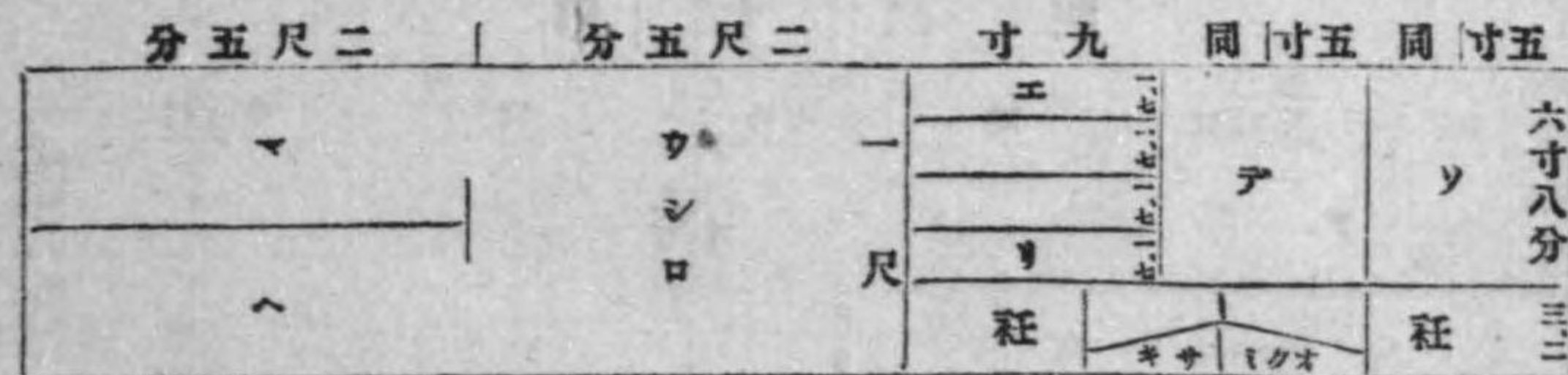
一ツ身を何故別衽裁として作るかといふに、普通の一ツ身にては前がハダカツて見苦しく、といふて三ツ身では大き過ぎるといふ場合に用ふる裁方である、今假りに一丈二尺二寸の用布を以て作らんとせば、裁方は第十四圖の如くである。積方の算式中に空として二寸を加算する理由は、衽丈は身丈より二寸少くてよいのに拘らず、袖用布を減じ

圖 四 十 第



$$\frac{\text{總尺} \quad \text{袖丈} \quad \text{身丈}}{(122.0 + 2.0 - 14.5 \times 4) \div 3 = 22.0}$$

圖 五 十 第



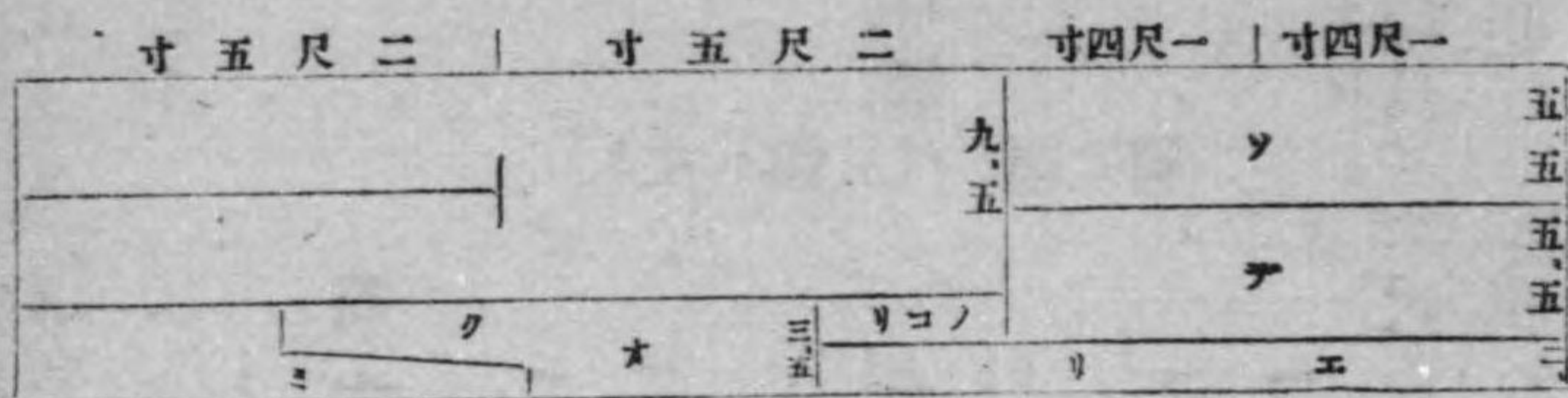
$$\frac{\text{總尺} \quad \text{袖丈} \quad \text{身丈}}{(70. - 5. \times 4 + 9.) \div 2 = 20.5}$$

て後ち三分して身丈を知る方法あるが故に、其の用布に二寸といふものを假りに加へ、丈尺を敷の上に長くして置くのである。

筒袖 幅一尺長さ七尺の片面物を以て、一ツ身の筒袖を裁たんとせば第十五圖の如くするのである。

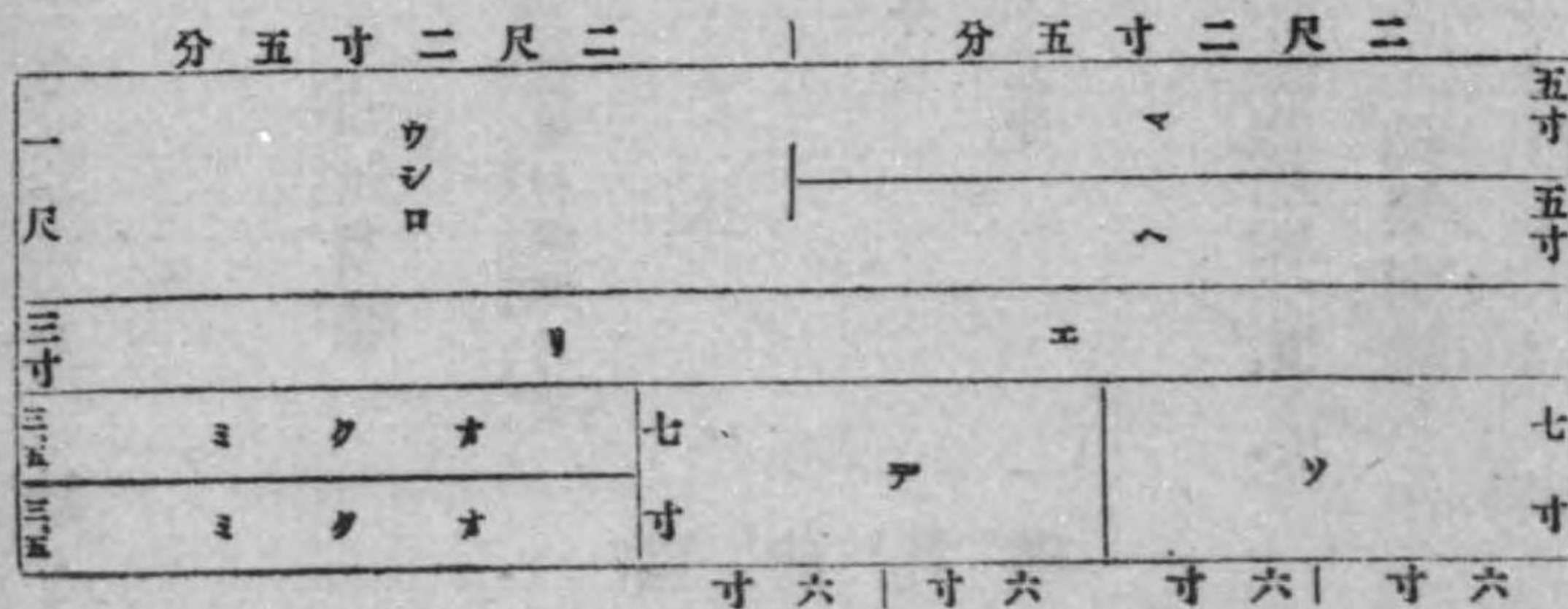
中幅一尺三寸長さ七尺八寸の布を以て、一ツ身を作らんとせば、第十六圖に依るのである。但し袖丈は一

圖 六 十 第



$$\frac{\text{總尺} \quad \text{袖丈} \quad \text{身丈}}{(78. - 14. \times 2) \div 2 = 25.}$$

圖 七 十 第



$$\frac{\text{總尺} \quad \text{身丈}}{45. \div 2 = 22.5}$$

尺四寸裁切とす。

大幅物にて一ツ身筒袖を作らんとするには、第十七圖の如くに裁つのである、用布は二尺幅の長さ四尺五寸、此裁方によれば、袖幅は比較的廣いけれどもそれを脱落したところで其布片が他に使用ひ得る程にもなき故、通常斯くの如くにす

るけれども、並幅同様に幅をきめて、其の餘りを脱落してもそれは各自の隨意である。

第六節 一ツ身袖無羽織

一、一ツ身袖無羽織縫付標準寸法

一尺五寸内外

いつばい

上で二分下で三分

下で一寸二分上で五分

一寸一分まで

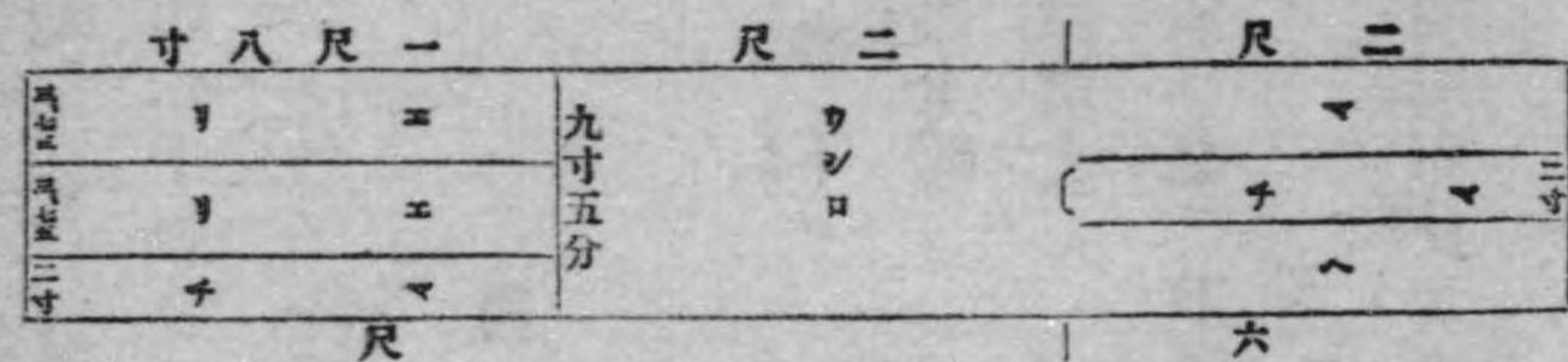
脇あき	六寸内外
前下り	五分
乳下り	四寸五分内外
襟幅	一寸

身丈
後幅
襟付縫代
襟幅
肩幅

一、一ツ身袖無羽織裁方及び積り方

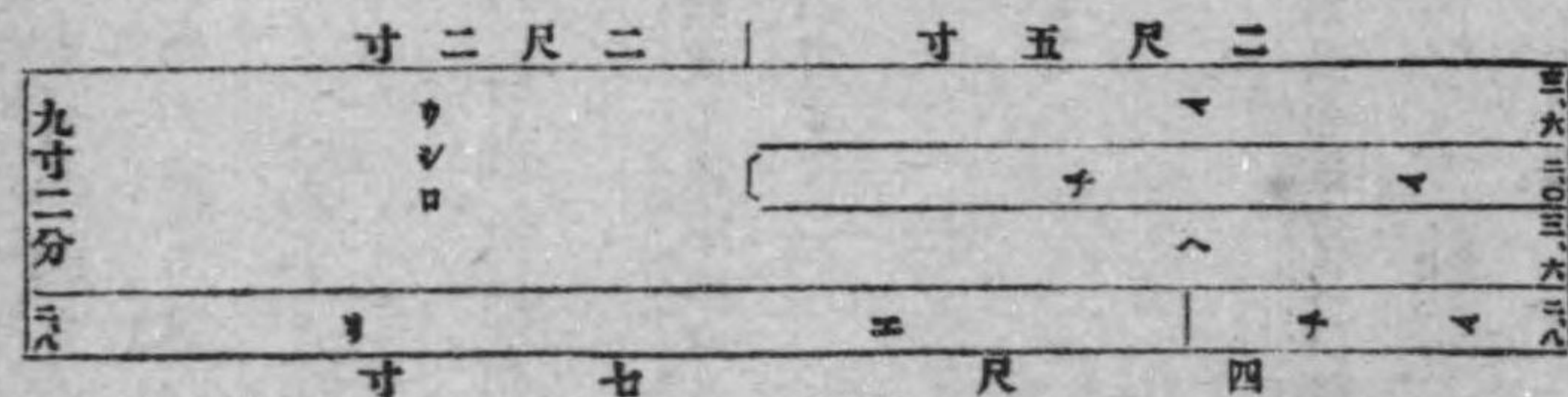
並幅長さ六尺の用布を以て、袖無羽織を作らうとするには、次のやうになり、而して裏布を積り出さんとするには、其の算式は下記の如くである、算

第十八圖



$$\text{身丈} (16.5 \times 4) + \text{下} (.5 \times 2) + \text{縫代} (.5 \times 4) + \text{襟布} 18.0 - \text{表用布} 60.0 = 27.0$$

第十九圖



$$\text{身丈} (16.5 \times 4) + \text{下} (.5 \times 2) + \text{縫代} (.5 \times 4) - 47.0 = 22.0$$

式を解いて見れば、身丈を四倍するは表二倍と裏二倍とを合せたるもので、下りを二倍するは一幅を二つに裂き、右と左の前幅となる、其の裏表即ち二倍である、襟丈を一ツだけ加ふるは、二ツに裂きて右と左の前幅となす故である、然る故に其の總てを加算したる總尺より表用布の六尺を減けば、即ち裏用布の丈尺が出るのである。(第十八圖)

中幅(二尺二寸)長さ四尺七寸の用布を以て、袖無羽織を作らうとするには前の如くするのである。裏布の積り算式は前記の如くである、其の解は前文並幅のところを参照せられよ。(第十九圖)

第七節 一ツ身袖無被布

一、一ツ身袖無被布附標準寸法

竖襟下

二寸五分より三寸まで

竖襟上幅

二分づめ

小襟總丈

六寸より七寸まで

其他は總て羽織に同じ

竖襟幅

二寸五分より三寸まで

小襟幅

二寸五分より三寸まで

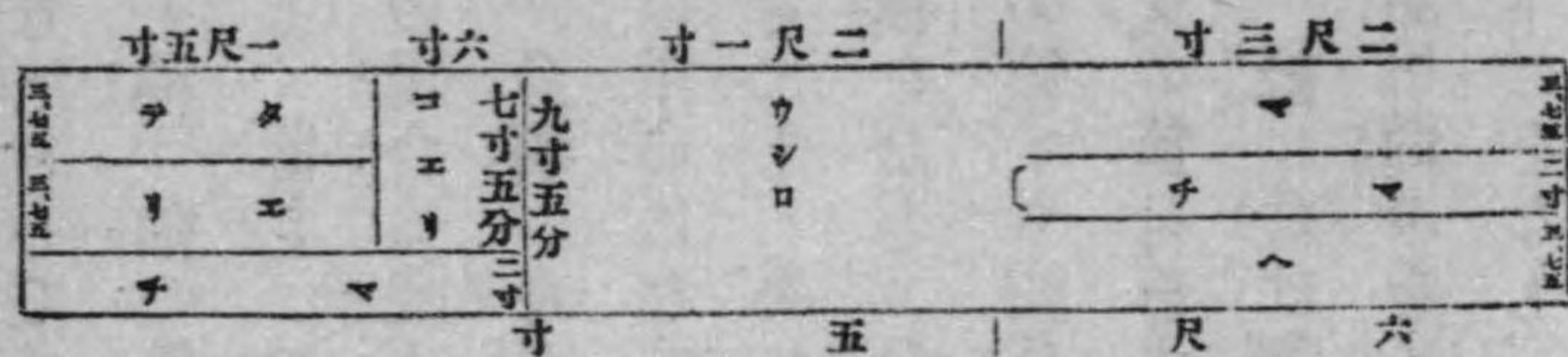
小襟と竖襟のあき

一寸

二、一ツ身袖無被布裁方及び積り方

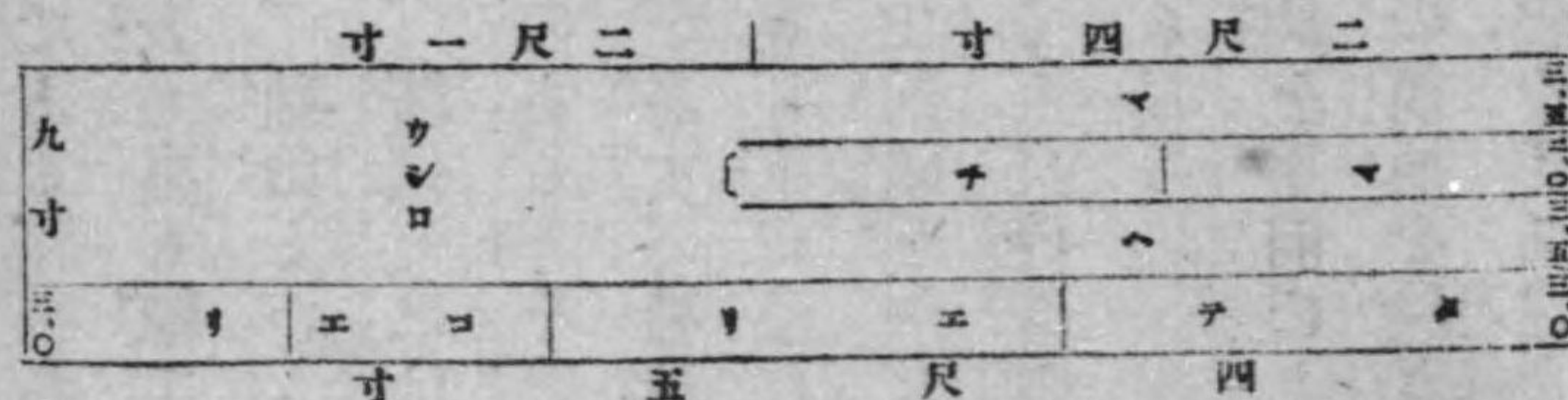
並幅用布長さ六尺五寸を以て、袖なしの被布を作らんとするには第二十圖の如くするのである。又裏布の積り方を知らんとするには、第二十圖算式の

第十二圖



身丈 (16.5 × 4) + 下り (.5 × 2) + 總代 (.5 × 4) + 竖襟 (15.0 × 2) + 小襟 表用布 裏用布 + 6.0 - 65.0 = 40.0

第十二圖



身丈 (15.5 × 5) + 下り (.5 × 2) + 總代 (.5 × 4) - 表用布 裏用布 - 45.0 = 35.5

如くにするのである。

中幅(二尺二寸)長さ四尺五寸の用布を以て、袖なし被布を作らうとするには第二十一圖の如くする、又裏用布の積りを知うとせば、上記算式によればよい。

第八節 一ツ身長着

籠付順序及び方法

一ツ身長着の籠付順序と云へば、初めに袖、次に身頃、衿といふ順である。

次に方法としては左の如くである。

一、袖 袖の篋標付は、表も裏も總て一枚づ、中表に折り、輪を左方に正しく置き、袖丈、袖付、袖山といふ順に標を付けるのである、然し筒袖の場合は縫代若しくは、縮代だけは平に篋付するのである。

二、身頃 身頃は縦の輪のある方を上の手前として、衿肩の切込の處を左の手前になる様に置き、身丈、袖付、下やつ、後幅、肩山といふ順に標をなし、夫れを左に除き、下に残れる前身の左の手前の所で、衿下りの標をなし、次は裾の所で前幅を一ばいにきめ、又下やつの邊で前幅を裾の幅より四分づめにし、又衿肩の切込の處で切込より一分入れて、縫代の篋付をするのである。

三、衿 衿は劍先を左に鉤を手前にし、二枚重ねて正しく置き、一旦裾の布の曲りを正して不揃の箇所を缺き落し、次に衿幅をきめ、表裾の切り下げをなし、又縫代の標をして之を脇へ取り除き置き、更に裏衿を前と

同様布曲りを正して衿幅をきめ、裏裾縫代の標をなし、又手向ふの處で衿の二倍の寸法に一寸標をなし、更に表衿を其の上のせ、裏表の裾先の標を合せて待針を打ち、又手向うの方は衿の二倍の標と、表衿の標とを合せて待針を打ち、次は表衿の縫代の標より左へ衿丈をきめ、其の所で一分の空篋標をつけ、次に右の手前の處で裾下即ち相裙をきめ、其の處で衿幅を二分づめにし、幅の標をつけ、夫れより全體に互りてチヨイチヨイと篋標を付けるのである。

四、衿 衿は初めに中表とし、二枚を重ねて正しく置き、山はぎの標より次に衿丈をきめ、又劍先相篋標をつけるのである。

第九節 一ツ身長着の縫方

順序として、初めに八つ、袖口をあけ、表脇、裏脇を縫ひ兩衿をつけ、次に衿をつけ兩袖をつけ、夫れより裾を縫ひ合せて綿を入れ、裾先を作り裾下

を縫ひ、(又は拵け)次に衿をとち且つつけ、又袖口、振を拵るのである。

第十節 一ツ身袖無羽織の縫方

初めに身頃の裏表の裾を合せ、縫目の裏の方へ倒して前下りを篋標の通りに縫ひ、兩まちを寸法に合せて上の方を綴ぢ、後脇の裏表の身頃にまちを挟んで四ツ縫にとめ、次ぎに前の方も同様に縫ふのは左右とも同様である、次ぎは脇明を表より二分つめて拵け、夫より衿の端にて乳の裂を(幅で約一寸通り裁ち切る)取り、乳を作り、身頃の中邊より下方へ約六寸の處へ左右共に付け、次ぎに衿綴を濟ませ、衿を身頃の裏面より付け、衿の方へ縫目を一歩ばかり倒し、衿先を下りの篋標の通りに折りて縫ひ、其縫目を表の方に倒し、衿を拵るのである。

第十一節 一ツ身袖無被布篋標付順序及び方法

一ツ身袖無被布の篋標付順序は、身頃より襟、立衿、小襟といふ順である、次ぎに方法としては、左の如くである、初めに前身頃は第二十二圖第一の如く、脇あきの篋標を付け、次ぎに裏の繋ぎの篋標を入れ、裾の下りの篋標をつけるのである、後身頃は前と同様に脇あきに次いで裏のつなぎ等第二の如く、次に襟、立衿等は圖の如く順次篋標するのである。

第十二節 脊紋及び紐留の膝方の縫形

産衣の脊に入る、十二針は、脊は八つ口と同じ位ゐの並びより上に向け、後衿の一寸五分ほど下のところまでに第二十四圖の形ちに縫ひ上げ、男兒なれば其端を左へ、女兒ならば右に斜に縫ひ下げるのである、然し男と女と其針の使ひ方に相違がある、使用の糸は何れも紅白のものを合せ用ゆるものである、又針の使ひ方を堅糸を九針、斜糸を三針とする向もあるのである。

形 圖 三 十 二 第 春

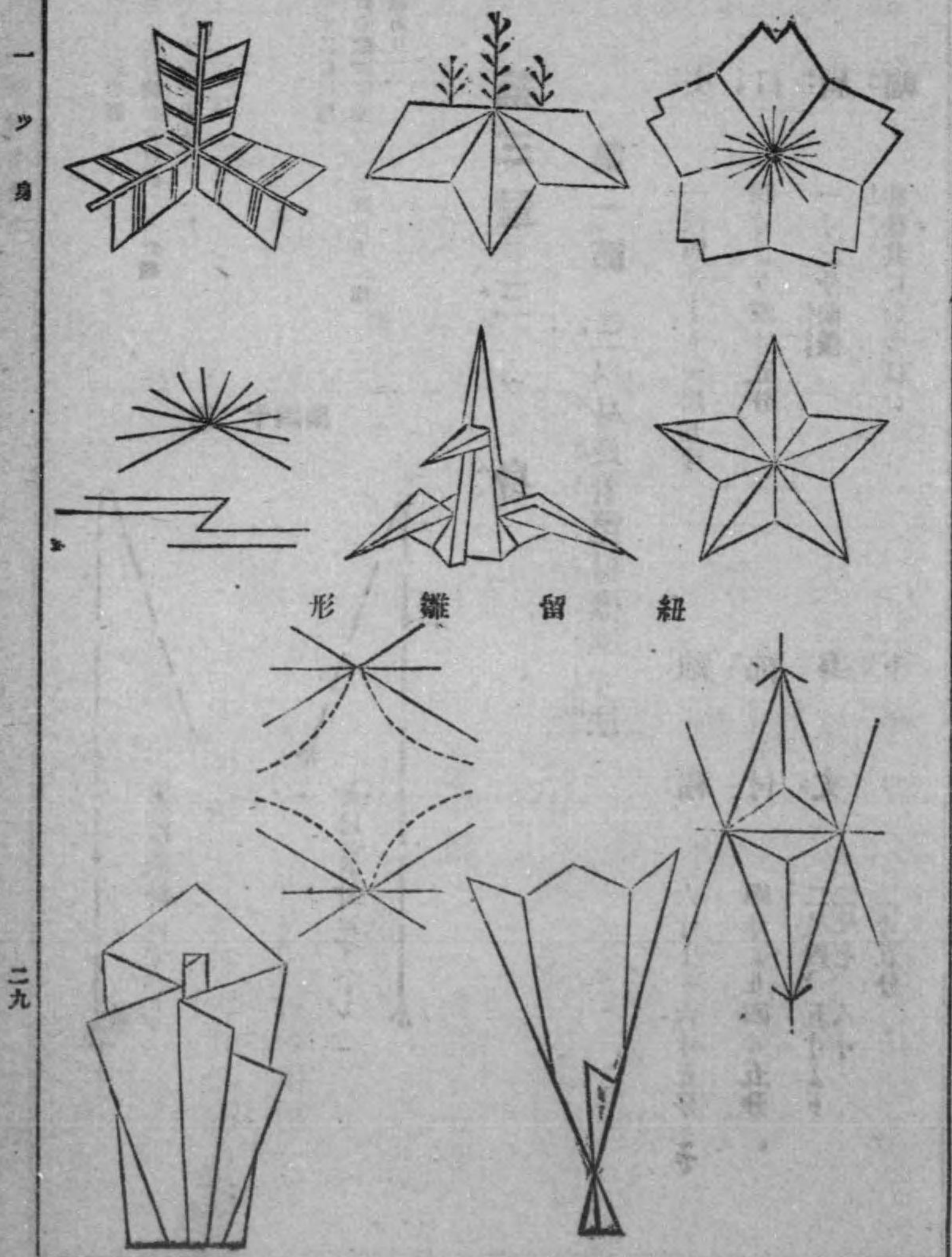
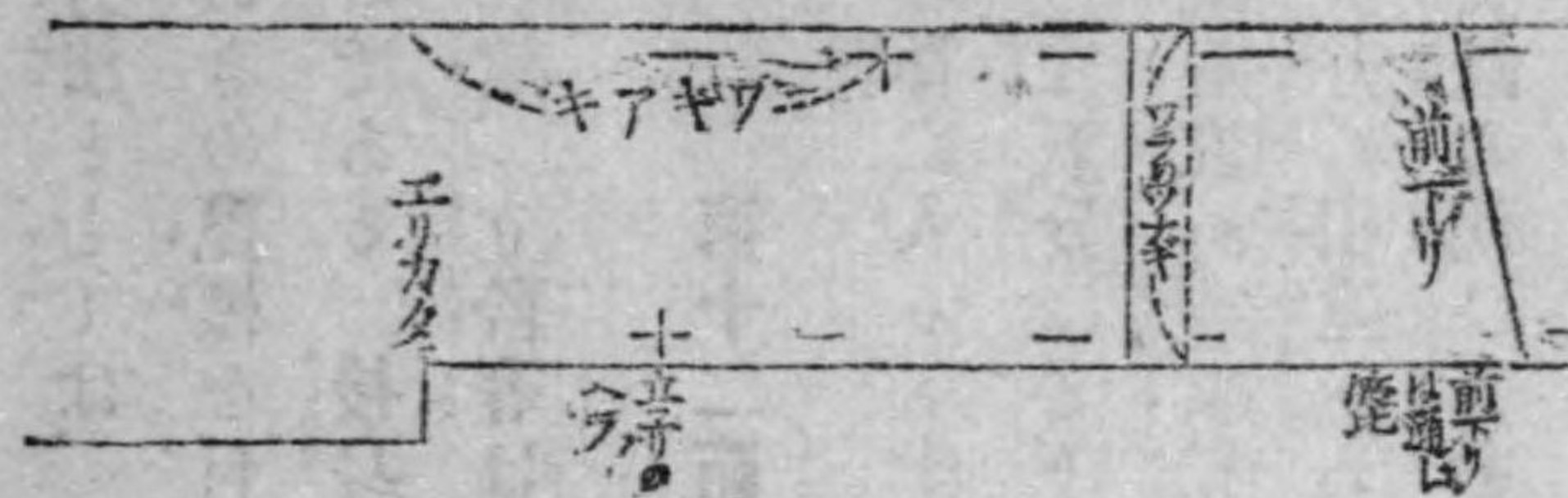
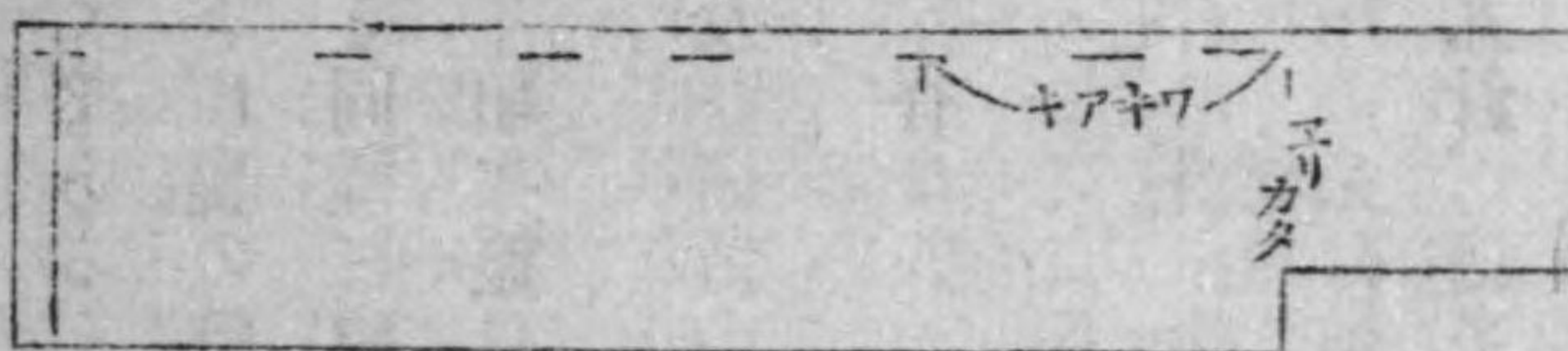


圖 二 十 二 第

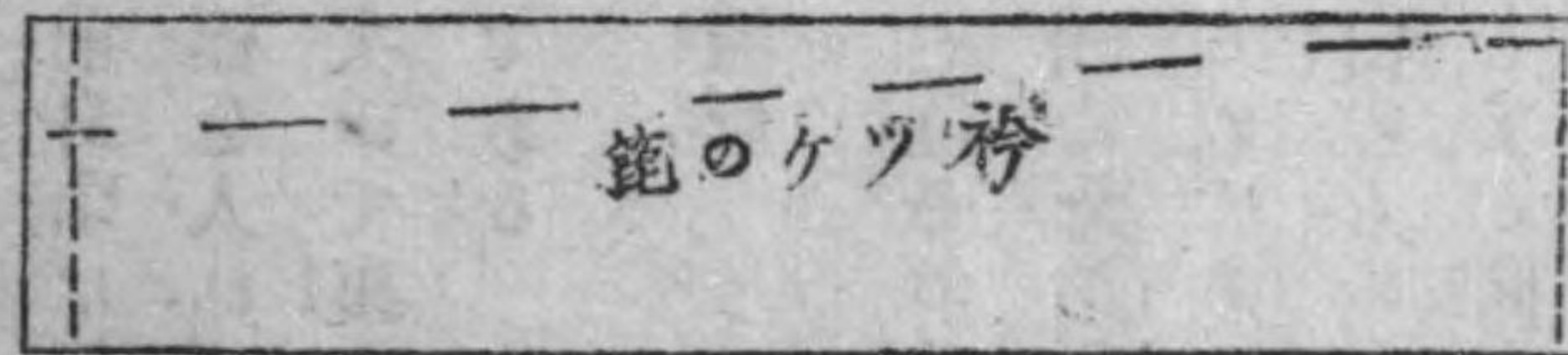
頃 身 前 一 第



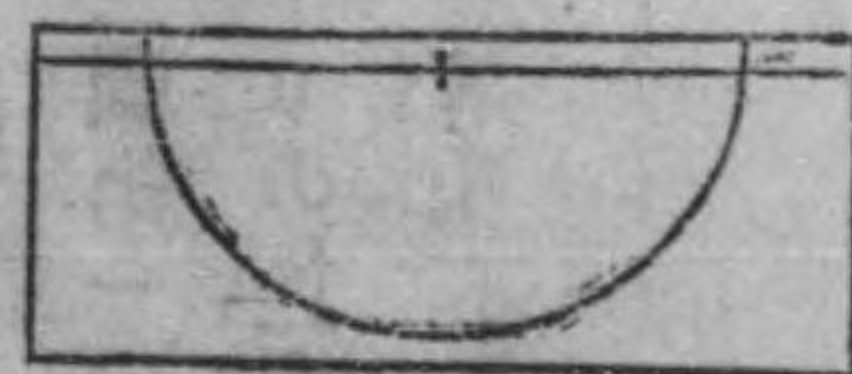
頃 見 後 二 第



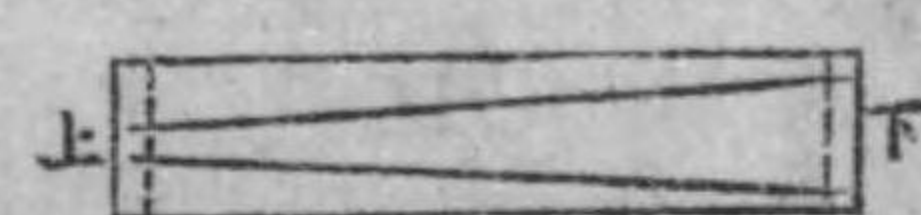
給 立 三 第



給 小 五 第



襦 四 第

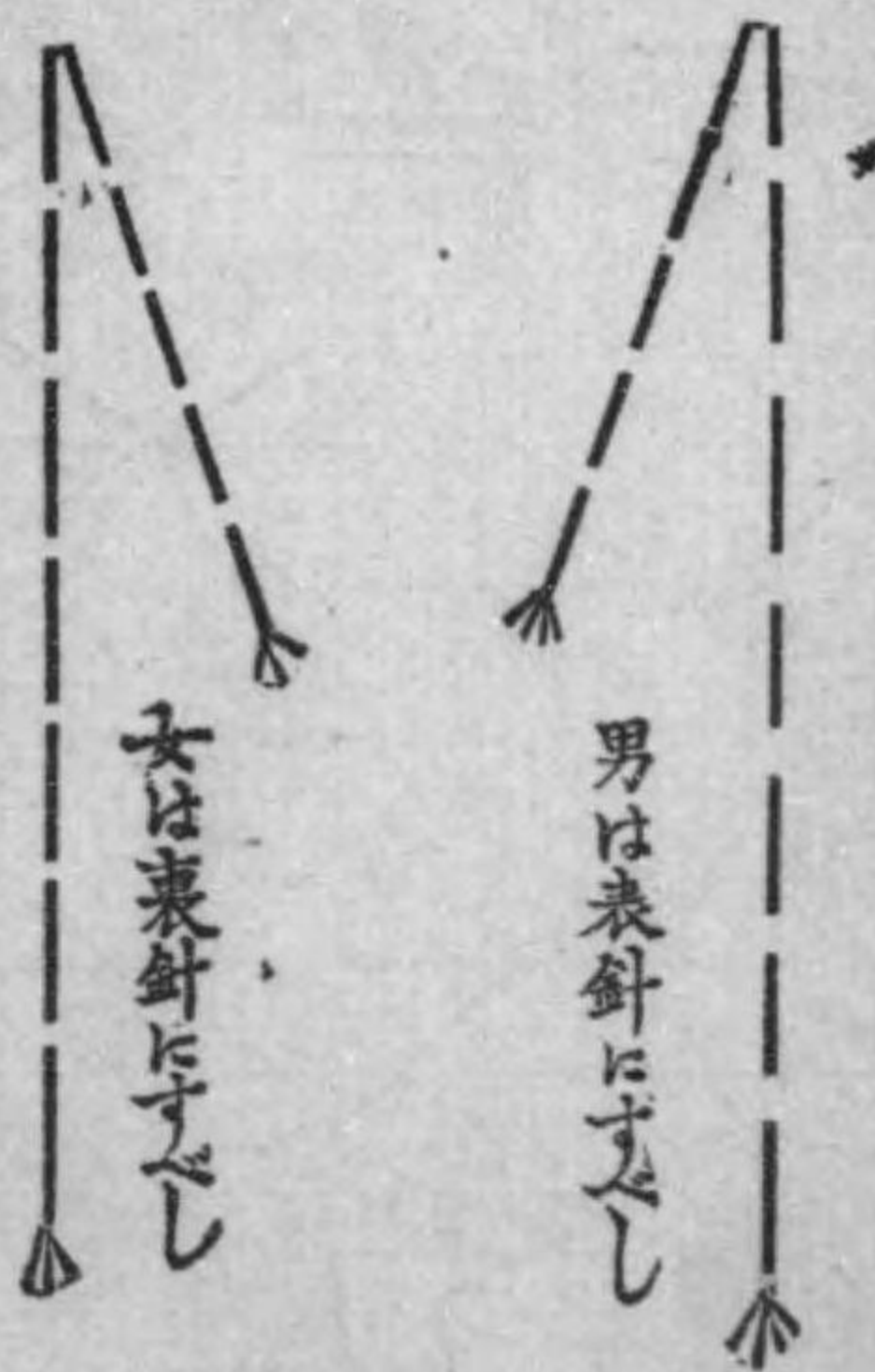


すとし通は襦の襟

男児の十二針の圖
 正に七針縫ひ上げ斜に五針縫ひ
 下げるのである

女児の十二針の圖
 針の数は同様なれど縫ひ方に相
 違あり

圖四十二第



身^み襟^{えり}袖^{そで}袖^{そで}

幅^{あし}肩^{かた}口^{くち}丈^{たけ}

第三章 三ツ身

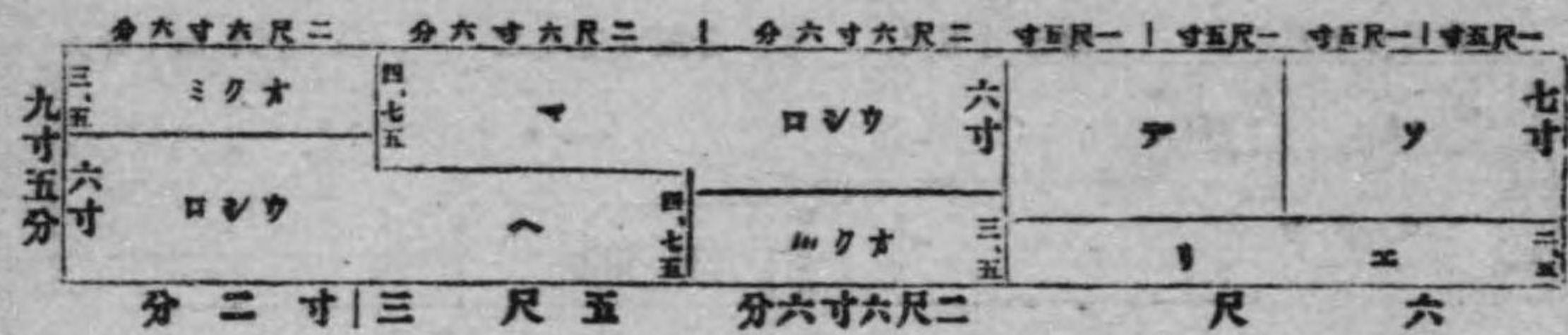
第一節 三ツ身長着籠付標準寸法

一尺四寸より一尺五寸
 四寸より四寸五分
 一寸三分前後
 前後共にいつばい

袖^{そで}袖^{そで}
 袖^{そで}付^{つけ}幅^{あし}
 丈^{たけ}

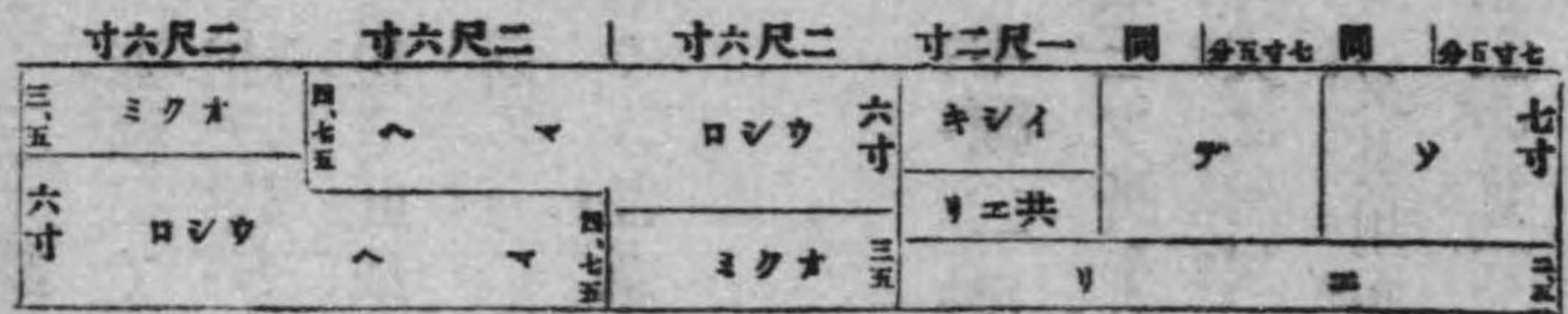
六寸より六寸五分まで
 四寸より四寸五分
 二尺四、五寸より
 二尺七、八寸
 二寸五分

圖五十二第



總布 袖丈 身丈
 $(140.0 - 15.0 \times 4) \div 3 = 26.6$

圖六十二第



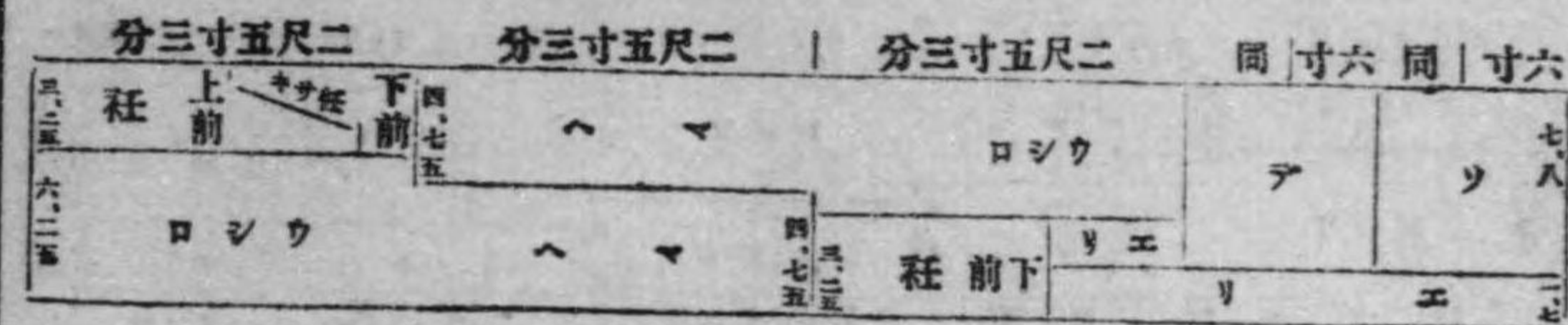
總布 袖丈 イソキ(尻當) 身丈
 $120.0 - (7.5 \times 4 + 12.0) \div 3 = 26.0$

衿^{えり}相^{あひ}襟^{えり}袖^{そで}袖^{そで}
 衿^{えり}下^{した}幅^{あし}下^{した}幅^{あし}
 袖^{そで}付^{つけ}幅^{あし}
 衿幅 三寸
 袖幅 三寸内外
 袖付幅 七寸内外
 衿幅より三分づめ
 (一寸より一寸一分まで)
 (口三寸五分より四寸奥五寸より六寸)

第二節 三ツ身長着の裁方及び積り方

並幅にて一丈四尺の用布を以て、長袖三ツ身裁方及び積り方(第二十五圖)並幅にて一丈二尺の用布を以

圖七十二第



$$\frac{\text{總尺} \quad \text{袖丈} \quad \text{身丈}}{(100.0 - 6.0 \times 4) \div 3 = 25.3}$$

て、三ツ身筒袖の裁方積り方(第二十六圖)

並幅にて一丈の用布を以て極めて儉約せる三ツ身

筒袖の裁方積り方(第二十七圖)

(但し此裁方は頗る儉約せるものにて衿の鈎とし下前の方に接ぎ目を廻し且つなるべく揚の下になるやう注意すべし)

第三節 車裁(追送り裁)

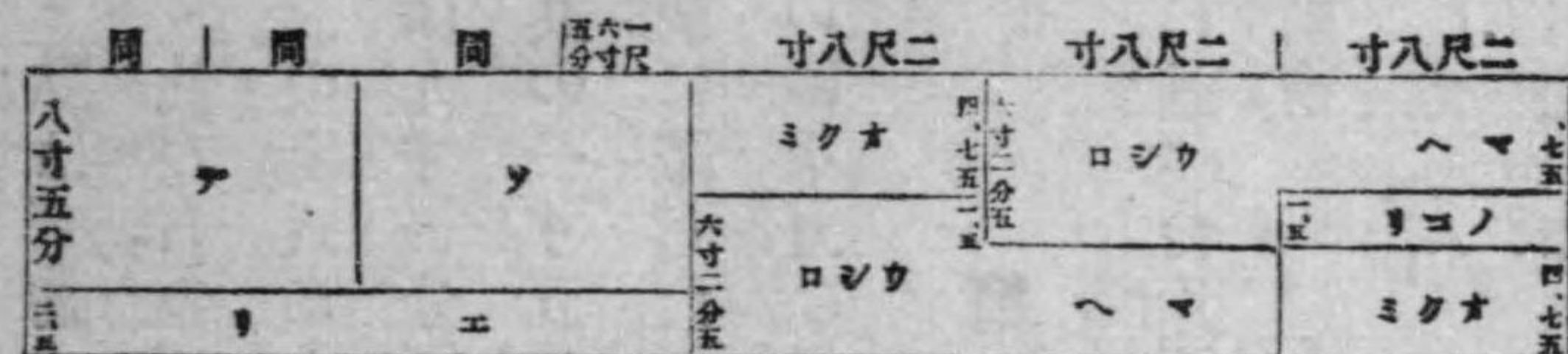
中幅(二尺一寸)長さ一丈五尺の片面物を以て、車裁三ツ身を袖丈一尺六寸五分を以て裁たんとせば、身丈は何尺なるやを知には、第二十八圖の算式による。又其用布の幅により後幅の寸法を積らんとせば、第二の算式によるのである。此の車裁にて最も注意

すべき點は、初め身頃を三つ折にして、左右の輪を切込み、その寸法の定め方より此左右の切込寸法さへ確實にすれば、裁損じの憂ひはないのである。それは第二の算式による。今算式の大要を記述せんに、其用布の幅の尺幅にせよ或ひは九寸五分幅にせよ、其の布幅より襟肩の寸法、今假りに一寸五分とすれば其の一寸五分を減じ、残りを二分すれば前幅の寸法が出、其の前幅の寸法に前に減じたる襟肩の寸法を加ふれば後幅の寸法となる。この後幅の丈に左右の輪を互ひ違ひに切込み、而して第二十八圖の如く裁つのである。

第四節 帯かくれ裁

前に述べた片面もの、裁方として、車裁の方法を示したれど、極めて小幅の片面物の時に車裁を應用する時は、身幅頗る狭くなりて、一ツ身と選ぶ所なきに至らん、此の場合両面物と大差なき身幅にてつくり上げんとせば、是非下の圖の如き、帯かくれ裁の方法に依るのである、然し此裁方は羽織又は

圖八十二第

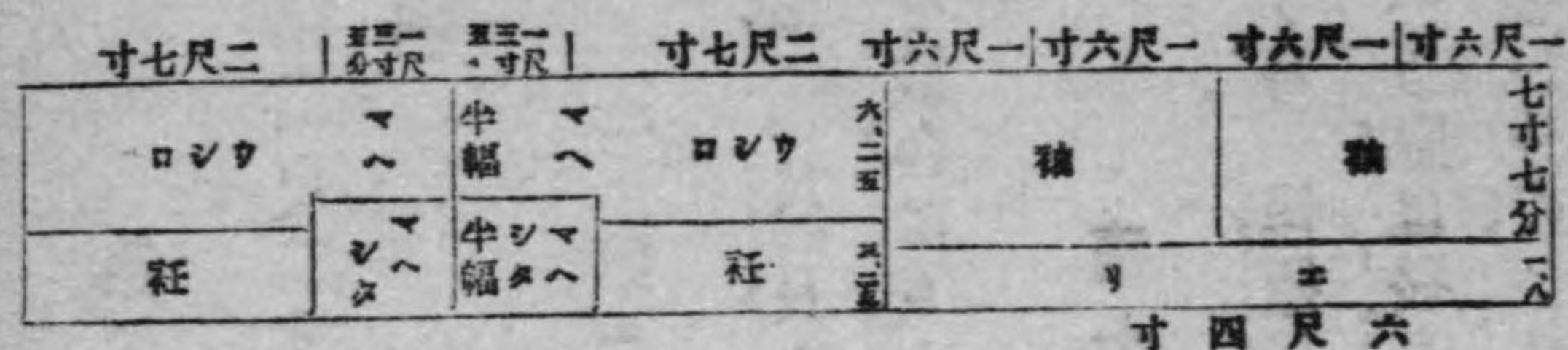


第一算式 $(150.0 - 16.5 \times 4) \div 3 = 28.0$

第二算式 $(110.0 - 1.5) \div 2 + 1.5 = 6.25$

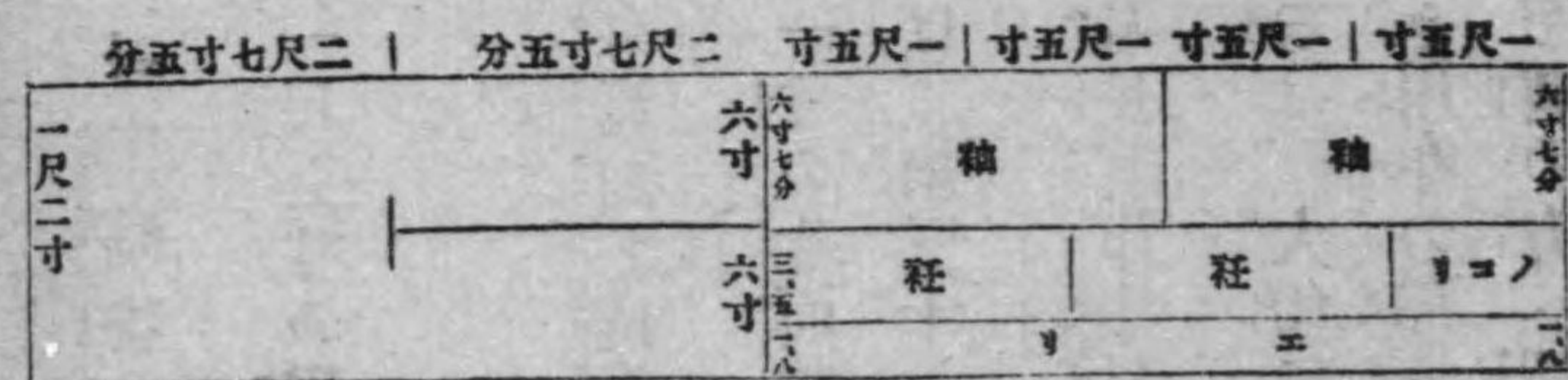
被布等の如きものには應用すべきものではない。
 裁方の方法としては、初めに袖用布をとり、其の片端より襟とすべき用布を裁落し、次に身頃とすべき部分を其の中央より中表に二つに折り重ね、その輪を切離して、二枚を重ねたまゝ普通三ツ身裁の如く、三つ折にせば、短き三つ折のものとなる、それを豎に正しく二つ折とし、その一方の横の輪を豎の折まで切込み、然して後ち三つ折を開けば三分の一の所が半幅だけ切込たるものとなる。依つて其の三分の一を半幅だけ切取り、前身頃の足し裂とするのである、残る所は幅のまゝの三

圖九十二第



$(145.0 - 16.0 \times 4) \div 3 = 27.0$

圖十三第



$(115.0 - 15.0 \times 4) \div 2 = 27.5$

分の二と半幅の三分の一となる、是より三分の一即ち半幅の前身幅より襟肩寸法として一寸三四分廣くし、それを後幅と見做して、餘れる幅より三寸内外を缺取りて、衿用布とするのである。
 第二十九圖は並幅片面物一丈四尺五寸の用布を以て、袖丈一尺六寸裁切の三ツ身裁方を示せるものである。

第五節 三ツ身中幅物

中幅(二尺二寸)長さ一丈一尺五寸の用布を以て三ツ身の裁方及び積方(第三十圖)

第六節 三ツ身筒袖と長着の裁合

大幅(二尺)長さ一丈二尺一寸の片面物用布を以て、三ツ身の筒袖と長着の二枚を裁合はさうとするには、第三十一圖の如うにするのである。

第七節 三ツ身長着筒袖付方

三ツ身の筒袖付順序方法は、大體に於て一ツ身と異なることはない、唯注意すべき點は後身、即ち廣き用布の部分必ず上になる様に置く事と、襟肩の處を一分或ひは一分五厘を肩の方へ切込みおき、衽は棒衽ゆる、劍先の所

第三十圖

寸六尺二	寸六尺二	寸六尺二	寸五尺一	寸五尺一分	寸五分	寸五分
六寸三分	五寸	五寸	六寸三分	六寸三分	六寸三分	六寸三分
ロシウ	ヘマ	ミクオ	袖	袖	袖	袖
ミクオ	ヘマ	ロシウ	袖	袖	袖	袖
ミクオ	ヘマ	ロシウ	袖	袖	袖	袖
ロシウ	ヘマ	ミクオ	袖	袖	袖	袖

$$\text{總布} \quad \text{筒袖丈} \quad \text{長袖丈} \quad \text{身丈}$$

$$121.0 - (6.5 \times 2 + 15.0 \times 2) \div 3 = 26.0$$

で衽幅を七分三分に振り分けて筒袖付する事等である。

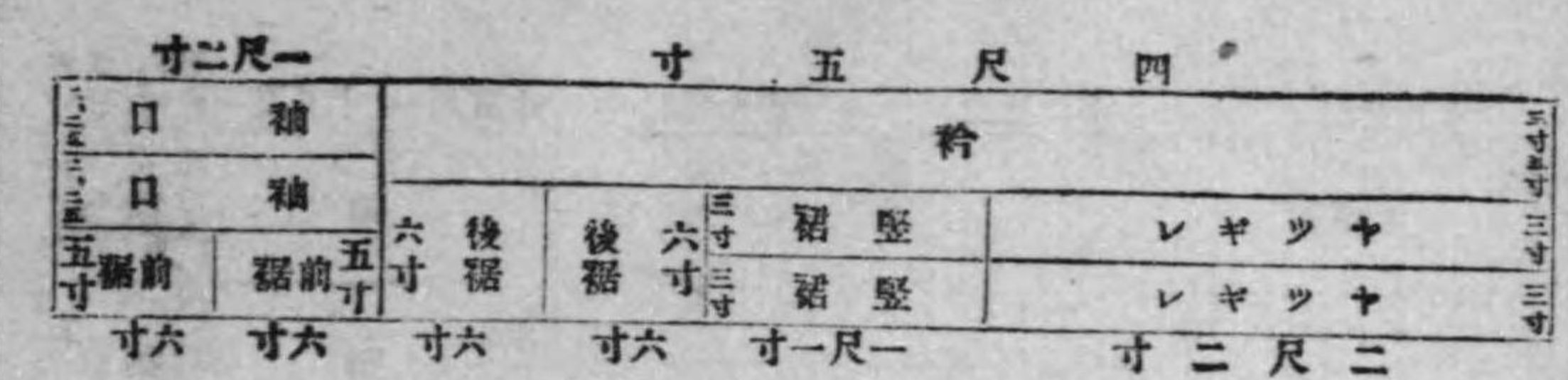
第八節 三ツ身長着の縫方

縫方順序としても一ツ身と大差なく、初めに袖を作り次に背を縫(單衣ならば袋縫)脇を縫、衽衿下衿、衽付、裾衿、衿付、衿締、袖付の順序である。

第九節 三ツ身胴拔の表周圍裁方

並幅(九寸五分)長さ五尺七寸の用布を以て、三ツ身胴拔の表周圍を裁たんとせば第三十二圖の如くせよ、又算式は袖口と襟

圖二十三第



袖口 袴丈 總布丈
 $12.0 + 45.0 = 57.0$

裾丈 腰帯 ヤッギレ 總布丈
 $(6.0 \times 4) + 11.0 + 22.0 = 57.0$

との丈尺と手前の裾の四裂と堅裾、八ツギレを加算せる丈尺とが同一であるや否やを對照する算法である。

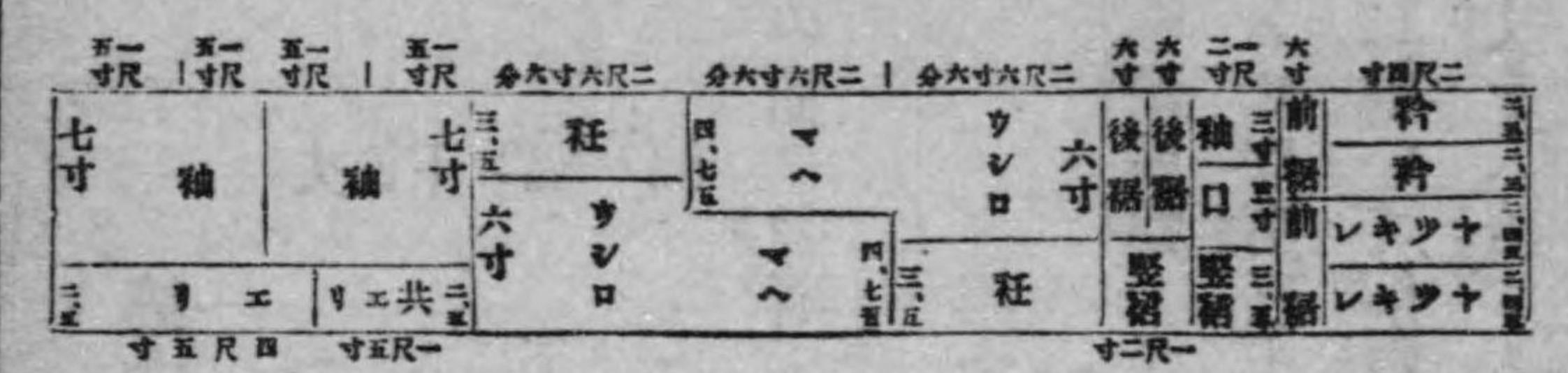
第十節 三ツ身胴拔長着の筧標付及び縫方

本裁胴拔の部に記述す参照せられよ。

第十一節 三ツ身比翼裁方

並幅(九寸五分)長さ一丈九尺四寸の用布を以て、三ツ身上着の表と比翼の表周圍とを裁合さんとせば第三十三圖の如くするのである、又積方の算式は次の式によるので

圖三十三第



總布 袖丈 袴 袖口 腰丈 裾丈
 $(194.0 - (15.0 \times 4) + (6.0 \times 3) + 12.0 + 24.0) \div 3 = 26.6$

ある。

第十二節 三ツ身比翼の筧標付及び縫方

本裁比翼の筧標付及び縫方の部を参照せよ。

第十三節 三ツ身重もの詰め方の寸法

袖丈 三分
 身幅 後二分前二分
 袴丈 二分づめ
 袖幅 一分
 裾幅 一分
 裾丈 一分づめ

但し丈は其の材料により伸縮すべし。

第十四節 三ツ身羽織の籠付標準寸法

身丈 一尺八寸内外
 前下 六分
 襟幅 下で一寸三分、上で五分あき
 襟幅 一寸二、三分
 下やつ 二寸
 襟付縫代 上で二分、下で四分
 乳下 五寸より五寸五分
 襟肩 一寸三、四分上り

其の他は長着と大差なし。

第十五節 三ツ身羽織の裁方

並幅両面物 並幅(九寸五分)長さ一丈四尺の用布を以て三ツ身羽織をつくらんとせば第三十四圖の如くす、又其の積り方は、左の算式の如くである、算式に就いて解釋せば大略次の如くである、袖丈を八倍するは、表の四倍と裏の四倍とを加へたるものにて、身丈を六

第三十四圖

分六寸六尺二	分六寸六尺二	分六寸六尺二	寸五尺一	寸五尺一	寸五尺一	寸五尺一
袖	衿	ハマ	ロシウ	六寸	袖	袖
七寸	六寸	六寸	六寸	口	袖	襟
三寸五分	六寸	ロシウ	ハマ	四寸五分	三寸五分	二寸

袖丈 (15.0 × 8) + 身丈 (18.5 × 6) + 下 (8 × 2) + 縫代 (5 × 6) - 表用布 裏用布 = 140.0 = 95.6

第三十五圖

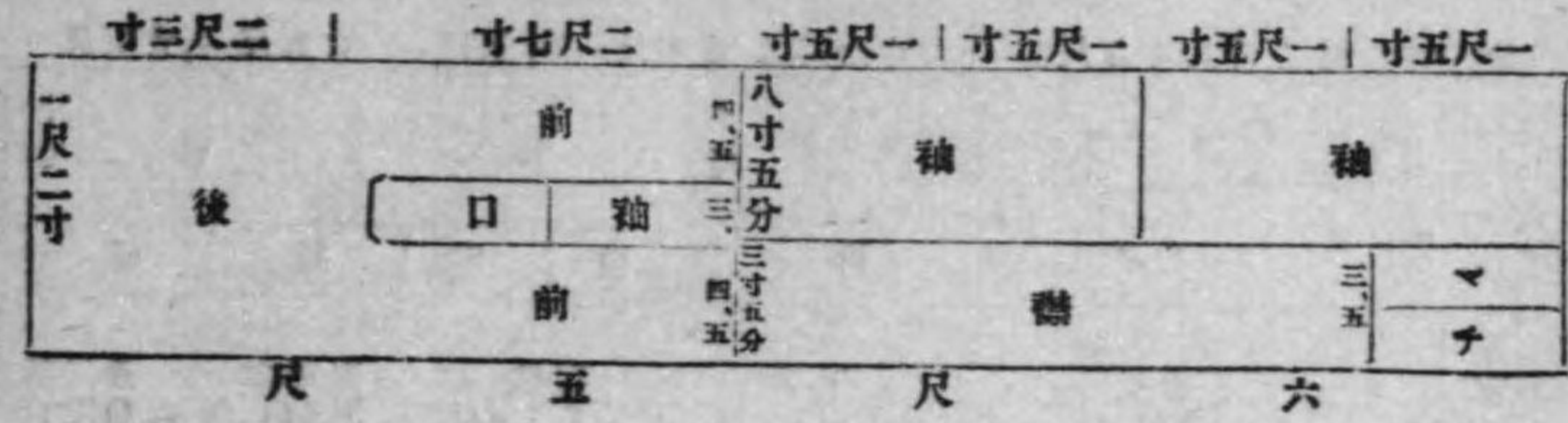
分五寸五尺一	分五寸五尺一	分五寸五尺一	分五寸五尺一	寸六尺二	寸六尺二	寸六尺二
袖	袖	袖	袖	後	前	前
七寸五分	七寸五分	七寸五分	七寸五分	五寸八分	四寸	四寸
七寸五分	七寸五分	七寸五分	七寸五分	五寸八分	四寸	四寸

布幅 (10.0 - 1.6) ÷ 2 + 1.6 = 5.8

倍せるは表三倍と裏三倍とを加へて算したるもの、下りを二倍せるは前身頃の一幅を二ツに裂き、左の前となせる其の裏表なるが爲めである、又胴は縫代を六倍するは、身頃が六倍なるが爲めである、其の各倍せるものを加へたる、總尺數より、表用布を減けば即ち裏用布の尺數を得るのである。(第三十四圖)

片面裁 幅一尺長さ一丈四尺の用布を以てせば次の圖の如く、然して此の三ツ身片面裁に就て最も

圖六十三第

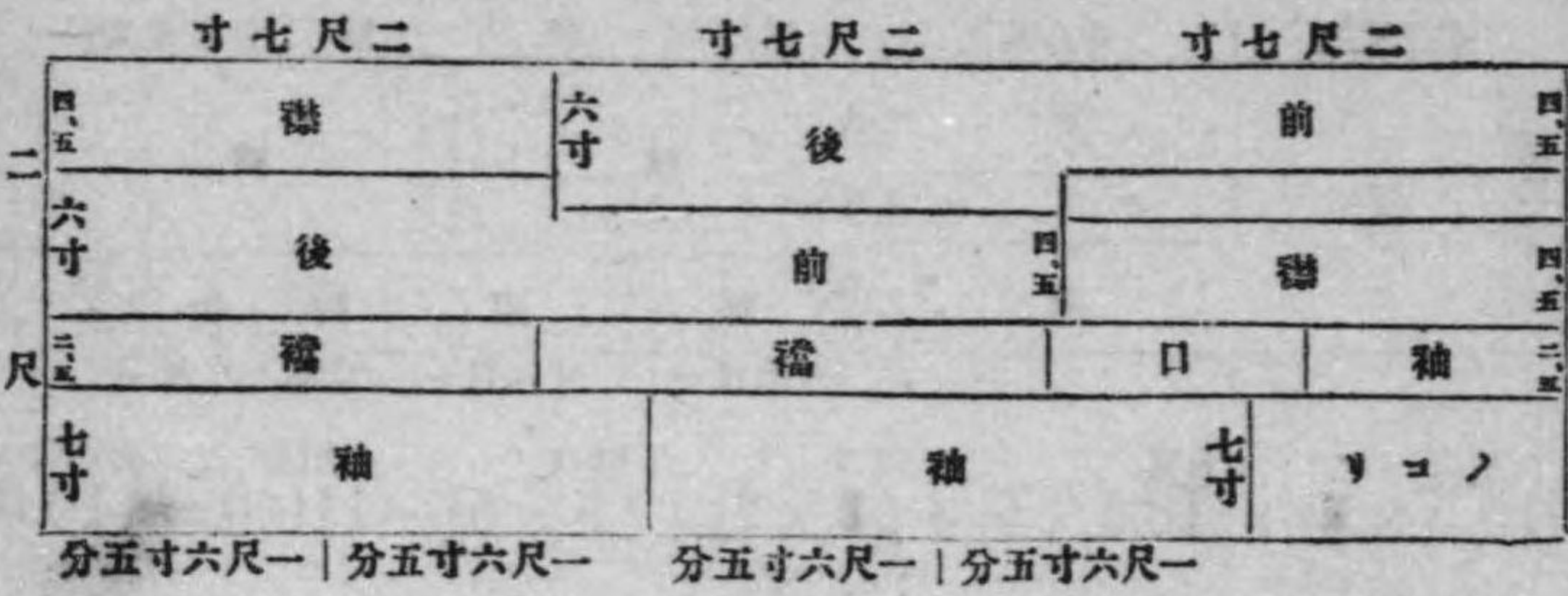


注意すべき要點は、左右の切込を定むる事である、第三十五圖の算式は之を示せるものである。
 片面裁 中幅(二尺二寸)長さ一尺一寸の用布を以て三ツ身の羽織を裁んとせば第三十六圖の如くするのである。
 大幅物 幅二尺長さ八尺の用布を以て三ツ身羽織を裁たんとせば第三十七圖の如く、裏用布の積り方は下記の算式による。

第十六節 三ツ身被布の笥付標準寸法

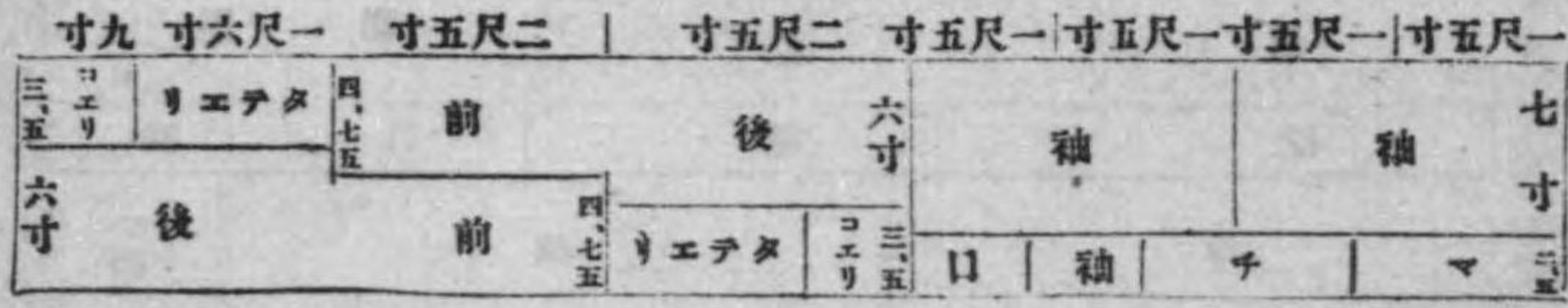
- 小 堅 襟 幅 三寸内外上は三分づめ
- 堅 襟 幅 三寸より三寸五分
- 堅 襟 下 三寸より三寸五分
- 小 襟 幅 三寸内外上は三分づめ
- 堅 襟 幅 三寸より三寸五分
- 堅 襟 下 三寸内外上は三分づめ

圖七十三第



裏袖丈 身丈 下 縫代 表用布 裏用布
 $(16.5 \times 4) + (18.5 \times 6) + (.7 \times 2) + .5 \times 6 - 80.0 = 101.5$

圖八十三第



袖丈 身丈 下 縫代 表用布 裏用布
 $(15.0 \times 8) + (18.5 \times 6) + (.8 \times 2) + (.5 \times 6) - 140.0 = 95.6$

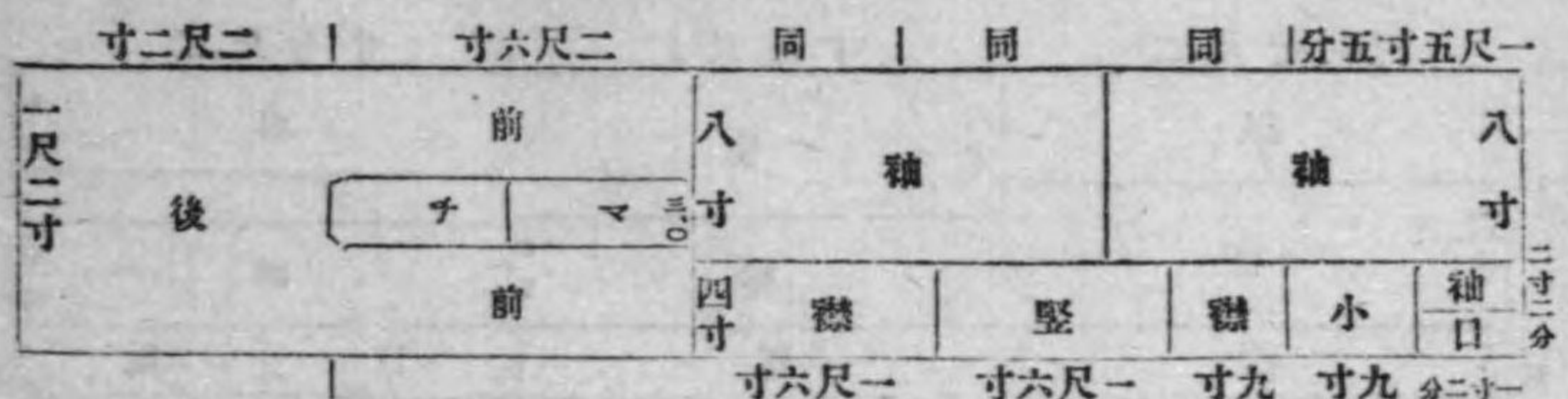
第十七節 三ツ身被布の裁方

小襟總丈 七寸より八寸
 小襟と堅襟のあき 一寸五分以内
 其の他は羽織又は長着に同じ。
 並幅(九尺五寸)長さ一丈四尺の用布を以て三ツ身の被布を作らんとせば第三十八圖の如く、又積り方は上の算式によるの

三ツ身

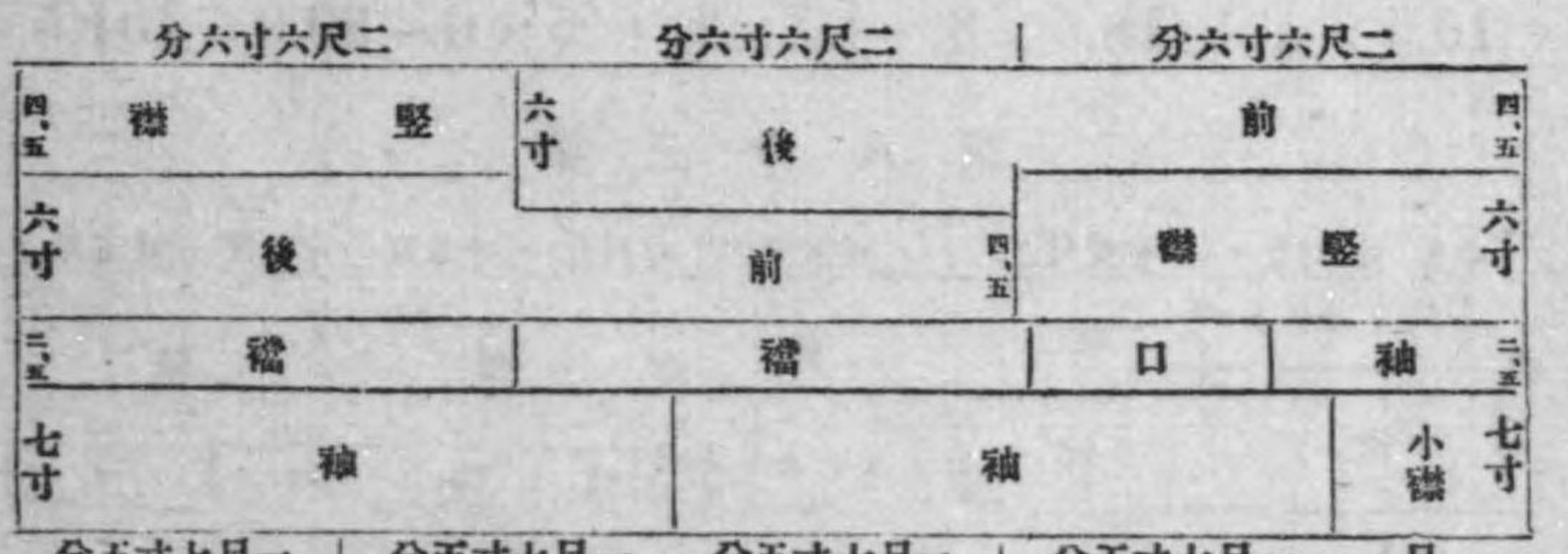
四三

圖九十三第



$$(15.5 \times 4) + (18.5 \times 5) + (.8 \times 2) + (.5 \times 5) - 110.0 = 110.6$$

圖十四第



$$(17.5 \times 4) + (18.5 \times 6) + (.8 \times 2) + .5 \times 6 - 80.0 = 105.6$$

である。
 中幅(二尺二寸)長さ
 一丈一尺の用布を以て
 三ツ身の被布を作らん
 とせば第三十九圖の如
 く、積り方は上の算式
 によるのである。
 大幅(二尺)長さ八尺
 の片面物の用布を以て
 三ツ身の被布を裁たん
 とせば第四十圖の如
 く、積り方は又上の算
 式の如くである。

第十八節 三ツ身被布の笠標付及び縫方

本裁被布の笠標付及び縫方の部を参照せられよ。

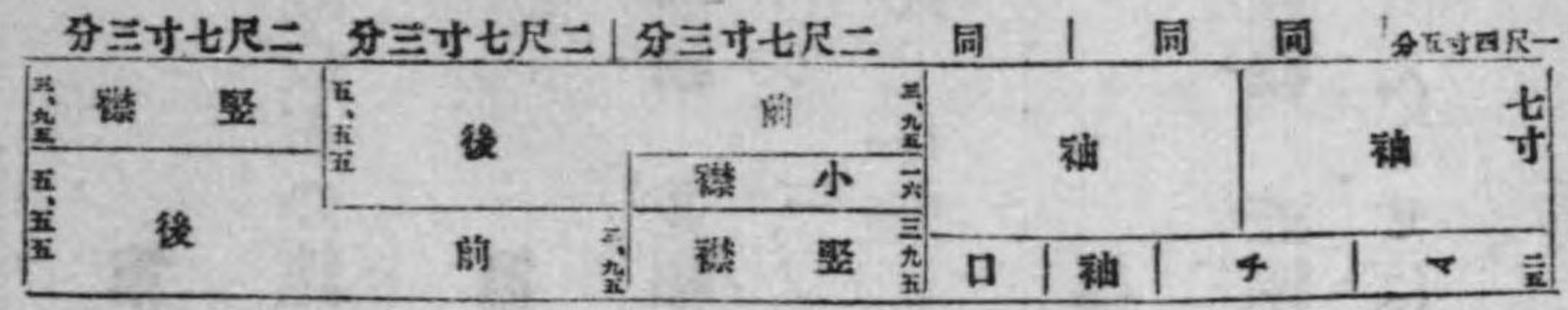
第十九節 三ツ身道行の裁方

片面物 並幅(九寸五分)長さ一丈四尺の表用布を以て、裏用布八尺五寸を
 使用して、三ツ身道行を作らんには第四十一圖の如く、又積り方は第一の算
 式を以て身丈を知り、第二の算式を以て後幅の如何を知るのである。

第二十節 三ツ身被布合羽の裁方

片面物 並幅(九寸五分)長さ一丈二尺五寸の用布を以て、三ツ身被布合羽
 を作らんとせば第四十二圖の如くするのである。

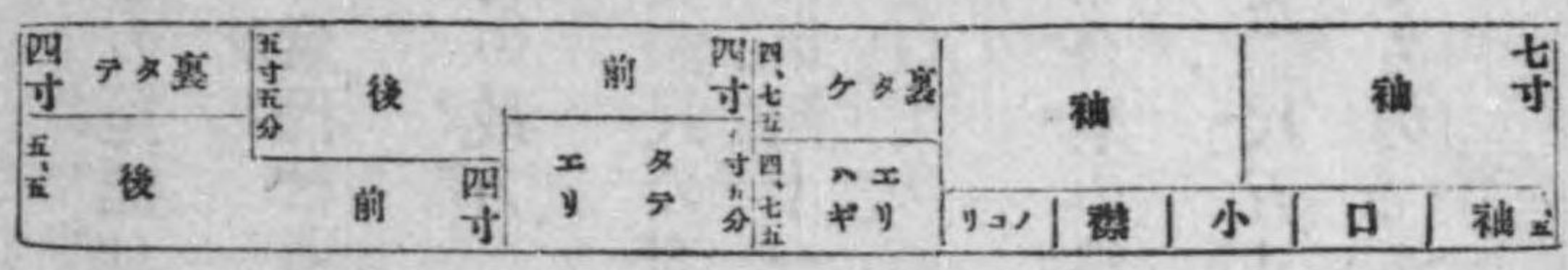
圖一十四第



第一
$$\frac{\left\{ (140.0 + 85.0) - (14.5 \times 8 + .7 \times 2 + .5 \times 6) \right\}}{6} = 17.3$$

第二
$$\frac{9.5 - 1.6}{2} + 1.6 = 55.5$$

圖二十四第



第二十一節 三ツ身道
 行の籠付標準寸法
 總べて寸法は羽織被布と同様である、然し小襟は六分内外である。

第二十二節 三ツ身被布
 合羽の籠付標準寸法
 之又寸法羽織被布と同一である、然し其の身丈は其人かぎりとする。

第四章 四ツ身

第一節 四ツ身長着籠付標準寸法

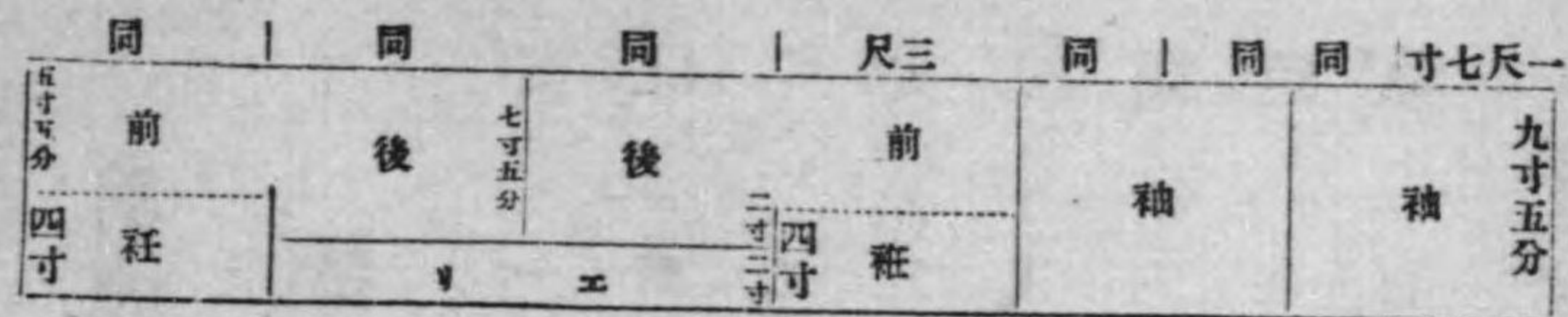
筒 相 衽 前 身 下 袖 袖
 袖 裙 幅 幅 丈 口 丈

一尺六、七寸
 四寸五分より五寸
 二寸五分
 三尺内外
 上より真直
 三寸五分内外
 衽幅より四分づめ
 口四寸より四寸五分奥五寸五分より六寸五分

袖 袖 袖 袖 袖 袖
 幅 付 付 付 付 付

七寸より八寸
 五寸より五寸五分
 一寸五分より二寸
 六寸より七寸
 四寸より四寸五分
 八九寸より一尺四五寸
 一寸二分より一寸四分

圖三十四第



$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 = \text{總布}$$

$$17.0 \times 4 + 30.0 \times 4 = 188.0$$

第二節 四ツ身長着の裁方及び積り方

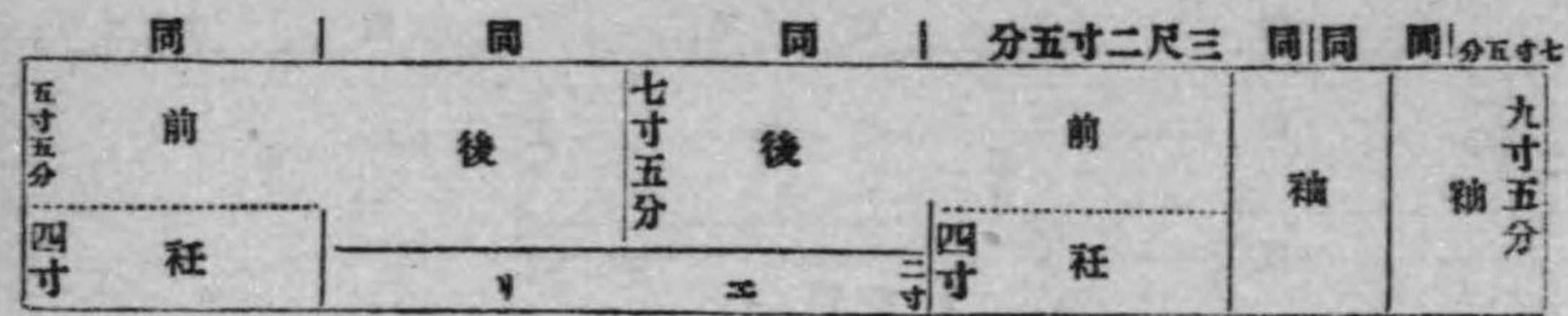
長袖 並幅九寸五分長さ一丈八尺八寸の用布を以てせば第四十三圖の如くである。但し袖丈一尺七寸、身丈三尺の積り。

注意 衿は點線の所を裁ち落さずして摘み縫になし置くのである。

筒袖 並幅(九寸五分)長さ一丈六尺の用布を以て四ツ身筒袖を作らんとせば第四十四圖の如くするのである。

逆衿 此裁方は前記と略ぼ同じであるが、前記は衿を裁ち落さずに摘む故、摘衿といふが、是れは圖の如くに衿を切離して縫ふ時に倒に付るので、俗に

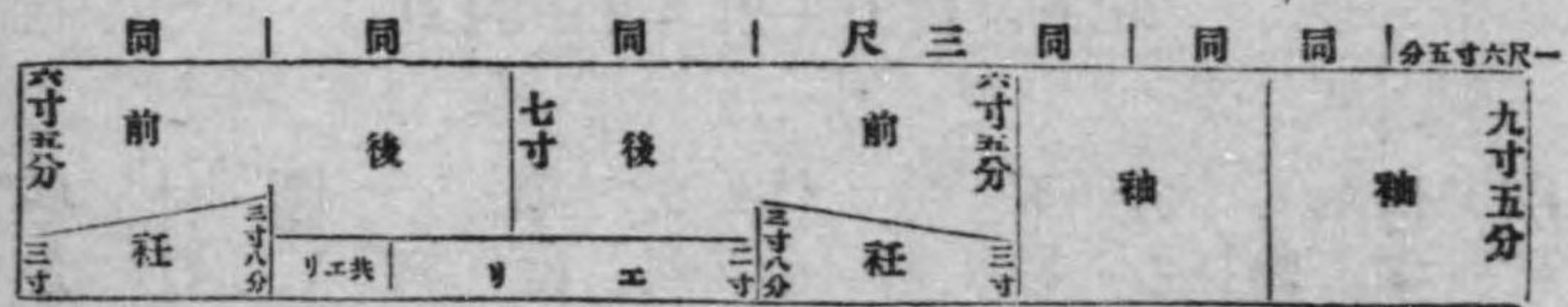
圖四十四第



$$\text{總布} = \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈}$$

$$(160.0 - 7.5 \times 4) \div 4 = 32.5$$

圖五十四第



$$\text{總布} = \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈}$$

$$(186.0 - 16.5 \times 4) \div 4 = 30.0$$

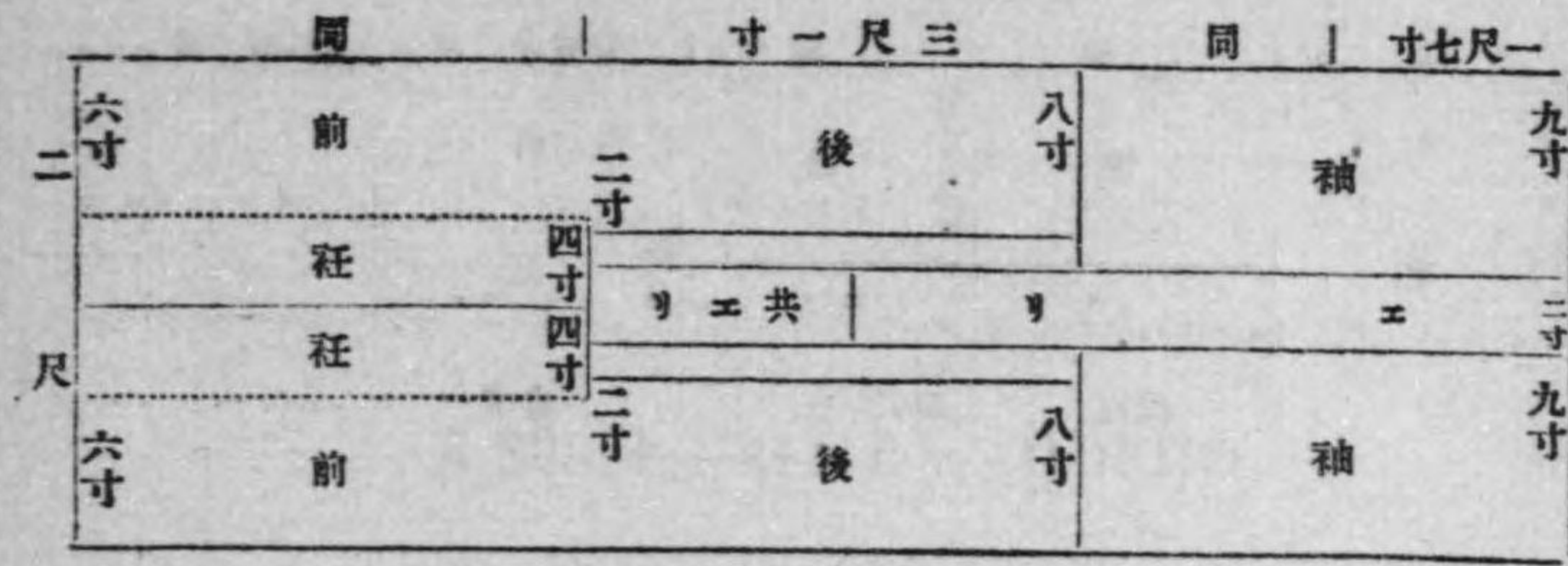
逆衿といふのである。第四十五圖は並幅(九寸五分)長さ一丈八尺六寸の用布を以て四ツ身逆衿の裁方を示したものである。
大幅物片面裁 二尺幅の用布九尺六寸を以て四ツ身を作らんとせば第四十六圖の如くするのである。

第三節 四ツ身長着

標付の順序

順序としては、一ツ身、三ツ

圖六十四第

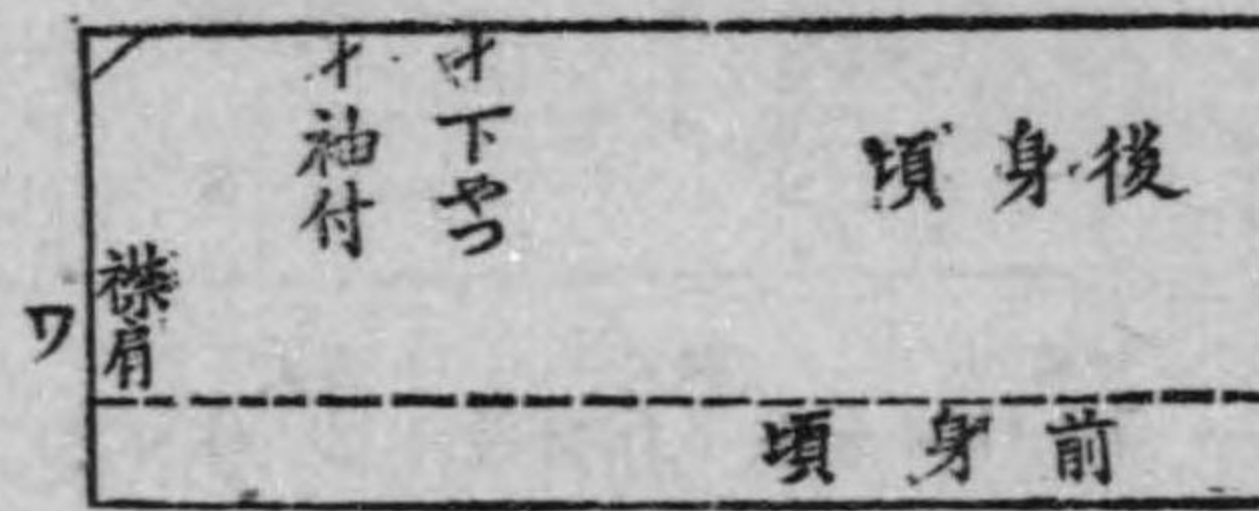


$$\frac{\text{身丈} - \text{袖丈} \times 2}{2} = \frac{96.0 - 17.0 \times 2}{2} = 31.0$$

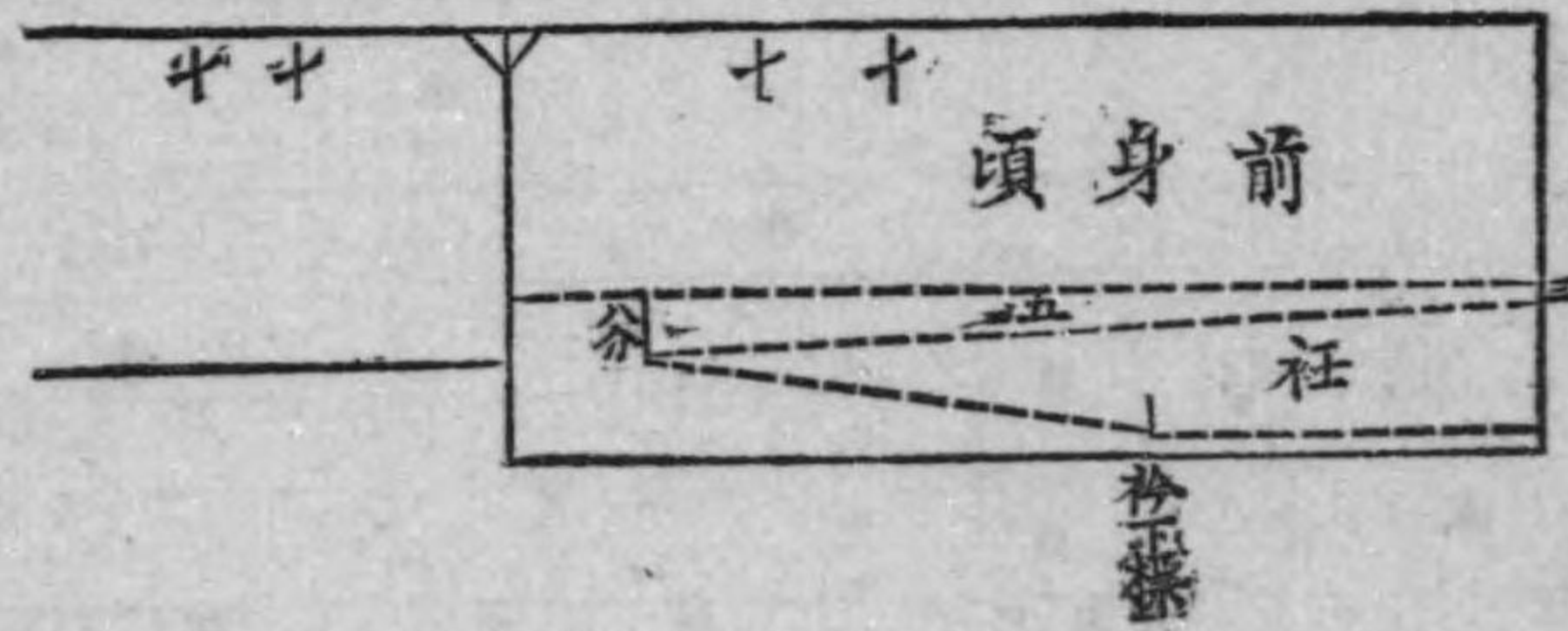
身と大體に於て變りはない、然し袖の筒標
 付けは身頃の所で少しく相違してゐる、之は
 圖に依て示すこととする。
 猶この四ツ身筒標付に就て最も注意すべき
 事は、表衿の切下げをする必要上、初めに其
 の身丈を定むる時、衿に應じて充分に裾の縫
 代を多く取り置く必要がある、若し夫れを怠
 ると再び身丈をきめ直さなければ、表衿の切
 下げをする事が出来ぬ様な不始末となる事が
 ある故、能く注意すべきことである。尤
 も裏衿は唯身丈を衿の二倍だけ長くして筒標
 付する迄の事で、其の他は一ツ身、三ツ身と
 別に異なる處はない。(第四十七圖)

圖七十四第

圖るたけ付を標に頃身



圖るたけ付を標に頃身前き開に左を頃身後



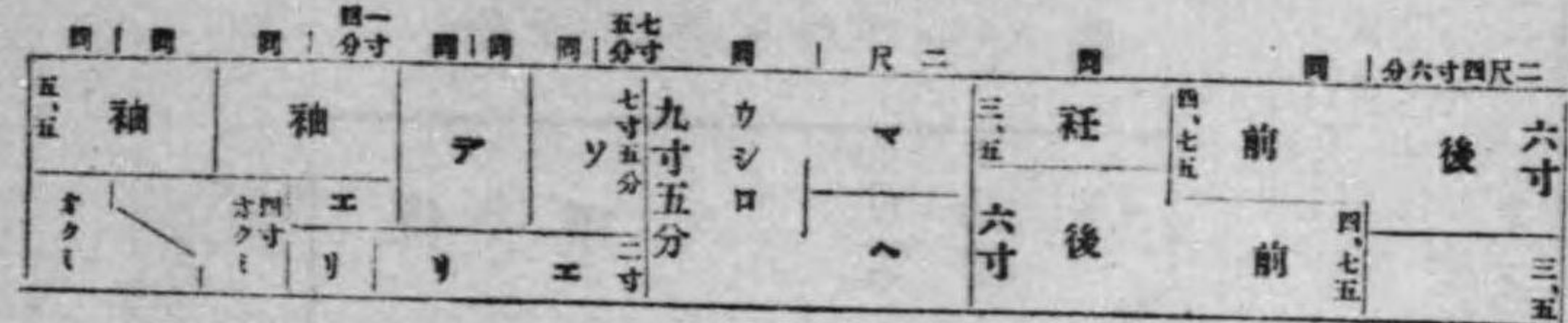
第四節 四ツ身長着の縫方

縫方としては一ツ身、三ツ
 身と何等異なる處はない、唯衿
 が空縫になる迄の事である。

一、小裁物の裁合

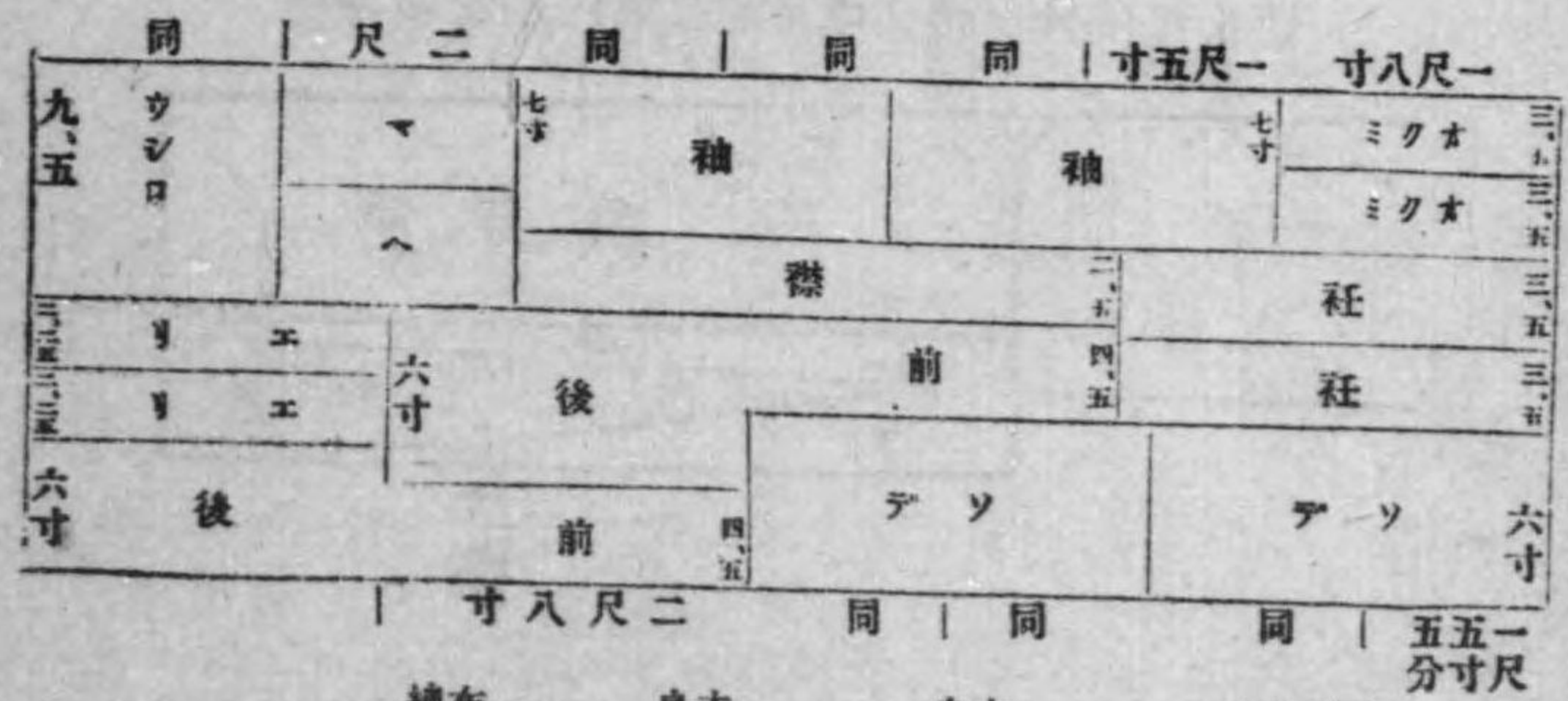
此の裁合方としては、一ツ
 身と三ツ身、三ツ身と四ツ身、
 或ひは一ツ身、三ツ身、四ツ
 身と幾種類も裁合す方法があ
 る、茲には其の必要の種類
 二三を選びて左に示す。

圖八十四第



$$\left\{ 200.0 - (14.0 \times 4 + 7.5 \times 4 + 20.0 \times 2) \right\} \div 3 = 24.6$$

圖九十四第

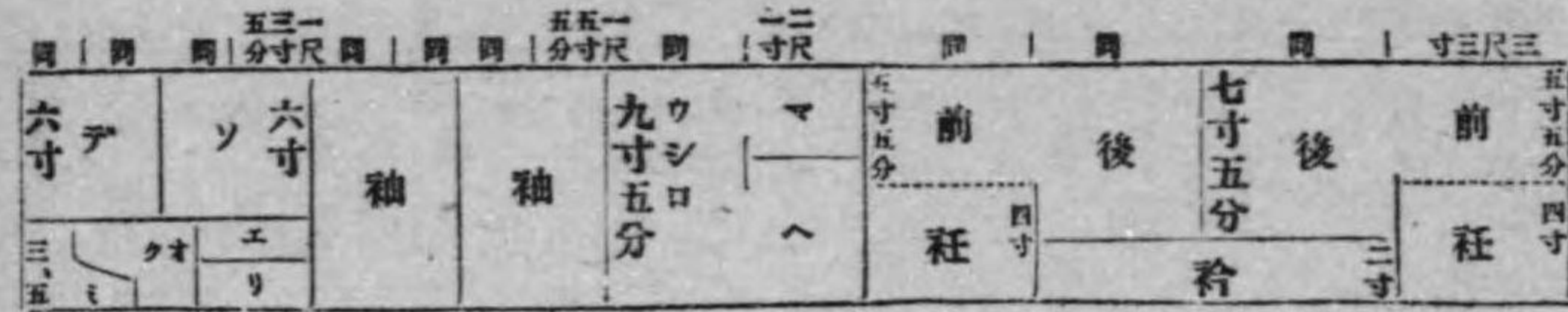


$$\text{第一式 } (118.0 - 28.0 \times 3 + 28.0) \div 4 = 15.5$$

$$\text{第二式 } (118.0 + 2.0 - 15.0 \times 4) \div 3 = 20.0$$

二、一ツ身と三ツ身
(並幅物)
並幅(九寸五分)長さ
二丈の用布を以て一
ツ身と三ツ身を裁合
さんとせば第四十八
圖の如くである、又
積り方の算式は上の
如くである。
三、一ツ身と二ツ身
(大幅物)
大幅(二尺)長さ一
丈一尺八寸の用布を

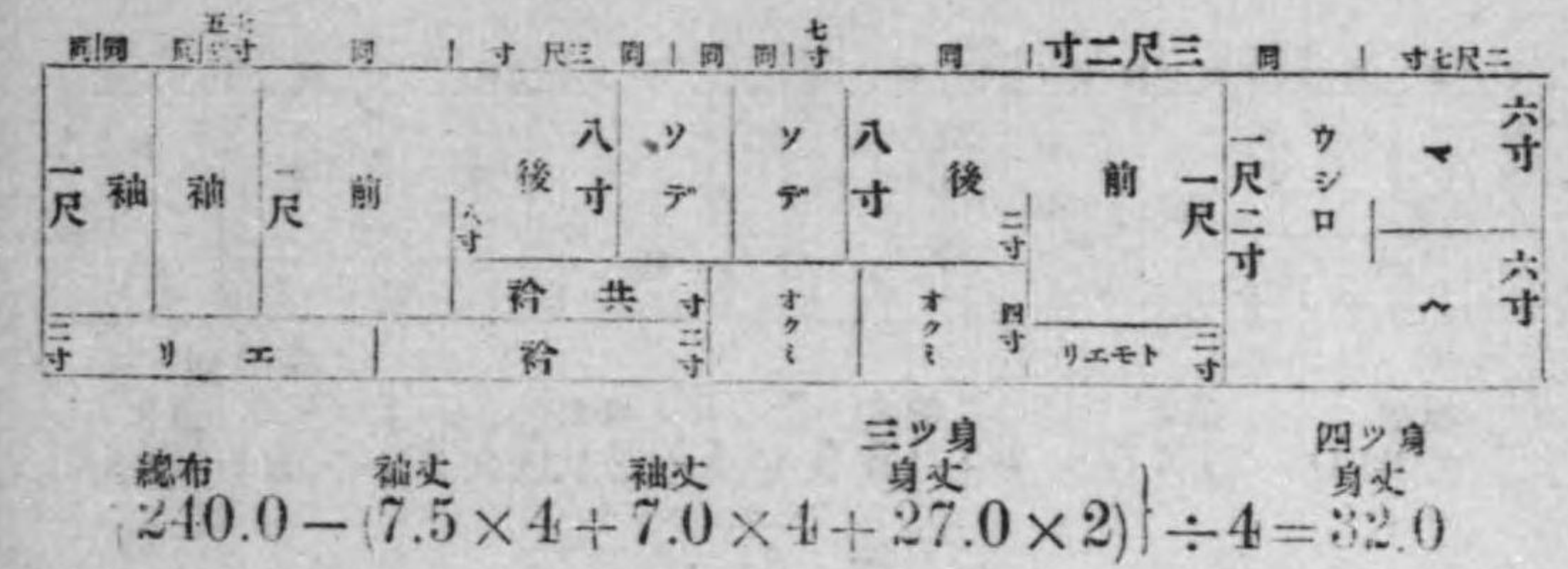
圖十五第



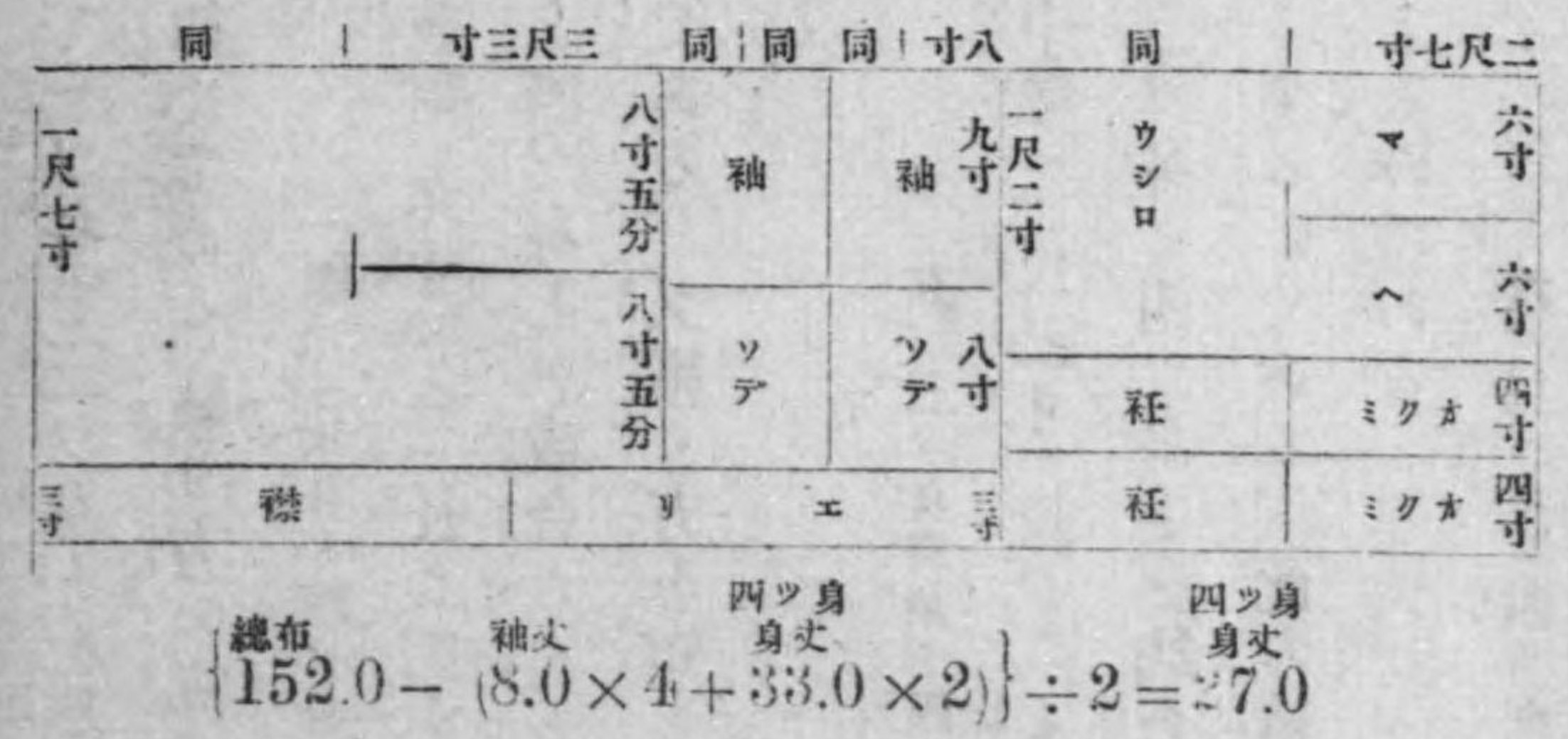
$$\left\{ 290.0 - (13.5 \times 4 + 15.5 \times 4 + 21.0 \times 2) \right\} \div 4 = 33.0$$

以て一ツ身と三ツ身とを裁合さんとせば第四十九圖
の如くである、積り方の算式は上の如くである。
四、一ツ身と四ツ身(並幅物)
並幅(九寸五分)長さ二丈九尺の用布を以て、一ツ
身と四ツ身とを裁合さんとせば第五十圖の如くする
のである、又積り方を知るには上の算式によるので
ある。
五、三ツ身筒袖と四ツ身筒袖(中幅物)
中幅(二尺二寸)長さ二丈四尺の用布を以て、筒袖
の三ツ身と四ツ身とを裁合さんとせば第五十一圖の
如くするのである、此の積り方を知るには次の算式
によるのである。
六、三ツ身と四ツ身の別衿身裁合(大幅物)

圖一十五第



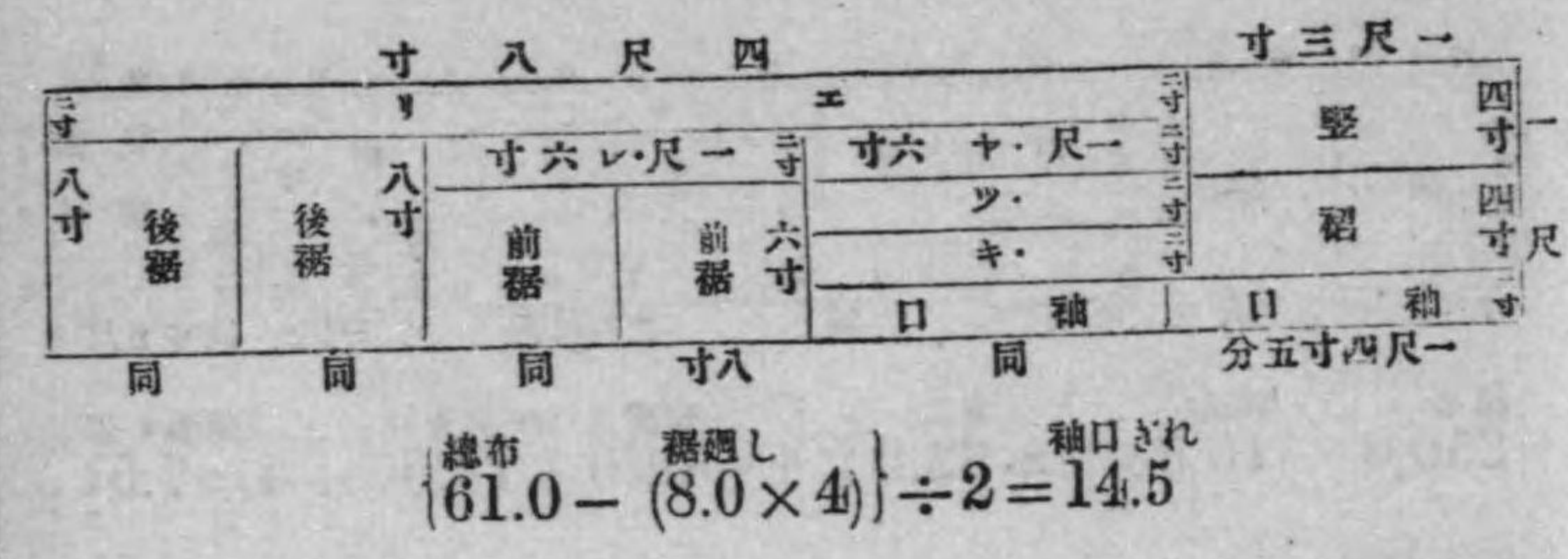
圖二十五第



大幅二尺長さ一丈五尺二寸の用布を以て三ツ身と四ツ身とを別衽として裁合さんとせば第五十二圖の如くなるのである、此の積り方は上の式の如くするのである。

第五節 四ツ身 胴拔表周囲の裁方
幅一尺長さ六尺一寸

圖三十五第

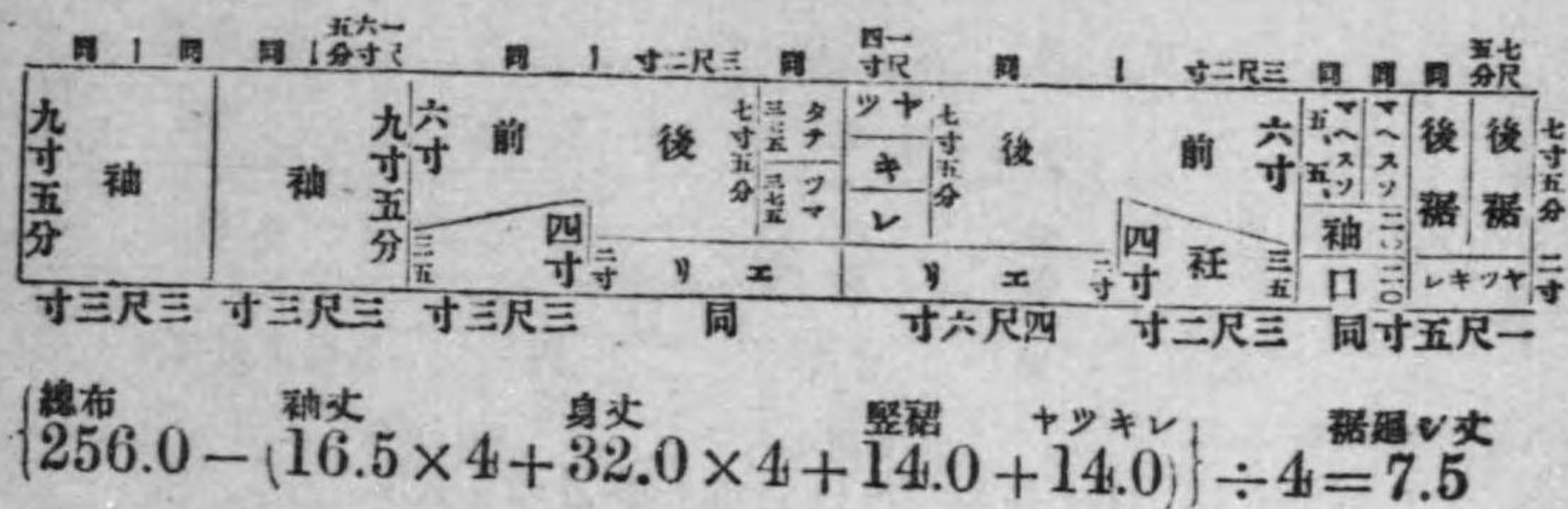


の用布を以て、四ツ身胴拔の周囲を裁たんとせば、第五十三圖と其の算式によるのである。

第六節 四ツ身胴拔長着の篋標付及び縫方
本裁胴拔長着の篋標付と縫方の部を参照せられよ。

第七節 四ツ身比翼の裁方
並幅(九寸五分)長さ二丈五尺六寸の用布を以て、四ツ身の上着表と比翼の表の周囲とを裁合するには第五十四圖の如くにするのである、又積り方の算式も次の如くなすのである。

圖四十五第



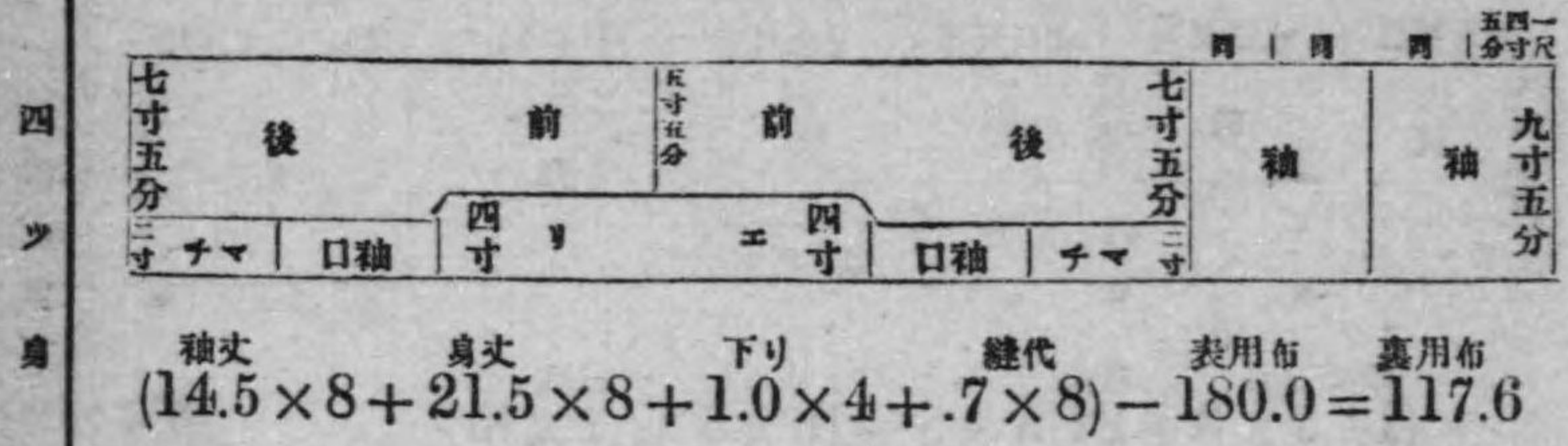
第八節 四ツ身比翼の笹標付及び縫方

本裁比翼の笹標付と縫方の部を参照せられよ。

第九節 四ツ身羽織の裁方

並幅(九寸五分)長さ一丈八尺の用布を以て、四ツ身の羽織を作らうとするには第五十五圖の如くするのである、又裏用布の積り方を知らうとせば其算式の如くするのである、それで此算式中に袖丈を八倍するのは、裏の四倍と表の四倍とを合せたもので、又身丈を八倍するのは、表四倍と裏四倍とを合せたもので、下りの四倍は表に裏の各の二倍を合せたもの、縫代を八倍するのは、身頃が八倍であるから

圖五十五第



である、此の總を寄せた總尺から表用布を減けば、裏用布を得る理由である。

第十節 四ツ身羽織の笹標付及び縫方

本裁羽織笹標付及び縫方の部を参照せられよ。

第十一節 四ツ身被布の笹標付標準寸法

- 堅襟下り 四寸より五寸まで
 - 堅襟幅 三寸五分内外、上で四分づめ
 - 小襟幅 堅襟幅に同じ
 - 小襟總丈 九寸より一尺まで
 - 小襟と堅襟とのあき 二寸内外
- 其の他は羽織又は長着に同じ。

圖六十五第



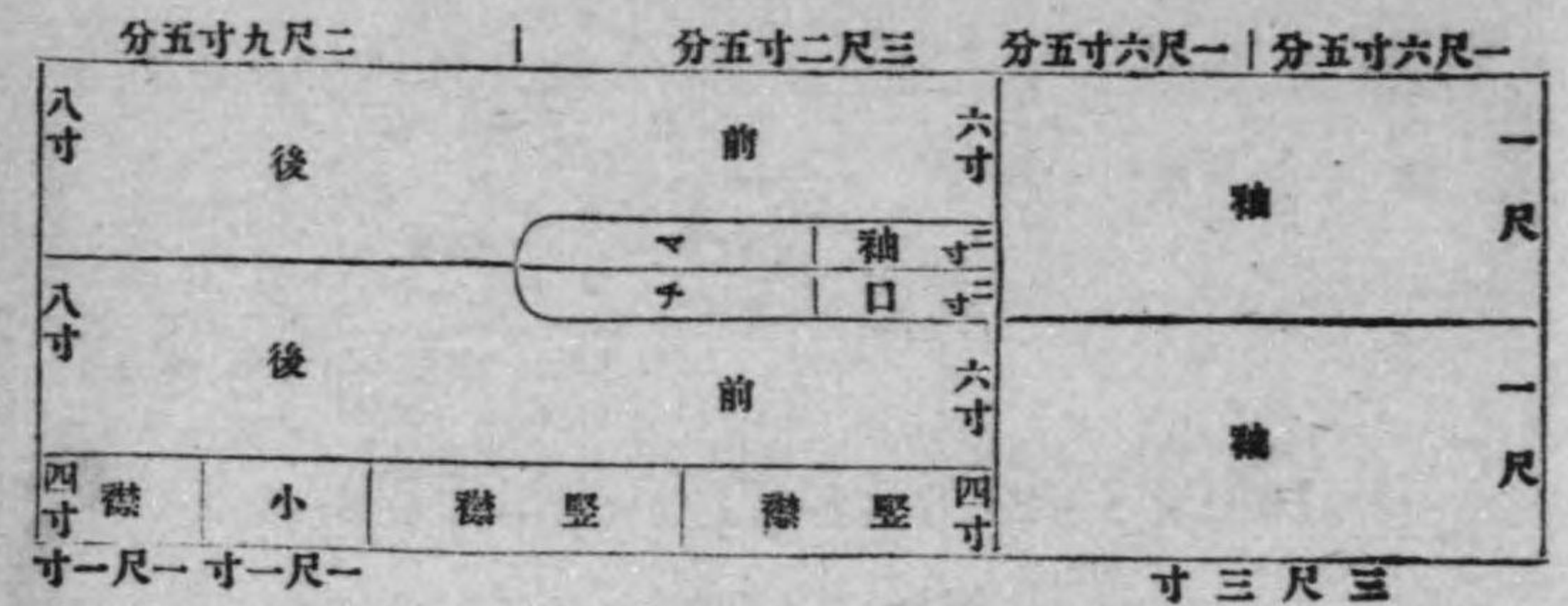
袖丈 身丈 下り 縫代
 $(14.5 \times 3 + 21.5 \times 8 + 10 \times 4 + .7 \times 8)$

表用布 裏用布
 $-180.0 = 117.7$

第十二節 四ツ身被布の裁方
 並幅(九寸五分)長さ一丈八尺の用布を以て四ツ身の被布を作らんとするには第五十六圖の如くになし、又裏用布の積りを知らんとせば上の算式によるのである。
 大幅(二尺)長さ九尺五寸の用布を以て袖丈一尺六寸身丈二尺二寸あがりの四ツ身被布を作らんとせば、並幅の裏用布は何尺いるで有うかといふを知るには第五十七圖と其の算式によるのである。

第十三節 四ツ身被布の篋標付及び

圖七十五第



袖丈 身丈 下り 縫代
 $(16.5 \times 8 + 22.5 \times 8 + 1.0 \times 4 + 4.7 \times 8)$

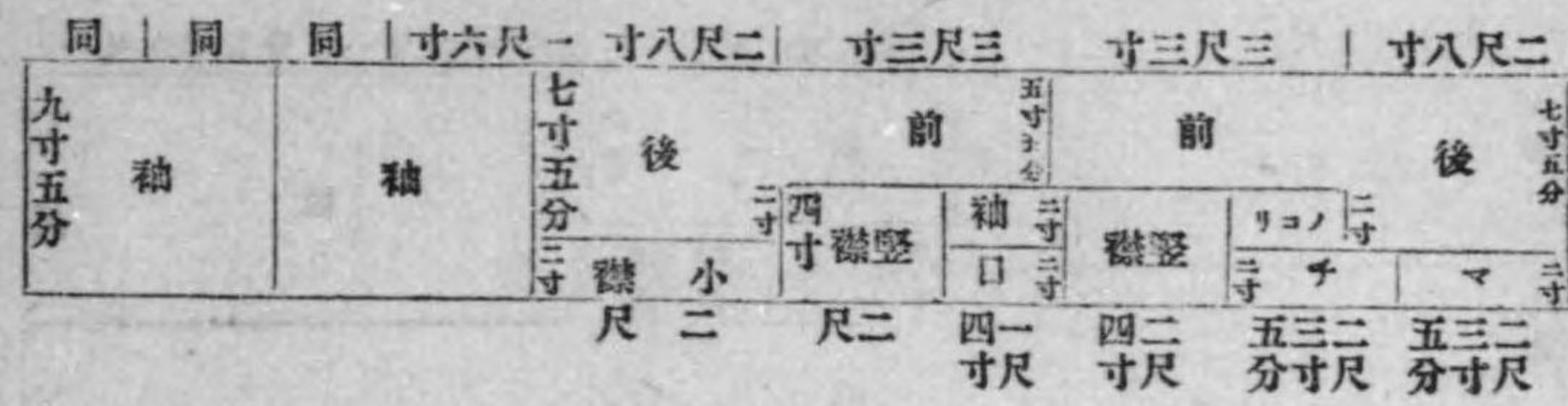
表用布 裏用布
 $-95.0 \times 2 = 321.6$

縫方
 本裁被布の篋標付竝に縫方の部を参照せられよ。

第十四節 四ツ身道行の篋標付標準寸法

四ツ身道行の篋標付の寸法は、大體に於て羽織、被布と同様であるが、小襟の寸法は七八分とすればよいのである。

圖八十五第



$$\frac{\text{袖丈} \times 8 + \text{身丈} \times 8 + \text{下り} \times 4 + \text{総代}}{\text{表用布} \quad \text{裏用布}} = 123.6$$

$$(16.0 \times 8 + 21.5 \times 8 + 1.0 \times 4 + .7 \times 8)$$

$$- 186.0 = 123.6$$

第十五節 四ツ身道行の裁方

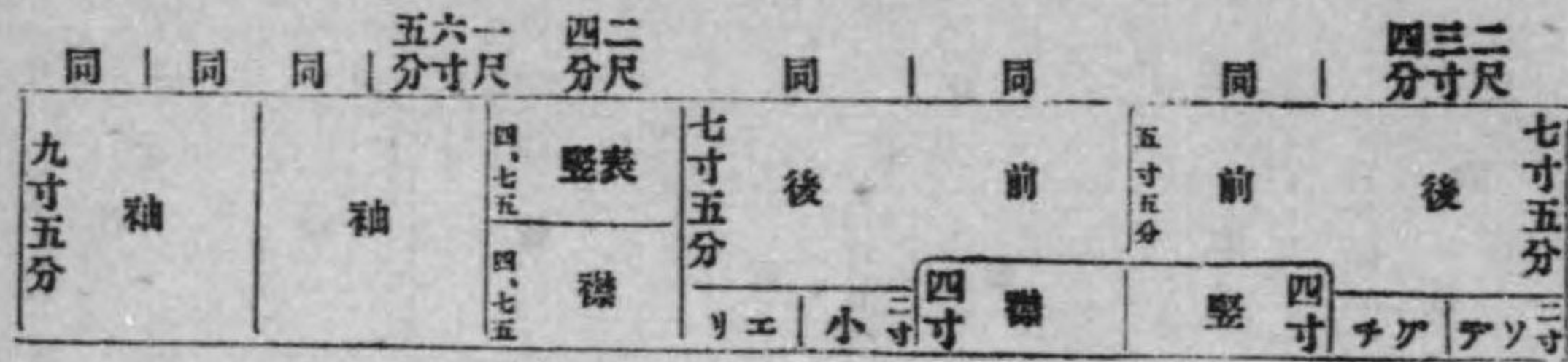
並幅(九寸五分)長さ一丈八尺六寸の用布を以て、四ツ身の道行を作らうとするには第五十八圖の如くするのである、又裏用布の積り方は上式の如くするのである。

第十六節 四ツ身被布合羽の籠標付

標準寸法

四ツ身被布合羽の籠標付寸法は大體に於て羽織、被布と同様である、然し其の身丈の寸法は其の人限りとするのである。

圖九十五第



$$\frac{\text{總布} \quad \text{裏襟下り} \quad \text{袖丈} \quad \text{身丈}}{(180.0 + 3.0 - 165 \times 4) \div 5 = 23.4}$$

第十七節 四ツ身被布合羽の裁方

並幅(九尺五寸)長さ一丈八尺の用布を以て、四ツ身の被布合羽を作らんとせば第五十九圖の如くするのである、又身丈を積らんとせば上の算式によるのである。

第十八節 五ツ身長着

五ツ身、或は中本裁ともいふ、之は餘り世間では用ひないが、一應は心得て置くも畫餅ではあるまいと思ふ、依て其の一つを示す事としたのである。
並幅(九寸五分)長さ二丈三尺の用布を以て、五ツ身の長着を作らんとせば第六十圖の如き圖と算式に

第六十圖

尺三	寸五尺三	寸七	寸五尺三	同	同	同	七一 寸尺
衿	後	袖丈 六寸五分	袖口 三寸	袖	袖	袖	九寸五分
衿	後	前	後	袖	袖	袖	

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{綿布} \\ 230.0 \end{array} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{衿} \times 30.0) \right\} \div 4 = \text{身丈} = 35.0$$

よるのである。

第五章 本裁

第一節

本裁女物長着の籠標付標準寸法

- 袖丈 一尺六寸内外
- 袖幅 八寸五分
- 袖口 六寸より六寸五分まで
- 袖付 六寸より八寸
- 下やつ 三寸
- 身丈 三尺七八寸より四尺まで
- 後幅 七寸五分
- ゆき 一尺六寸五分(袖幅八寸五分、肩幅八寸)

前幅 六寸、だき凡五分づめ

衿幅 四寸、上で五分づめ

襟幅 三寸

衿下り 五寸五分より六寸まで

衿下 一尺八九寸より二尺まで

襟肩 二寸三分上り

第二節

本裁男物長着の籠標付標準寸法

袖丈 一尺四寸

袖口 七寸五分より八寸まで

身丈 三寸五分より三寸八分まで

後幅 八寸

衿下り 五寸より五寸五分

衿下 凡一尺七八寸

腰揚 後は袖付より一寸五分下りたる所、前はそれよりなほ一寸下りたる所

袖幅 九寸

人形 二寸より三寸まで

ゆき 一尺七寸五分(袖幅九寸、肩幅八寸五分)

前幅 六寸五分

衿幅 四寸、上で五分づめ

襟幅 一寸五分

第三節 本裁男女長着の重ものつめ方寸法

袖丈 男物二分、女物三分

肩幅 下着を一分出す

但し大袷のときは後三分、前三分

襟丈 二分づめ

袖幅 一分

身幅 後二分、前三分

襟肩 一分づめ

第四節 三枚重は中を普通になし上をのばし下をつめる

振袖の寸法

中振 二尺四五寸

袂の丸み 中五寸わたり、大七寸五分わたり。

大振 二尺七八寸より三尺まで

一、本裁長着の裁方

並幅物で本裁長着を作らんとせば、鉤衽裁と棒衽裁の二種がある。両面物

であらば鉤でも棒でも少しも差間はないが、若し片面物で鉤衽裁にせねばならぬ様な場合は随分困難なものである。依つて左に普通両面物の裁方として前記の棒衽裁、鉤衽裁の二種と片面物の裁方として、うば裁、帯かくれ裁、小持裁の三種を示すこととする。

二、鉤衽裁

並幅(九寸五分)長さ二丈八尺の用布を以て、本裁長着を鉤衽にて作らんとせば下圖の如くするのである。而してこの鉤衽の積り方は、身頃と襟衽用布との割當に長短なくして、直ちに身頃を知る方法であつて、算式中に袖丈を四倍して、用布の總尺より減くといふ事は何人でも理解れるけれど、其の残りの布を5.5にて割り、身丈を知るといふ事に就ては何故であるかと疑問する人の爲めに、茲に説明することとする。身丈は四倍を要することは勿論である。而して衽丈は身丈の一倍半あれば鉤衽の用布としては足りるのである。襟は勿論充分である故、身丈の四倍と衽丈の一倍半、之を合せて五倍半即ち

圖一十六第

分四寸八尺五	同	同	同	九八三分寸尺	同	同	同	五六一分寸尺
襟	衿	頃	身	袖	袖	袖	袖	九寸五分
五寸	五寸							

$$\frac{\text{總布} (280.0 - \text{總丈} 16.5 \times 4)}{\text{身丈} 5.5} = 38.9$$

5.5といふ數が出るのである。(第六十一圖参照)

三、棒衿裁

棒衿裁に就いての注意は、多くの人は動もすれば
 鈎衿裁を嫌ひて、棒衿裁にしたがる様であるが、成程
 棒衿にして置けば仕立直しの際に衿を上下にする便
 利はあるけれども、身丈をつめて迄も棒衿にせねば
 ならぬといふ理由はあるまい、殊に女物の如きは、
 腰に端折の少い時は着難くもあり、又それが爲め締
 めた細帯が、揚の下に半分もはみ出して居る扱は隨
 分と不體裁なものである。故に此棒衿裁にするのに
 は、用布の丈尺の充分にある時か、又は男物の如き
 袖身丈とも短かくてよき時に應用すべきものであ
 る。

並幅(九寸五分)長さ二丈八尺五寸の用布を以て、本裁棒衿男物を作らんと
 するに、袖丈一尺四寸五分の裁切とせば第六十二圖の如く又積り方算引も次
 の如くである。

算式のうちに、空の八寸といふものがあるが、之は多くの人の疑問とする事
 であらうが、之は身丈の四倍の布に、身丈より各四寸づつ、短くてよき衿丈を
 二倍して加へ、之を六で除り而して身丈を知る算法であるから、始め用布の
 總尺の内へ空として八寸を加へ(此の空といふ意義は身丈より四寸づつ、短か
 き衿丈の其の四寸を假りに有るものとして加ふる故即ち空である)用布の總
 尺を數の上に長くして置く必要があるのである。

四、うば裁(片面物)

此うば裁といふ裁方は、普通の両面物の鈎衿裁と少しも變りはない、然し
 鈎衿の裁方が第六十三圖の如くに左の向ふと右の手前とに切込みを入れて、
 圖のやうに斜に裁切るのである。何故此裁切に注意するかといふに此うば裁

圖二十六第

五寸	衿	衿	頃	身	袖	袖
四寸	襟					

$$\frac{\text{總布} \quad \text{空} \quad \text{袖丈} \quad \text{身丈}}{(285.0 + 8.0 - 14.5 \times 4) \div 6 = 39.1}$$

の裁方は、何れ片面は裏が表に出るは是非ないことではあるが、それにしてもせめて下前の衿になるやう心がくべきである。然し表と裏と非常に相違して居るものを下前とは云へ、裏を表に出す事は出来る事ではない、此場合は篋標付の方法により、兩衿共表布を使用する事が出来るのである、之は篋標付の項に記述する。

並幅（九寸五分）二丈七尺五寸の片面物の用布を以て、本裁男物をうば裁にせんとせば第六十三圖の如くになし、積方は其の算式の如くである、算式中5.5の意義は前項鈎衿裁に説明した通りである。

五、帯がくれ裁
帯がくれ裁（衿先繼ぎ棒衿）の裁方は一枚の衿は満

圖三十六第

四寸五分	襟	頃	身	袖	袖
五寸	衿	衿			

$$\frac{\text{總布} \quad \text{袖丈} \quad \text{身丈}}{(275.0 - 14.5 \times 4) \div 5.5 = 39.4}$$

圖四十六第

五寸	襟	頃	身	袖	袖
四寸五分	衿	衿			

寸四尺二 寸四尺三

足に上まへとなり、一枚は襟布の餘りをはぎ合せて下前の衿とする裁方である。
並幅（九寸五分）長さ二丈七尺八寸の用布を以て本裁女物を帯がくれ裁にせんとせば第六十四圖の如くするのである。

六、子持裁
片面物の鈎衿裁の中で比較的完全して居るのは此子持裁である、最も襟の山はぎとなる缺點はあるが、その山はぎは衿の抱合せの所から缺取りし三寸幅の長さ一尺二三寸のもの

圖五十六第



$$\frac{\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈}}{5.5} = 39.8$$

$$\frac{(287.0 - 17.0 \times 4) + 39.8}{5.5} = 39.8$$

を共襟として山はぎを隠す方法であるから、缺點としてあくべき程でもない。
 並幅(九寸五分)長さ二丈八尺七寸の用布を以て、本裁女物を子持裁にせんとせば第六十五圖の如くなすのである、又積り方は其の圖の下の算式の如くである。

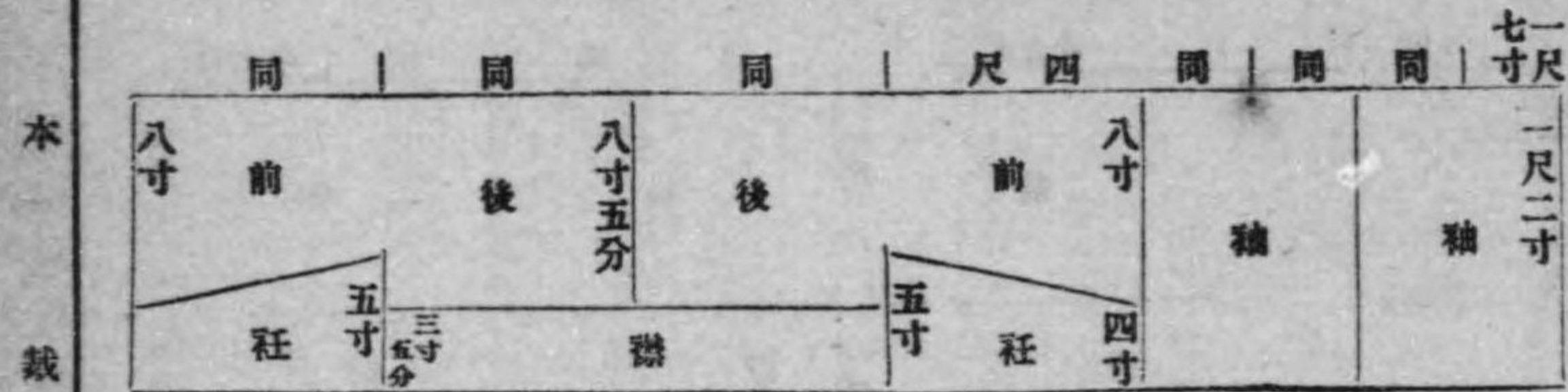
七、本裁(中幅物)

中幅(二尺二寸)長さ二丈二尺八寸の用布(友染縮緬等)にて本裁長着を作らんとせば第六十六圖の如く、而して積方の算式も其の如くである。

八、本裁(大幅物)

幅一尺六寸の用布を以て、女物本裁を作らんとせば第六十七圖如くに、又用布の積り方も其の算式の

圖六十六第



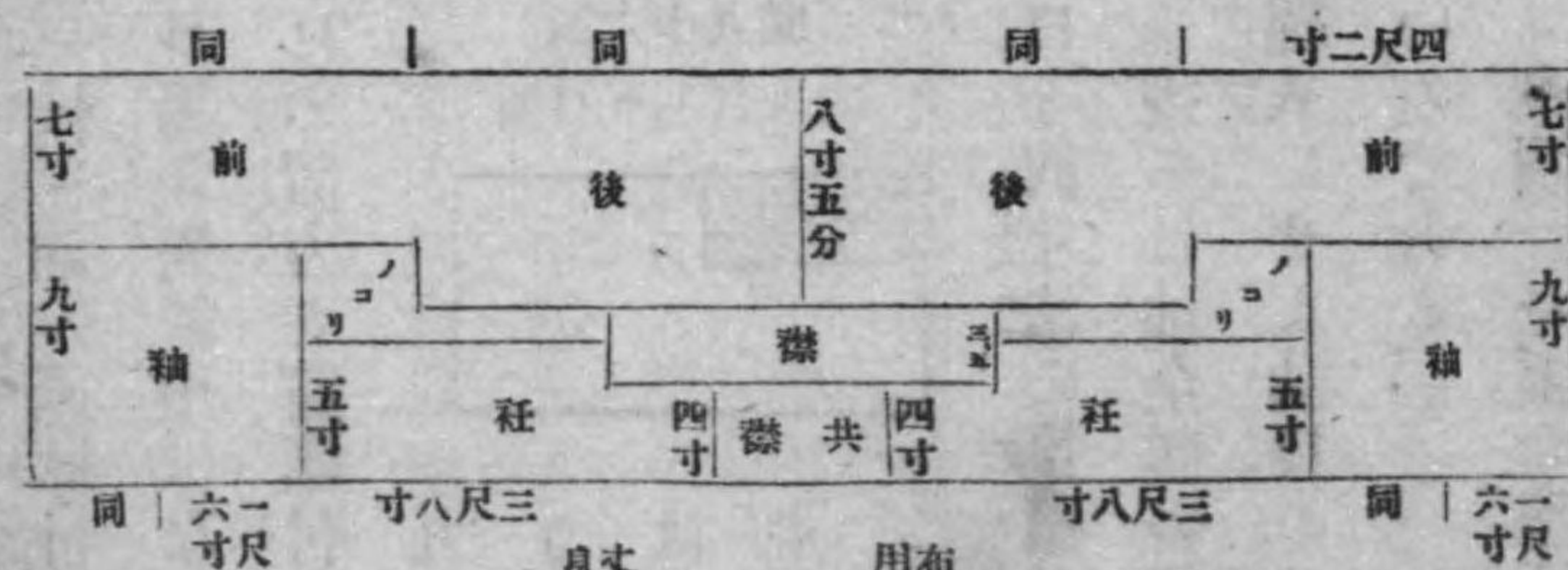
$$\frac{\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈}}{4} = 40.0$$

$$\frac{(228.0 - 17.0 \times 4) + 40.0}{4} = 40.0$$

$$\frac{\text{袖丈} + \text{身丈}}{4} \times 4 = 228.0$$

$$\frac{(17.0 + 40.0) \times 4}{4} = 228.0$$

圖七十六第



$$\text{用布} \times 4 = 168.0$$

$$42.0 \times 4 = 168.0$$

如くである。

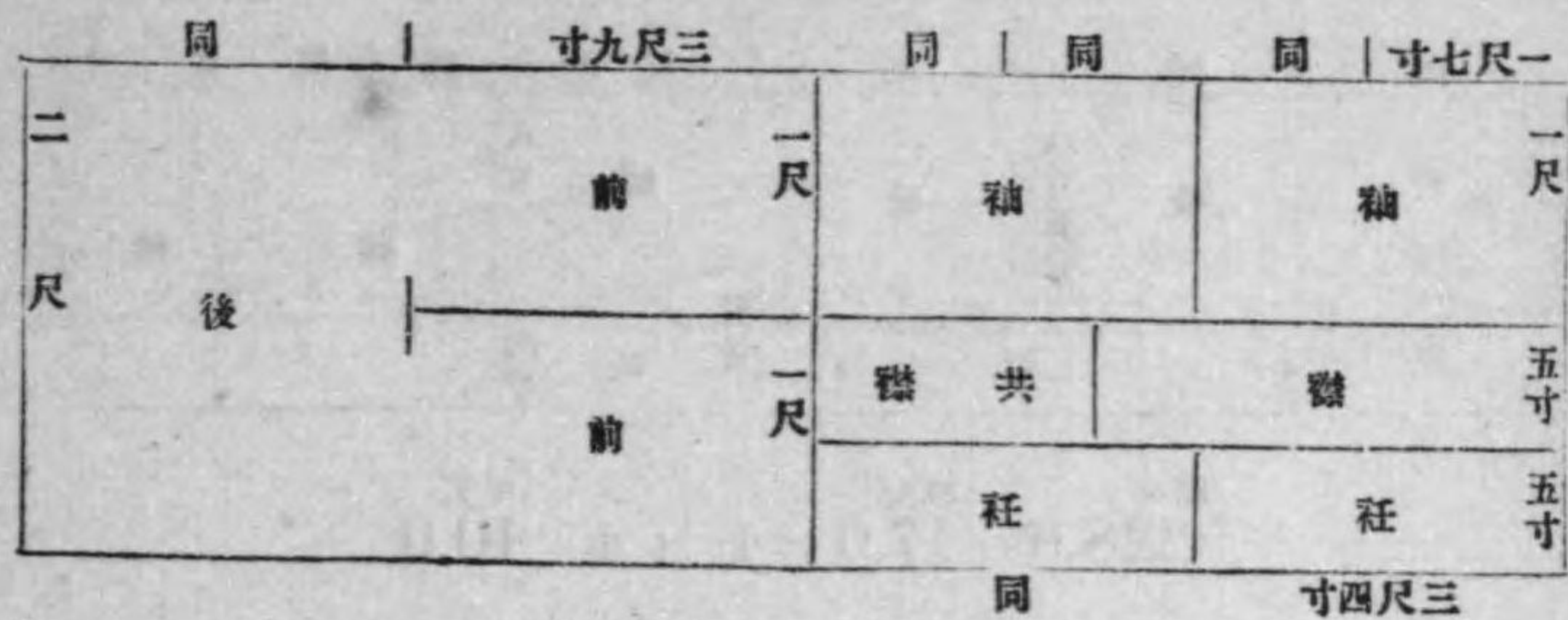
九、本裁(大幅物)

大幅(二尺)長さ一丈四尺六寸のネル地等の用布を以て、女物長着を裁つには第六十八圖の如くにするのである。

第五節 本裁長

着の籠標付方法と要所

圖八十六第



$$\frac{\text{用布} (146.0 - \text{袖丈} 17.0 \times 4) \div 2 = \text{身丈} 39.0}{}$$

圖九十六第
方キ置レキ口袖



袖の筥標付に就ては、一ツ身、三ツ身等と異なる事はない、要所としては袖口きの置方と筥標付である、其方法は第六十九圖の如くに裏袖に袖口のきれを乗る時に輪より一分はなして乗る事と、袖口の寸法を定めて筥標付する時に裏袖の輪より尺りて表袖口と同寸法に筥標付することである。斯して後に袖全體の筥標付をすれば衿にせよ綿入にせよ袖口のチリ／＼する様な事はないのである。

身頃 身頃の筥標付順序としては、最初

身頃用布を中表に二枚重ねて尙ほそれを二つに折り重ね、後身は上に襟肩の切込は左の手前にある様に、(所詮その用布の輪を左に) 正敷おき、夫れより背縫代、身丈、袖付、下やつ、(身八ツ) 後幅、肩幅、肩山といふ順序に筥標付をして、其れを左へ除き下に残れる前身の左の所で、衿肩切込の所から右へ衿下りの筥標付をなし、次に同じ衿肩の切込の所から抱筥標一尺三寸ときめ、次は又裾の所を抱筥標の所へ持ち來り而して右に輪を造り、其輪の所へ斜に中筥標の標をつけ、更に原の如く正敷して中筥標、抱筥標等で三分づめにし、又衿肩の切込の所は一分内に入れる様にするのである。

この前身頃筥標付の要所のつめ方は、裾幅より取つて中筥標、次ぎに抱き筥標、衿肩の三ヶ所で順次につめる、其のつめ方の割合を知るには次の算式によるのである。

前幅のつめ方の寸法を知る算式

$$\frac{\text{[衿肩上りの寸法} - (\text{後幅} - \text{前幅}) \div 3 = \text{何分づめ}}{}$$

假に女物として一例を擧ぐれば

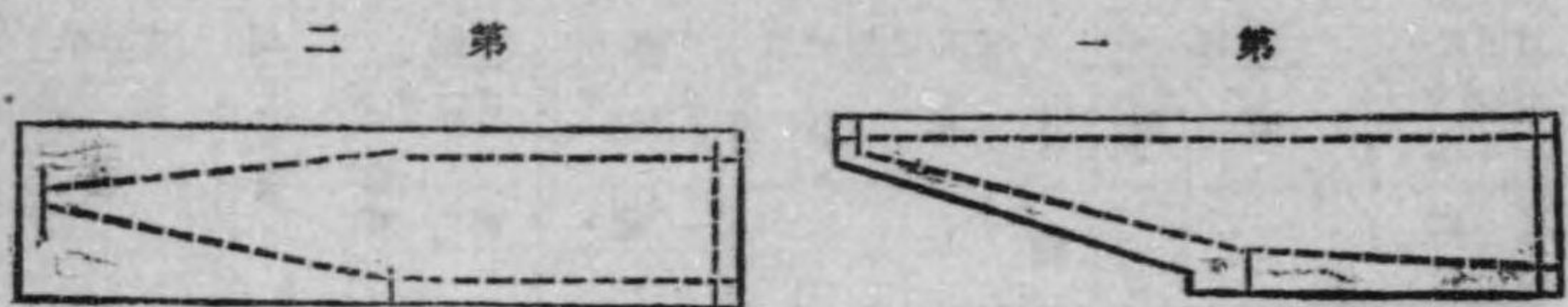
$$\frac{123.0 - (75.0 - 60.0)}{3} = 2.66$$

前記の算式の如くに、衿肩上り寸法より後幅より前幅を減じたものを減じ、其の答を三で除れば各要所で何分縮にするのであるといふことが知れるのである。

衿 衿の筧標付は棒衿、鈎衿との二種がある、其の筧標付の方法は一つ身三ツ身の其項を参照せられよ。然し本裁衿としては、鈎衿にせよ棒衿にせよ總て裾下の所で裾幅より五分詰にするが最も宜敷い、鈎衿としては第七十圖の如く衿全體に筧標付するのであるが、棒衿としては劍先の方は衿付の方より凡そ總幅の四分の一強寄せて、第二の如く全體に筧標付するのである。衿 衿の筧標付も又一ツ身、三ツ身と同様である故、其の項を参照せられよ。

要所としては、衿山より劍先相筧標迄で二分ゆるめ、夫より下は裾下迄の

第七十圖



間で衿の方が一分つまる事にするのである。

第六節 縫ひ方順序

單衣男物 單衣の男物としての縫方順序は初めに袖を作り、次に衿下縮をなし、次いで脊縫、肩當居敷當をつけ、それより揚(女物ならば揚はない)脇縫、衿付、裾縮、衿付、衿縮、袖付といふ順序である。

袷男物 男物袷の縫方順序は初めに袖口を掛け袖をつくり、表脊縫、揚縫ひ、表脇縫、裏脇縫、裏脊縫、裏脇縫、裾合せ、脊縫脇縫綴、袖付、衿裾合せ、衿付、衿下縮、衿縮、といふ順序である。

綿入女物 女物綿入の縫方順序は、袖口掛、袖、表脊縫脇縫、衿付衿附、袖付、裏脊縫脇縫、衿付衿付、裏袖

圖一十七第

寸三尺一	同	分五寸四尺二	同	同	同	寸三尺一
ツヤ	裾	裾	裾	レキ	ツヤ	九寸五分
レキ	裾	裾	裾	レキ	ツヤ	後
袖口	裾	裾	裾	レキ	ツヤ	後
寸六尺一	寸六尺四					

$$\frac{\text{総尺} - \text{裾丈} - \text{袖口}}{4} = 13.0$$

$$\frac{114.0 - (46.0 + 16.0)}{4} = 13.0$$

付、裾合せ、綿入、裾假綴、袖口、八ツ口、裾綴、縦綴、衿綴、衿縮、衿下といふ順序である。

第七節 本裁胴拔の周囲裁方

並幅(九寸五分)長さ一丈一尺四寸の用布を以て、本裁胴拔の周囲を作る場合は第七十一圖の如くするのである、又積り方の算式も其の式の如くでよろしい。

第八節 本裁胴拔ムクの周囲裁方

並幅(九寸五分)長さ二丈八寸の用布を以て胴拔ムクの周囲を作る場合は第七十二圖の如く裁つのである。又次にある算式は用布の手向ふと手前のキレに

圖二十七第

寸八尺四	寸六尺二	寸五尺一	寸二尺一	寸四尺一	寸六尺二
裾	裾	裾	裾	裾	裾
レキ	裾	裾	裾	裾	裾
袖口	裾	裾	裾	裾	裾
寸八尺四	寸六尺二	寸五尺一	寸二尺一	寸四尺一	寸六尺二

$$\text{表裾} (12.0 \times 2) + \text{裏裾} (14.0 \times 2) + \text{ツヤキレ} (26.0 \times 2) + \text{表整裾} (22.5 \times 2) +$$

$$\text{裏整裾} (24.5 \times 2) + \text{襟先} (5.0 \times 2) = 208.0$$

$$\text{表裾} (12.0 \times 4) + \text{裏裾} (14.0 \times 4) + \text{ツヤキレ} 26.0 + \text{袖口} (15.0 \times 2) + \text{襟丈} 48.0$$

$$\text{総布尺} = 208.0$$

長短があるか無いかを對照する方法である。

第九節 胴拔長着の籠標付

胴拔の長着といふは袖、身頃等で外部から見えぬ所へは比較的安價き布を使用して、周囲の外部から目につく所には、價の高い布を使用して造つた物を云ふのである。此胴拔長着の籠標付に就て順序を云へば、袖布の上に表袖口ギレ、表八ツ口キレ等を正しくのせ夫より普通の袖の如くに籠標付するのである。

身頃 身頃の筥標付は、初め裾用布に裾の丈身幅等の筥標付をして、次に胴と裾との身丈の差引をつけて胴の丈及び身幅の筥標付をするのである。衽の筥標付は裾下と剣先とをはぎ合せ置きて、筥標付をするを最も宜敷とする。

襟 襟に就ては別に異なる事もない。

第十節 胴拔長着の縫方

胴拔長着の縫方は、袖に袖口キレ、ヤツキレを取り付け、而して後に袖を縫い、身頃は初め前後とも胴と裾とをはぎ合せて、折り目は下へ返すやうにして遠くかくし躡けをなし、夫れよりは普通の長着を縫ふ順序に造るのである、衽付、衿付なども又長着と同様の順序である。

第十一節 本裁比翼の裁方

比翼 これは昔支那で想像した鳥の名に比翼鳥といふがある、この鳥は片翼の雌雄の鳥が二羽抱合ふて、兩翼となり飛ぶといふ其鳥の如く、胴は一つで袖口、襟、裾等の周圍の外に出る所が二枚になれるもので、つまり比翼鳥に似て居る故に比翼といふのである。

並幅(九寸五分)長さ四丈ある用布を以て、本裁比翼を裁断たんとすれば第七十三圖の如くにするのである、又其の算式は用布手向ふの各キレと、手前の各キレの總丈尺に長短があるか、ないかと對照し見る算法である。

第十二節 比翼の筥標付方法

袖 比翼の筥標付の順序方法として、先づ第一に裏袖を各一枚づつ、正しく折り重ねて輪を左方におき、而して左の向ふの所へ次の順序を以て袖口キレ及びヤツキレを正しくのせるのである、然して此の袖口キレの置き方は最も注意すべき要所である。

次ぎに裏衽の上に表衽を其のまゝ乗せて、襟先の筧標と筧標とを合せて待針を打ち、向ふの所は衽の二倍の所で針を打ち、夫れより衽丈をきめ其所で一分の空き筧標をつけ、又裾下をきめ又其の所で衽幅を五分づめにして全體に引筧標か或はチヨイ／＼と斷續の筧標付をするのである。

襟 襟丈は上着と下着とは一分づめにして、襟丈をきめ、劍先相筧標をきめるのである。

第十三節 比翼の縫方方法

此比翼の縫方としての順序は、初め袖用布を表の方よりは下着の表袖口布上着の裏袖口布を差込といふ方法にのせ、又裏よりは下着の裏袖をあてる様にして雙方より挟みて四ツに縫ひ、又振の方も同じ心にて縫ひつけ、それより袖尻の方を縫ひ袖造りをするのである。

身頃 身頃の縫方順序としては、上着の裏の裾廻しを前後各四枚を縫ひ合

せ、次ぎに下着の裏裾廻し四枚を縫ひ合せて、そのつぎには下着の裏裾廻しを四枚とも縫ひ合せ、其の後各々衽付の筧標の上部の所へ凡五寸位の三角の襠布を縫ひつけ、次ぎには其の裾廻し三枚と胴裏一枚と縫ひ合せ、(襠布の所は三角に縫ひあけ)折り目は胴裏の方へ返して内襠をなし、夫から上着の裏裾廻しと裏堅裾と縫ひ合せ、又下着の表裾廻しと表堅裾と縫ひ合せて、次ぎに下着と裏裾廻しと裏衽と縫ひ合せ、(何れも三角の襠布の端まで縫ひ進む)夫よりは上は三枚と胴裏一枚と四ツに縫ひ進むのである。

襟 襟は裏襟二枚に五七寸宛の襟先きれを縫ひつけ、折目は襟先きれの方へ返し、内襠けをして夫から下着の表襟と上着の裏襟と下着の裏襟と夫々襟先きれのはぎ付までを限りとして、衽きれへ別々に縫ひつけ、夫から上は一枚と二枚とで挟みて四ツに縫ふのである。この二枚は差し込みといふ方法にするのである。その次ぎには左右の裏袖を縫ひつけ、次ぎは又表身頃を總べて縫ひ之が縫ひ終りたれば上着、下着とも裾合せして裾先を造り、下着は衽

綿のみを入れ、上着は全體に綿を入れる様にして、夫れより裾下を縫ひ（又は縮け）襟をとち且縮け又袖口、振りを縮け仕上げするのである。

終りに一言したきは身幅の縮め方であるが、之は普通重ね衣服と同じ方法で宜敷が、場合に因では總體で一分位の多くつめても可いのである。

第十四節 付比翼

付比翼、此付比翼は小袖の廻りに比翼を綴付たものであつて、半重ねの如く略した仕立方ではあるけれど、取りはづしが容易である故、場合によつてはこの仕立方を用ふることもある。

第十五節 付比翼の筥標付方及び縫方

付比翼の筥標付方は、本比翼と同じである、又縫方としては小袖の如くに上着を作り、袖口、八ツ口、裾廻りを拵へて、これを上着に綴付るのであ

る。

第十六節 単衣の重ねに就て

此の単衣重ねは、其の因の起りは女官裳装の單なる仕立方から出たものであつて、昔は御殿服であつて、普通の人はあまり用ひなかつたのである。随て其の仕立方も普通の單衣の縫方とは、總てが相違して居るのである。袖口なども本來は抱き合せにするのであるが、今では裾、裙下、等は普通の單衣を二枚重ねた様に造るが、本來から云へば總てを抱合せにすべきものである。襟の付方は身頃の縫込が上着の襟へはいる様に表上着の一枚と残り三枚とで身頃を挟んで縫ふのである。

第十七節 重ね衣服に就ての要所

重ね衣服として身幅は、前後で何分づゝつめて出るのであるかと云ふに、

先づ大別して次の三種であらう。袷口綿の類ならば前二分、後二分、又小袷、中袷、綿入即ち七八分袷迄は後三分、前三分、大袷即ち一寸袷以上であらば後三分、前三分と云ふ割合に縮めるのである。

身丈 之は材料が同一の品であれば、袷口綿の類は別に縮める必要もなければ、唯その下着となるべき材料が伸る性質であるとか、或ひは上着とすべき品が縮まる性質であるとか、夫々に正當の理由がある時に、初めて五厘内外を伸べるか又は縮めるのである、又綿入類に於ては大體は同じ様のものがあるが、強て縮めるとするも、同一性質であるときは、五厘以内に限るのである。然し其の材料が前述の如き性質の場合は、一分内外を伸るか又は縮めるのである、大袷も略同である。然し材料の性質に依ては、一分迄は縮めても差支はないが、夫以上は其材料の性質が非常に伸るものか、或ひは縮るものに對しては二分以内伸縮する事もある。然し是は特別の場合である、此重ね衣服は下着の方が幾分か外へ見える様にすべきものである。

行袖幅 行は上下とも同一の寸法にすべきである、袖幅は少なくとも上より下へ一分宛縮めべきである。それで袖幅で一分縮めたる分は、肩幅で伸べて出る様にするのである。又袖丈は袷では一分以上、綿入では二分内外、厚綿入は三分迄はつめてよいのである。袖口は下着の方へ五六厘位つめて行くのであるが、縮める必要もないのである、襟は一分五厘内外の縮方にする。

第十八節 本裁女物袷纏の筐標付標準寸法

袖丈 一尺五六寸
袖付 七寸内外
身丈 二尺四五寸
肩幅 七寸五分
袷幅 一寸四分

袖口 六寸より六寸五分
袖幅 八寸七分
後幅 七寸五分
前幅 袷より真直
袷肩 着物より一分廣くする

第十九節 本裁男物袷纏の筐標付標準寸法

袖丈 一尺四寸
 袖幅 九寸
 後幅 八寸
 前幅 襟肩より真直

袖口 八寸
 身丈 二尺四五寸
 肩幅 八寸五分
 衿幅 一寸五分

第二十節 本裁女物袴纏の裁方

並幅(九寸五分)長さ一丈八尺二寸の用布を以て、女袴纏を裁つには第七十四圖の如く、又積り方も其の算式の如くである。

第二十一節 本裁男物袴纏の裁方

並幅(九寸五分)長さ一丈七尺六寸の用布を以て、本裁男袴纏を作らんとせば第七十五圖の如く、積り方算式も又次の如し。
 但し半衿の下は別布を用ふ。

第二十二節 男物綿入袴纏の縫方順序

男物綿入袴纏の縫方としては、
 初めに表袖、裏袖、次ぎに表身頃
 (背縫、脇縫、衿付、袖付、裏身頃
 (脊縫、脇縫、袖付)裾合せ、綿の
 入れ方、袖口縮、衿縮、衿縮、布
 綴、半衿掛、といふ順序である。

第二十三節 本裁女物羽

織の笠標付標準寸法

袖丈 着物より三分長く

第四十七圖

尺一	同	同	同	分五寸六尺二	同	同	同	五寸一分
襟	四七五	身	身	身	袖	袖	袖	九寸五分
襟	四七五							

$$\frac{\text{總布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{衿先})}{4} = \text{身丈}$$

$$\frac{182.0 - (16.5 \times 4 + 10.0)}{4} = 26.5$$

第五十七圖

尺一	同	同	同	寸七尺二	同	同	同	五寸一分
サキ衿		身	身	身	袖	袖	袖	
サキ衿								

$$\frac{\text{總布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{衿先})}{4} = \text{身丈}$$

$$\frac{176.0 - (14.5 \times 4 + 10.0)}{4} = 27.0$$

袖幅	八寸七分	袖口	六寸五分
袖付	着物より一分長く	身丈	二尺五寸より七寸
行幅	一尺六寸五分 <small>(袖幅八寸七分 肩幅七寸八分)</small>	後幅	七寸五分
肩幅	七寸八分	前幅	四寸八分
下り	一寸	下やつ	二寸か二寸五分
乳下り	八寸五分	襟付縫代	下で六分上で二分
襟幅	上のあき四分か五分、下で一寸七八分	襟肩	七寸八分
袖丈	着物より二、三分長く	袖幅	九寸
袖口	八寸	袖付	袖丈と同様
身丈	二尺六七寸	後幅	八寸

第二十四節 本裁男物羽織の笠標付標準寸法

肩幅	八寸五分	前幅	五寸
前下り	一寸より一寸五分まで	乳下り	八寸より八寸五分まで
襟幅	一寸九分より二寸まで	襟幅	一寸九分より二寸まで
襟肩	二寸五分上り	行幅	一尺七寸五分

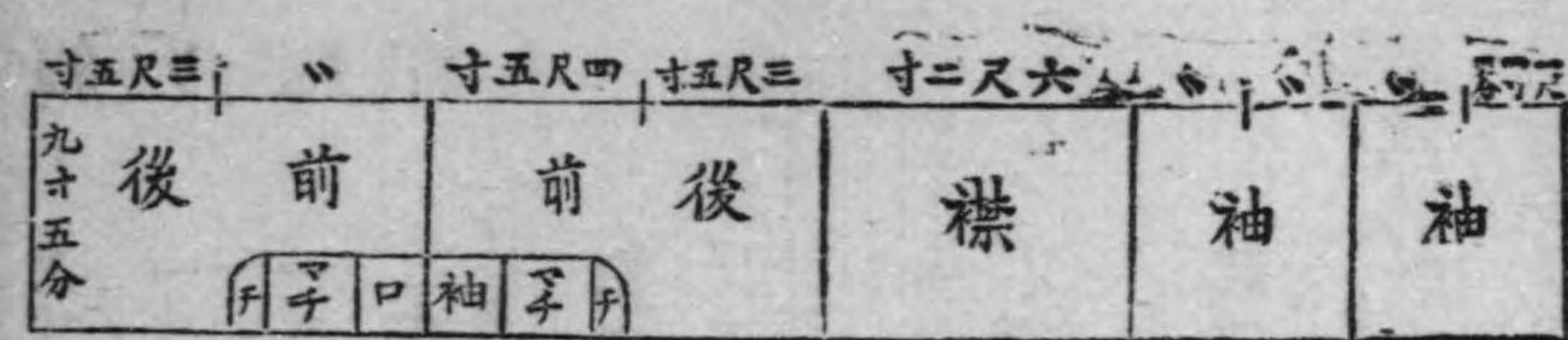
第二十五節 本裁羽織の裁方

並幅(九寸五分)長さ二丈八尺の用布を以て、本裁男物羽織を作らんとせば第七十六圖の如くするのである。積り方算式の第一の式は前丈、後丈を知る方法である、又第二の算式は裏布の積り方である。

第二十六節 積り方算式の解

第一算式は後丈と前丈の積り方である、初め表用布の丈尺より袖丈の四倍と衿丈とを減じ、其答より前、後の差一尺の二倍を減き、それを四で割りて

圖六十七第



第一算式

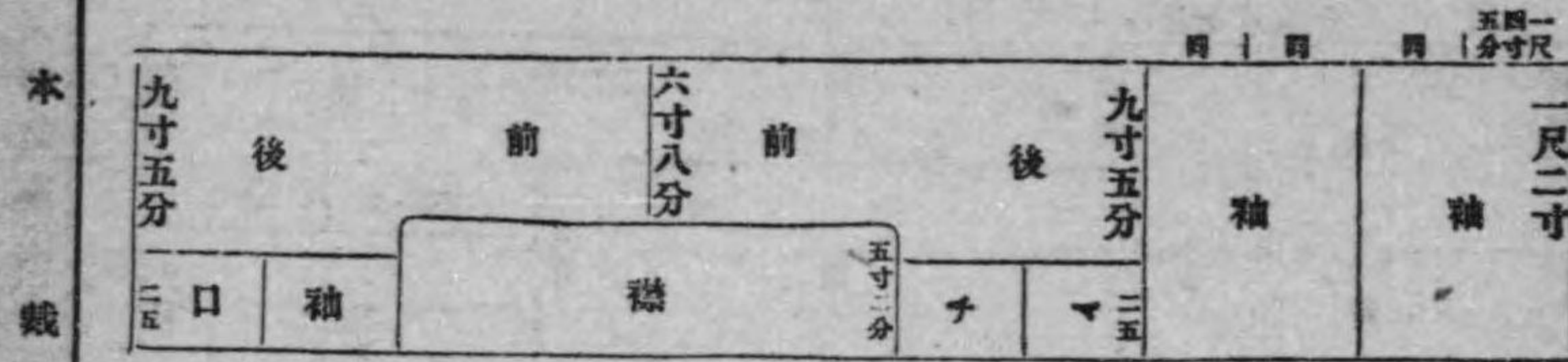
$$\begin{aligned} & \text{袖丈} \times 2 = 26.0 \times 2 = 62.0 \\ & \text{身丈} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{袖丈}) = 280.0 - (14.5 \times 4 + 62.0) = 160.0 \\ & (\text{前後ノ差} - \text{後丈}) \div 4 = (160.0 - 10.0) \div 4 = 35.0 \\ & \text{後丈} + \text{前後ノ差} = 35.0 + 10.0 = 45.0 \end{aligned}$$

第二算式

$$\begin{aligned} & (\text{袖丈} \times 8 + \text{身丈} \times 10 + \text{下リ} + \text{肩はぎ} + \text{襟代}) - 280.0 = 124.0 \\ & (14.5 \times 8 + 26.0 \times 10 + 1.5 \times 6 + 10 \times 8 + 20 \times 2 + 35 \times 2) - 280.0 = 124.0 \end{aligned}$$

後丈を知り、此の後丈に以前の差の一尺を加へて前丈を知るのである。第二算式は裏用布の積り出しの方法である、算式の内袖丈を八倍するは、表四倍と裏四倍であつて、身丈を十倍するは、身頃が裏表で八倍と左右の襟丈の二倍を合せたものである。又下り

圖七十七第

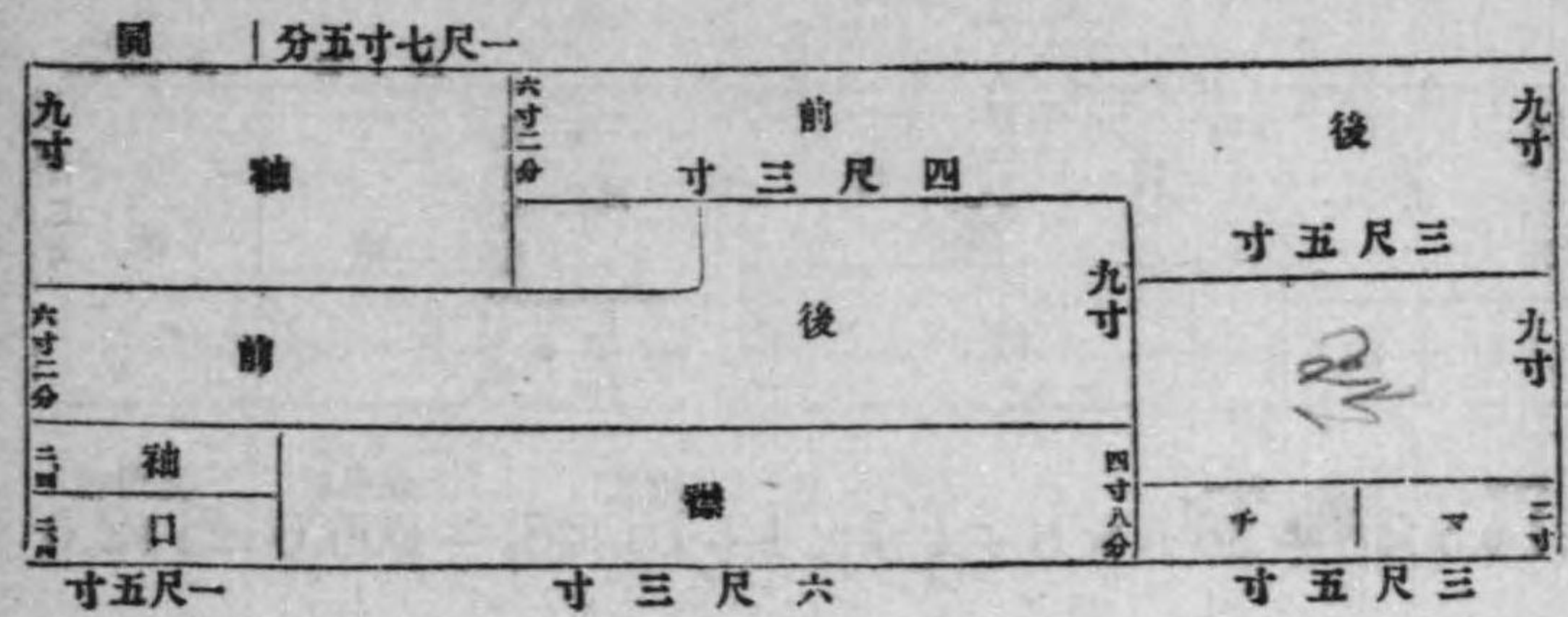


$$\text{袖丈} \times 8 + \text{身丈} \times 8 + \text{下リ} + \text{襟代} + \text{表用布} - \text{裏用布} = 142.0$$

$$(14.5 \times 8 + 26.5 \times 8 + 1.5 \times 4 + 10 \times 8) - 200.0 = 142.0$$

を六倍するは、左右の前身の裏表で四倍と、左右の襟先で二倍を合せたもの、又、胴はぎを八倍するは身頃が八倍であるからである。襟先を二倍するは、襟の左右が何れも一寸づつを要するからで、襟肩と襟肩廻しゆるみ三寸五分を二倍するのは、左右の襟の全體に關するからである。故に此各部を合計した尺數から表用布の丈尺を引けば、答は即ち裏用布に求むる所の丈尺である。中幅二尺二寸長さ二丈の用布を以て、本裁男物羽織を作らんとせば第七十七圖の如く裁つのである、又裏用布を積らんとせば、上の如き算式によるのである。大幅二尺長さ一丈一尺三寸の用布を以て本裁

圖八十七第



總布 前後ノ差 後丈
 $(113.0 - 8) \div 3 = 35.0$

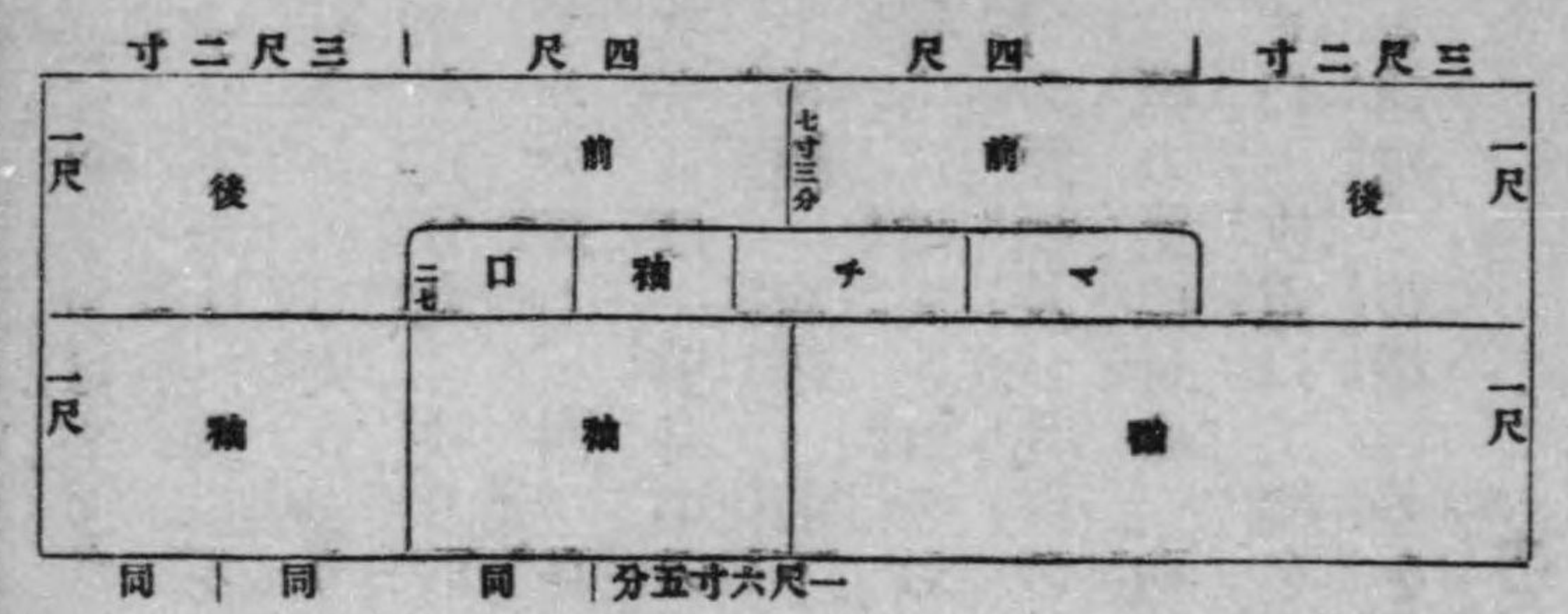
後丈 前後ノ差 前丈
 $35.0 + 8 = 43.0$

女物羽織を作らんとせば、第七十八圖の如くするのである、又其の算式は後丈、前丈を知る方法である。
 大幅二尺長さ一丈四尺五寸六分の用布を以て、本裁女物羽織を作らんとせば、第七十九圖の如くに裁つのである。又裏用布を積らんとせば其の算式に依るのである。

第二十七節 羽織籠標付の順序方法

羽織の籠標付として順序は、袖からであるけれど之は長着の袖と異なる事もある事とする。

圖九十七第



袖丈 身丈 下ノ 開はぎ縫代
 $(16.5 \times 4 + 26.5 \times 8 + 1.3 \times 4 + 10 \times 8) -$

表用布 裏用布
 $145.6 = 145.6$

ない故、茲には略して身頃より説明する事とする。
 身頃 身頃の用布を中表に二つ折りにして、(小裁には輪はない) 輪を右にして正しく置き、其の輪より五寸としてチヨット標をつけ、(小裁なれば布端から三寸或は四寸) 而して後ち左の布端を其籠標の所へ持つて来て、左の輪の所へ強く折り標をつけ、更に開いて其の中間の折り標しの所の向ふ前へ肩山の標として針をうち、次の其の針より左へ後身丈をきめ、其の餘りを其上に折り返して止め針をうち、又右も

本
裁

本
裁

同じ様に針よりはかりて前身丈をきめ、餘りを其の上へ折り返して止針を打ち、次は其の上へ裏布を二枚重ねて正しくのせ、左右の止針だけを裏布の上より打ちかへ、夫れより胴はぎの筧標付して、其の次は襟肩の所より前身頃を二寸七八分丸く抉り取る様に缺落すのである。(三ツ身であれば襟肩の所の缺のこりを落し、四ツ身であれば前を四寸後を二寸の割合に缺き落すのである) 次ぎには、前身頃の上に後身頃を正しく折り重ねて、夫れから脊縫、下やつ、後幅、肩幅、前下り、と云ふ順序に後身頃全體の筧標付をして、それから後ちに褶丈を計りおき、而して後身を左へ除ぎ、右に残れる前身頃の上に衿付の筧標及び乳附の筧標付をするのである。

褶 褶の筧標付は、初め褶用布を一枚づつ、外表に横に二つ折りにして、抱き合せて二枚重ねて輪を右にして正しく置き、夫れを次ぎの算式によりて正確なる前褶、後褶の差を見出し、夫れによりて筧標付するのである。

上の後褶寸法を知る算式圖

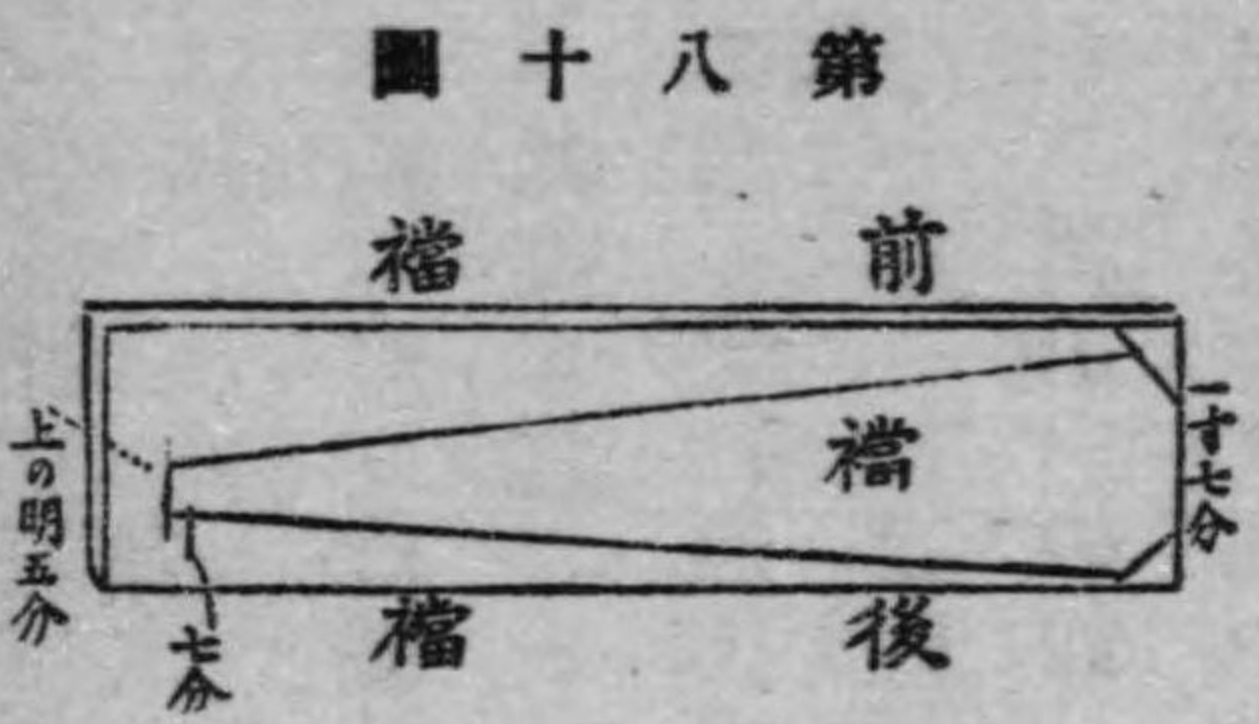
(褶幅-上の明)÷3+後褶継代=上の後褶寸法

今茲に一例を擧ぐれば

$$\begin{matrix} \text{褶幅} & \text{上の明} & \text{後褶継代} & \text{上の後褶寸法} \\ (17.0 - 5.0) \div 3 + 3.0 = 7.0 \end{matrix}$$

此算式に依りて得た答、即ち後褶の曲りは三分の一前褶の曲りは三分の二と云ふ方法は、本裁、小裁の別なく一定せるものである、而して褶全體に筧標付せる所を圖に依つて示せば第八十圖の如くになるのである。

襟 此羽織の襟造りは、數ある和服裁縫中で最も六ヶ敷ものと定められて、婦人として羽織の襟が完全に造り得れば、一人前として用ひられる位である故、充分の注意を要すべきである。



第十八圖

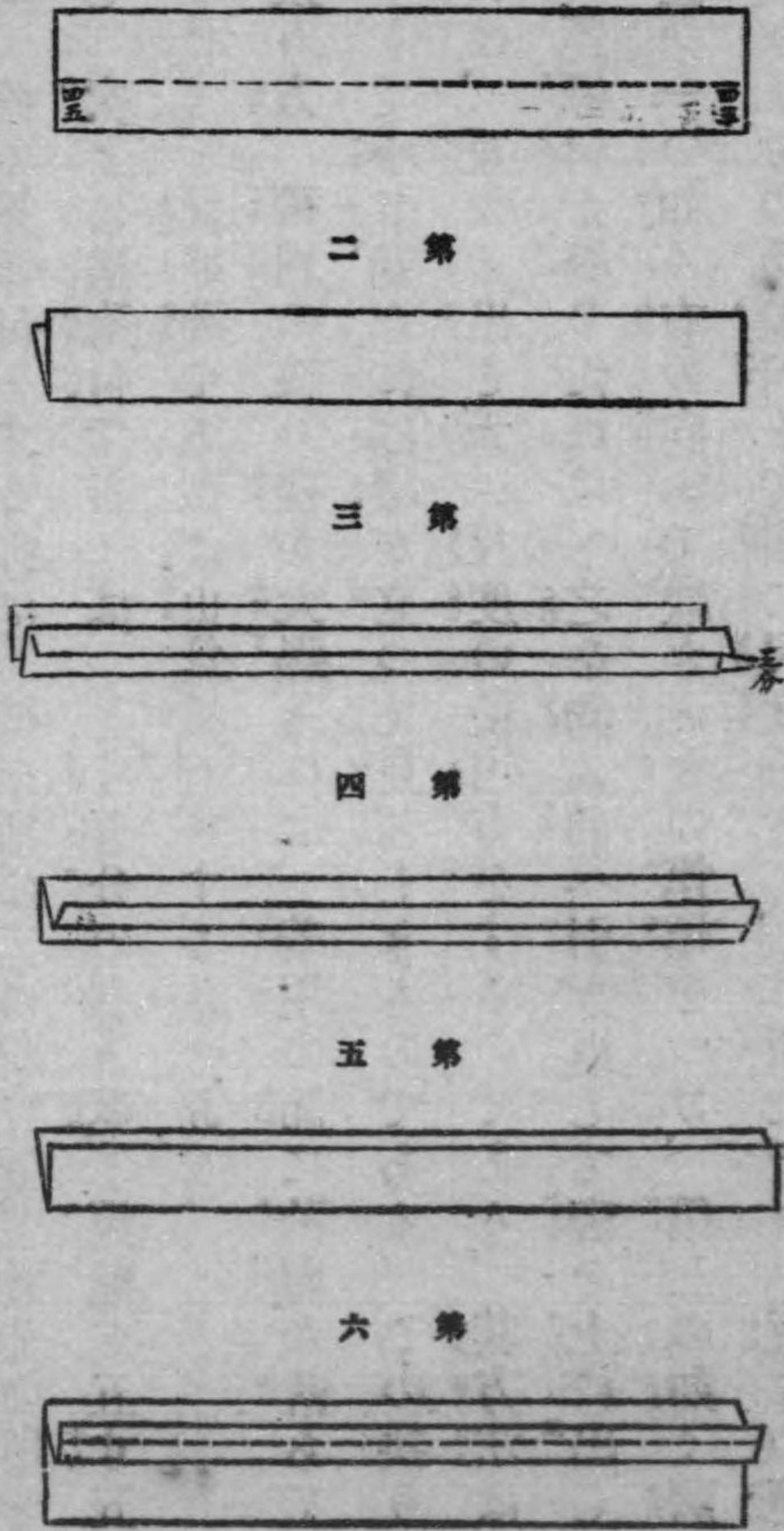
第二十八節 羽織襟造りに就ての要所

羽織の襟が袷纏の様になって仕舞つて困ると云ふ言葉はよく聞く事であるが、此襟が起きるといふのは、造り方が拙劣であるか、或ひは其の方法が誤つて居るのに原因するのである。今左に其の要所を説明する事とする。

先づ第一には襟用布の折り方である、衿の折り方としては、其の用布を第八十一圖第一の如に襟總幅の笥標付をするのである、茲に一例を挙げれば、二寸幅の襟であれば折り表と折り裏とで四寸、是れに表裏の縫代四分を折り、表のゆるみ一分とを加へたる寸法即ち四寸五分として笥標付をなし、然し同じ二寸幅でも半幅襟の時は折裏の縫代を要せぬ故、四寸三分とするのである、その次ぎには、笥標を表に見て縦に二つに折り、輪を手前にして四寸五分と極まりし方を下にして第二の如く、次ぎに上になり居る廣き方を下の幅より五分せまく折り返し、次に第四の如くに天地して輪を向ふに正しく置き、第

五の如く手前の布はしを向ふの輪より一分去らせて折り、夫れを第六の如く中の折り込みだけを縫ちて置くのである。

第八十一圖 第一



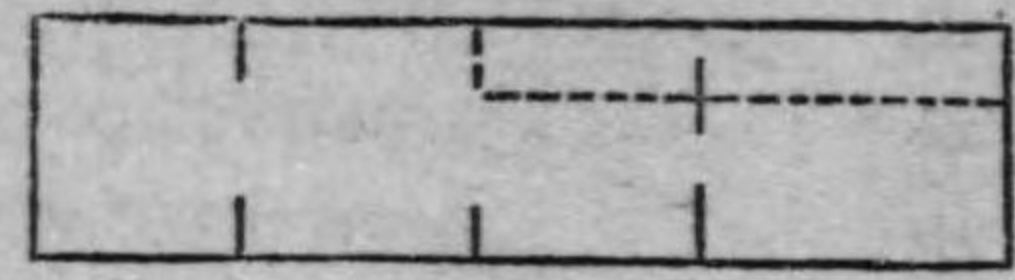
衿眞 衿眞は二重眞ならば始め折り、表の寸法の二倍から六分減きたる寸法が總幅である、夫を六分違ひにして二つに折る時は、一枚は表の幅と同寸

法になり、又折り返したる方は夫より六分狭くなる、一重眞の時は折り裏の幅より五六分狭くして造るのである。

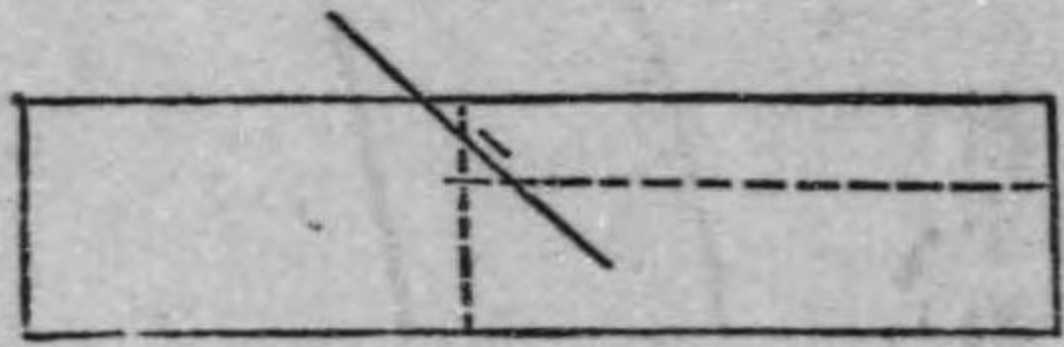
袷標 袷の筒標付をするには、袷を横に二つ折にして袷先の所を正確に裁ち落とし、次に鐵砲付であれば、三寸五分の引き返し筒標と五寸五分の相筒標をつけて、又縮袷であれば山筒標だけするのである。

袷肩袂り方 袷肩の袂り様が太過ぎれば、着用の際に袷肩が落ちて見苦しく、然りとして小さ過ぎれば襟が立つて見苦しきものである。この袂りの筒標をするには、互りと出と云ふ尺度の使用方をするのである。其方法は身頃に胴はぎの筒標付が終りたれば、之を向ふ前へ引き返して表を出して、第八十二圖第一の如く右の向ふで缺きとりの筒標をつけ、第二の如く肩山の折り目と缺きとりの筒標付とで斜に尺度をあて、其所にチヨト互りの筒標をつけ、其の筒標の左へ第三の如き出の筒標をつけ、第四の如く丸く袂りとするのである。

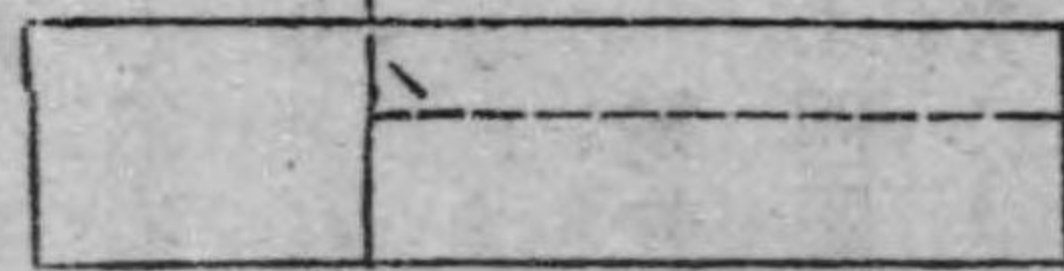
圖二十八第 一第



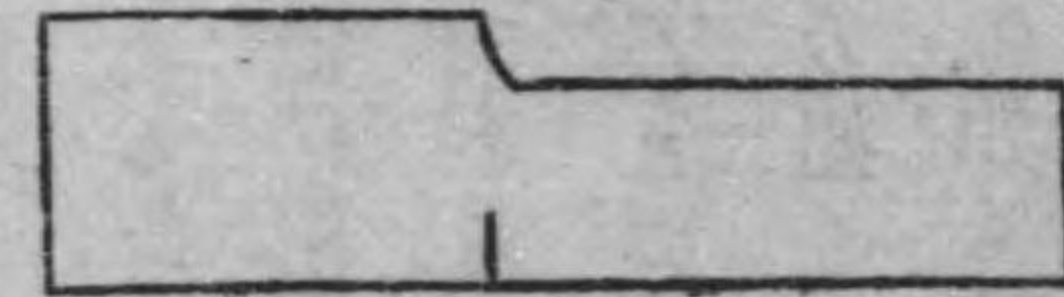
二第



三第



四第



前身袷付の筒標

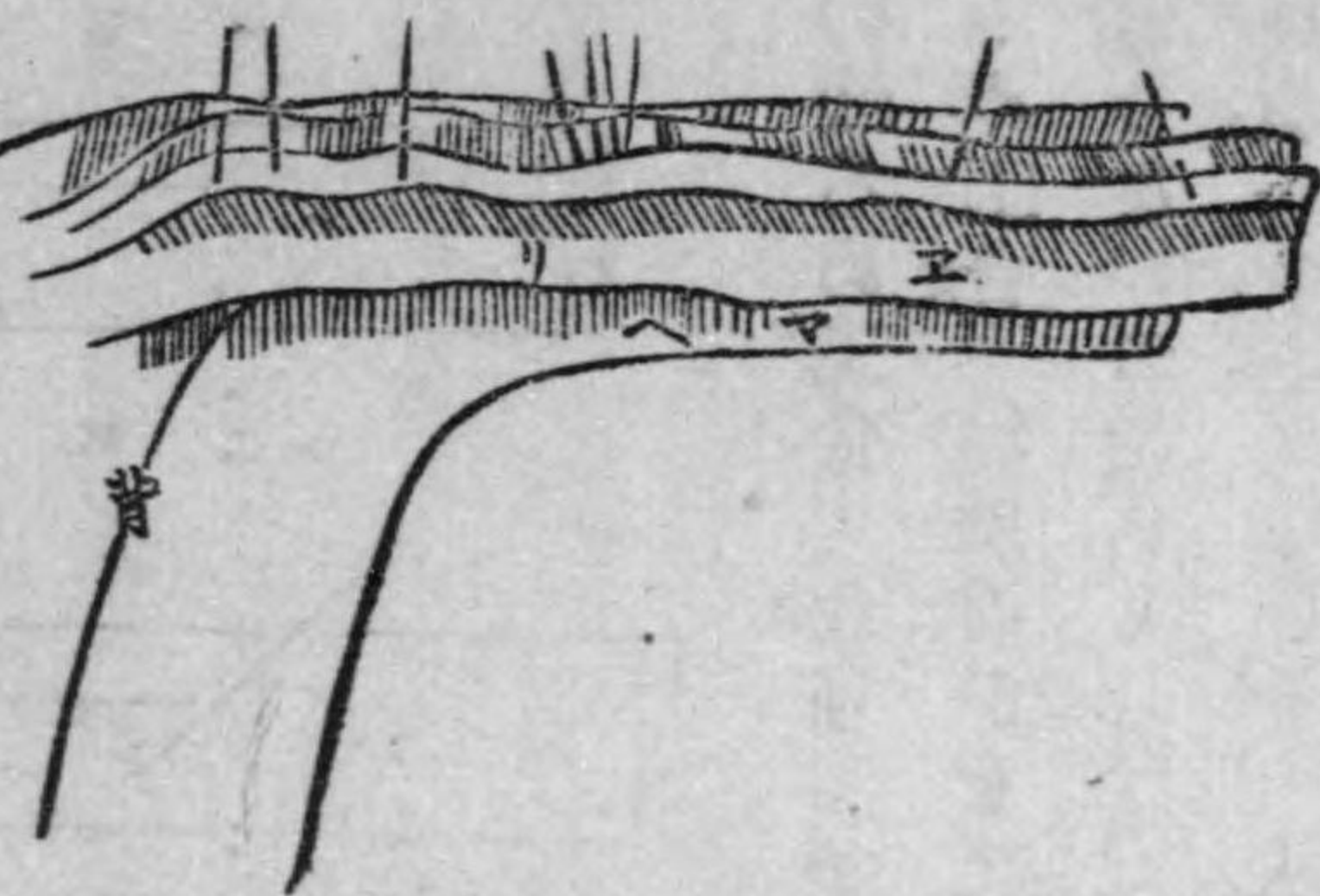
之は袷肩の袂り止り邊で二分の縫代、乳下りの筒標の所で三分の縫代、裾の所で五分か六分の縫代に何れも筒標付するのである。

袷のゆるめ工合

此ゆるめ工合は、袷付に付て最も大切なる要所である、このゆるめ工合や場所違ひをしたならば、如何に他の部分が完全するとも到底襟は返らないのである。其方法は第八十三圖の如く、背縫より一寸内外だけは襟も身頃も平均でよいが、夫より下を襟肩の丸く袂りし所だけで軽く指先を入れて見て、身頃の方は張て居て襟布のみ指先一本だけのゆるみで居るを可

として、針を打ち、夫より下は乳付まで、同様に指先一本だけ襟布を伸め、乳

付より下は裾より上六七寸の所まで襟も身頃も平均にして、伸縮の無い様にして針を打ち、其針より下は裾までの間で指先一本だけ襟布を伸めて待針を打ち、夫より伸み居る中間に任意の待針を打つのである。若し鐵砲付である時は、一旦要所の待針を終りたれば、更に相筈標によりて針を打つやうにするのである。



第三十八圖

先の所を一分出して、針を打ち、次には第二の如く襟付の縫ひ止りよりも向ふへ五分、左へも五分よせて其の所まで圖の如く縫ふのである。又襟先の折

衿先の縫方と折込方 縫方としては第八

十四圖第一の如く、折裏となるべき方の襟

込方は第三の如く、折り表の方即ち眞の上の圖の如く折り返してとち付けるのである。

第二十九節 羽織縫方の順序

羽織の縫方順序としては、初めに袖を造りお

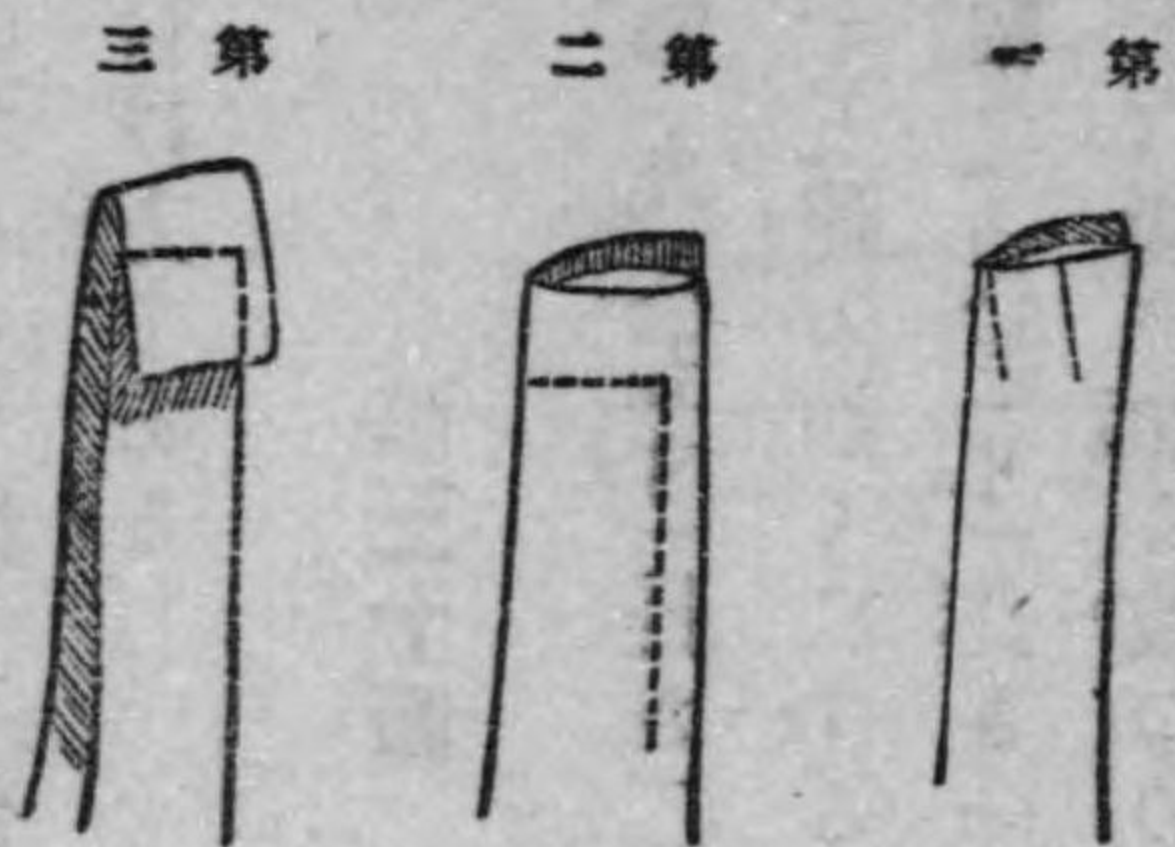
き、次に胴はぎをして夫より脊縫、前襟付、衿付、後襟付、袖付と云ふ順序である、綿入である時は、胴はぎ、脊縫、前下り、兩襟付、衿付、

衿先、と云ふ順序である。此内最も困難なるは衿付である故、充分の研究を要する事である、襟付に關しては、襟造りに就ての要所の項に記述しあれば、よく、研究せられたきものである。

注意

羽織の胴裏、大幅物で脊の眞中に模様なぞのあるときは、裏には脊縫を

第四十八圖

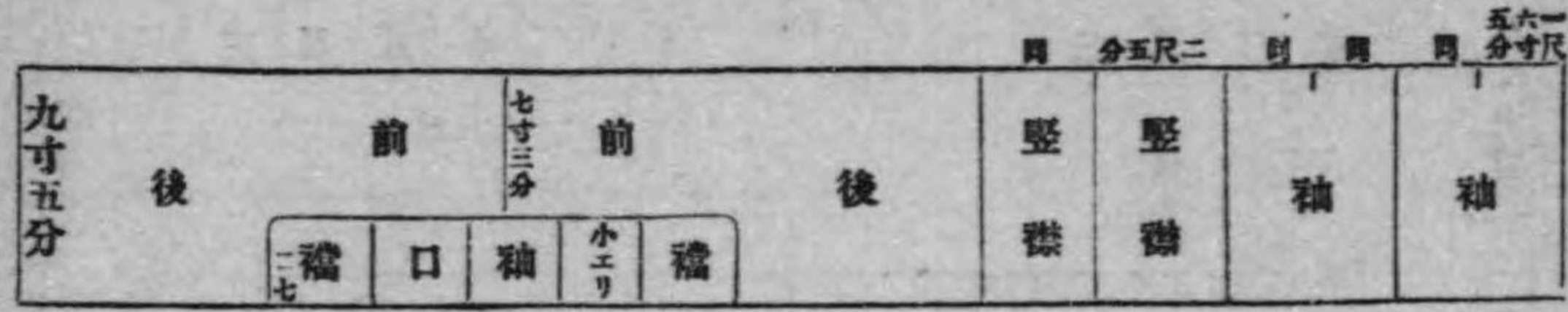


しないのである故、襟肩を明けるとき、裏は脊縫の縫代だけ小さく明けるのである、又胴はぎをするときは、初め表の脊縫をして次に胴はぎをするのである。
 紋の付け所、紋の下りは脊は衿肩より一寸八分、袖は山より一寸八分より二寸位迄で、前身の紋は肩より四寸下りたる所で、幅の真中に付けるのである。然し子供物は脊縫を衿肩より一寸三分、袖は一寸五分位の付け方である。

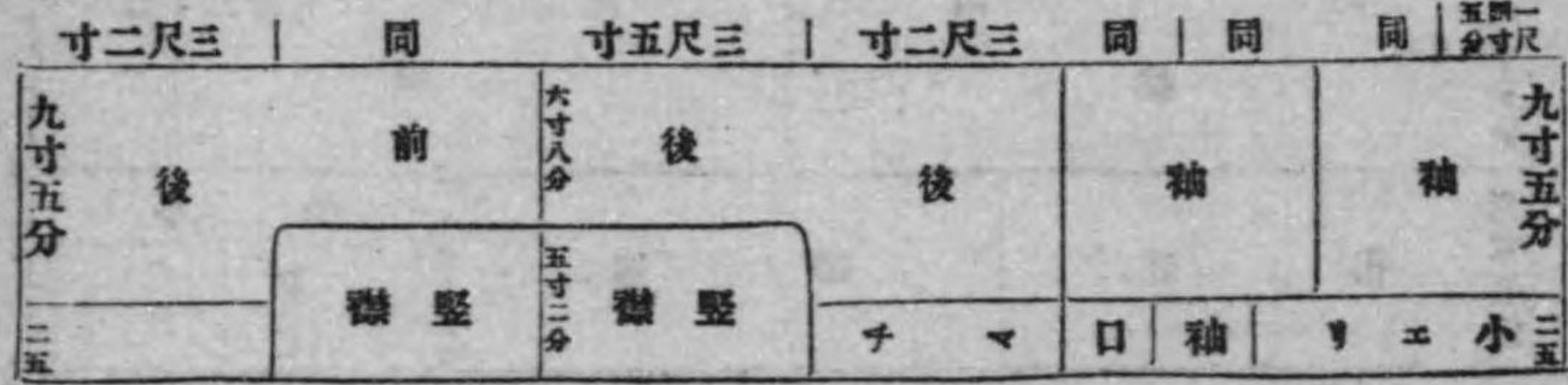
第三十節 本裁道行の裁方

並幅（九尺五寸）長さ二丈八尺三寸の用布を以て、本裁道行を作らんとせば第八十五圖の如くにするのである。
 中幅（二尺二寸）長さ一丈九尺二寸の用布を以て、本裁道行を作らんとせば第八十六圖の如く裁つのである。又裏用布の積り方は其の算式によるのである。

第五十八圖



第六十八圖



$$\text{袖丈} \times 8 + \text{身丈} \times 9 + \text{下} \times 4 + \text{総代} \times 8 -$$

$$192.0 = 175.7$$

る。
 大袖（三尺七寸）長さ七尺の羅紗地用布を以て、本裁道行を作らんとせば、第八十七圖の如く裁つのである。

第三十一節 本裁被布合

羽の裁方

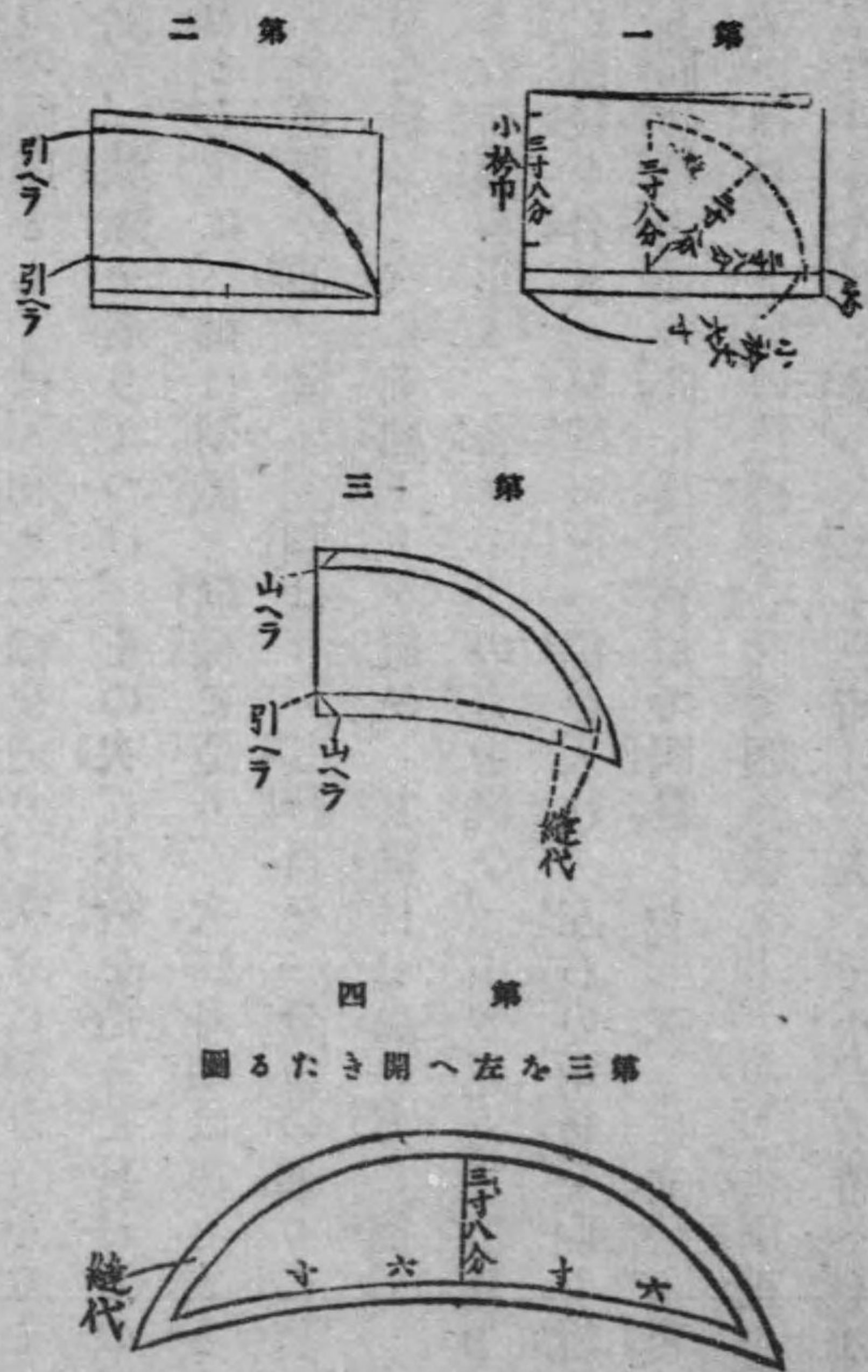
並幅（九寸五分）長さ二丈七尺の用布を以て、本裁被布合羽を作らんとせば第八十八圖の如くするのである。

袖の笹標付は、羽織の袖笹標付と異なる所はない。
身頃 身頃としても、袖同様に羽織笹標付と異なる所もない故、茲には略す事とする。

小衿 小衿は初め用布を中表に、縦に二つに折り、之を横に又二つに折り、其の輪を左とし、輪より右へ六寸の所へチヨト笹標付して、之を小衿の丈として、次に圖の如く手前の所に三分として引笹標を付け、次に左の輪の所の引笹標より向ふへ五分の縫代の笹標を定め、其の縫代の笹標より向ふへ小衿幅（假りに三寸八分と定む）を圖の如く三寸八分として、笹標付をし其の小衿幅の三寸八分を標準として小衿幅の丸みを定めるのである。其の定め方は前に小衿丈として標をした右の笹標付より左へ三寸八分の所に笹標をつけ、之を起點として第九十二圖の如くに三寸八分として、圓の四分の一を標つけ、次に第二の如く笹標をつけ、其笹標より外へ縫代を見て第三の如く裁ち落し左の輪の所の上と下に圖の如く山笹標をつけ、之を開けば第四の如き小衿の

容を得るのである。

圖二十九第



第三十四節 被布縫方の順序方法

縫方の順序としては、初めに袖を造り、次に胴はぎをなし、脊を縫ひ、兩襟をつけ、堅襟を造りてつけ、その次に小衿を造りて付けるのである。縫方としては、袖は羽織と同様に造り、次に身頃は裏と表とを合せて裾のツナギを笠標の通り縫ひ、(胴はぎ) 其縫目を一分位の通りに裏の方に倒し、次に脊を縫ふて次に前裙下りを縫ひ、其縫目を裏の方に倒し、次に表との布裏を正しく合せて上の方を縫ひ、引き返して假綴を付け、次に身頃の前後を合せ、脇縫の所へ襠を入れ、左右の兩後を四つ縫にし、次に前身も同様裏表地の間に襠を狭んで四縫とし、次に立衿も裏地と合せ下りを縫ひ、前身と立衿の笠標を合せて四つ縫とし、次に兩袖を縫ひ付け、次にぎに左右の身人形と袖の人形とを拵け、次いで小衿の拵へを済まし、次に身頃の脊筋と小衿とを合せて裏地の衿肩の所に綴ら付けたらば、身頃の衿裏

を前へ向けて堅衿を裾の方より上に、即ち小衿の端まで拵け次ぎには衿肩を傳ふて一方の衿に、此所も前同様堅衿を付け裾へ縫ひ下げ、更に兩堅衿の端より五分位の所に裾の方より隠し綴をつけ、次いで袖口と人形より身人形へかけて隠し綴をなし、之で出来上るのである。

第六章 袴

第一節 女物袴の笠標付標準寸法

五歳	七歳	十歳前後
蹴廻幅	六寸	蹴廻幅
前腰幅	六寸五分	前腰幅
		後腰幅
		相引
		後腰幅
		蹴廻幅

五寸五分
三分の二
六寸五分
七寸

袴

一一一

前	蹴廻	十三四歳	後	相	蹴廻	十歳	前	相	前	蹴廻	七歳	前	紐
幅	幅	丈	引	幅	丈	乘	幅	幅	幅	幅	丈	丈	丈
七寸	七寸	一尺五寸	三分の二	六寸五分	六尺五寸	二寸減	六寸	六寸	六寸	六寸	六尺内外	六尺内外	六尺内外
相	腰板	前	相	腰板	後	相	腰板	後	相	腰板	後	相	腰板
引	幅	丈	乘	幅	丈	引	幅	丈	引	幅	丈	引	幅
三分の二	六寸、整二寸一分	七尺	二寸減	五寸五分、整一寸九分	一尺三寸五分	三分の二	五寸、整一寸七分	三分の二	四寸五分、整一寸五分	三分の二	一尺二寸	三分の二	八寸

第二節 男物袴の筧標付標準寸法

相乗 二寸五分減
前紐丈 七尺五寸

後紐丈 一尺六寸五分

本裁 躑躅幅 八寸三分より八寸五分

腰板幅 六寸五分、豎二寸三分

前腰幅 八寸

相板乘 二寸五分減

前紐引丈 三分の二

後紐丈 一尺八寸

前紐丈 八尺

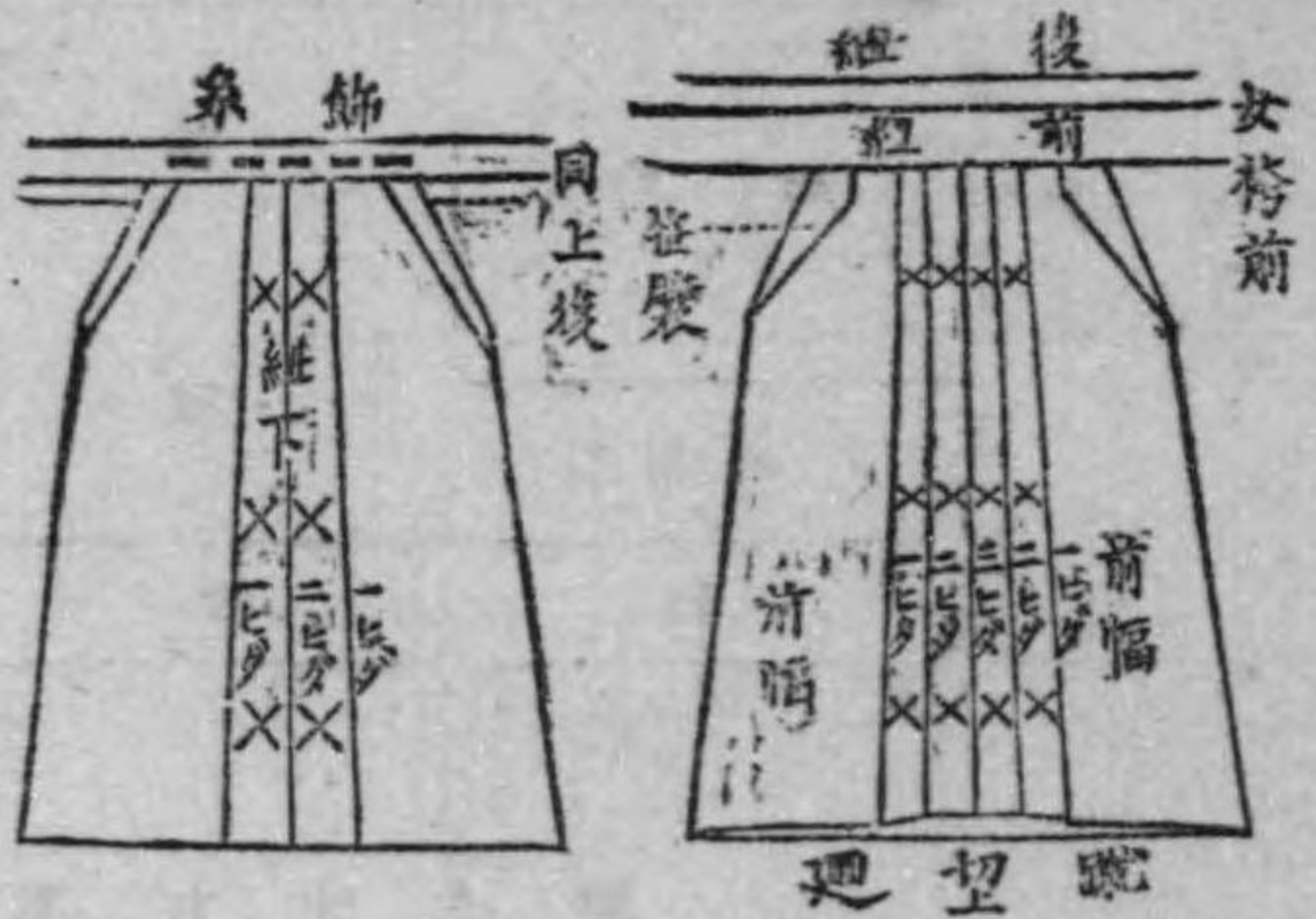
第三節 男女袴の各部名稱 (第九十三圖及び第九十四圖参照)

第四節 女物袴の裁方

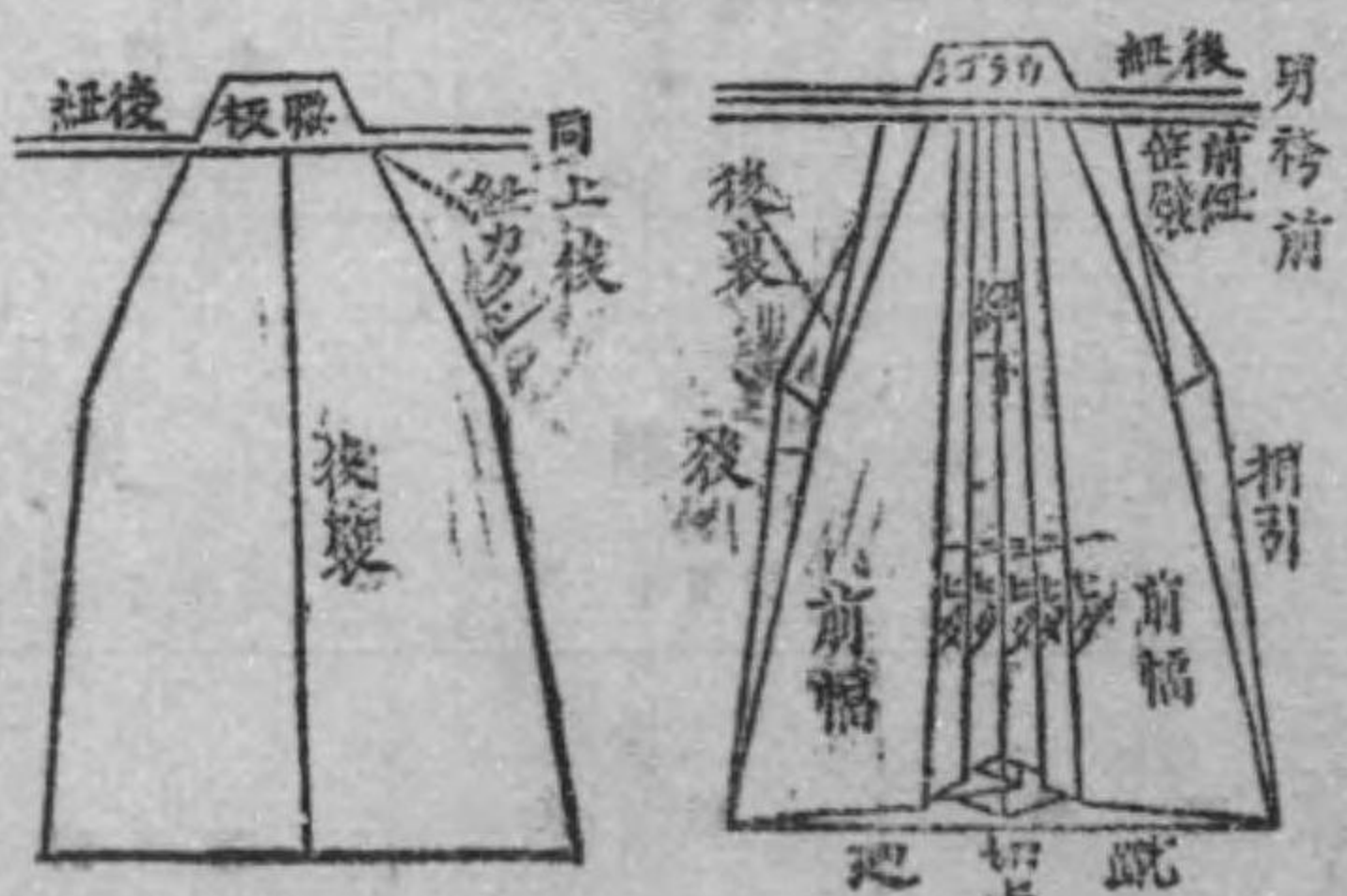
一、四五歳の女子用袴

大幅(二尺)長さ六尺の用布にて、四五歳の女子用袴を作らんとせば第九十五圖の如くするのである。

第三十九圖 女子袴各部名稱



第四十九圖 男子袴各部名稱

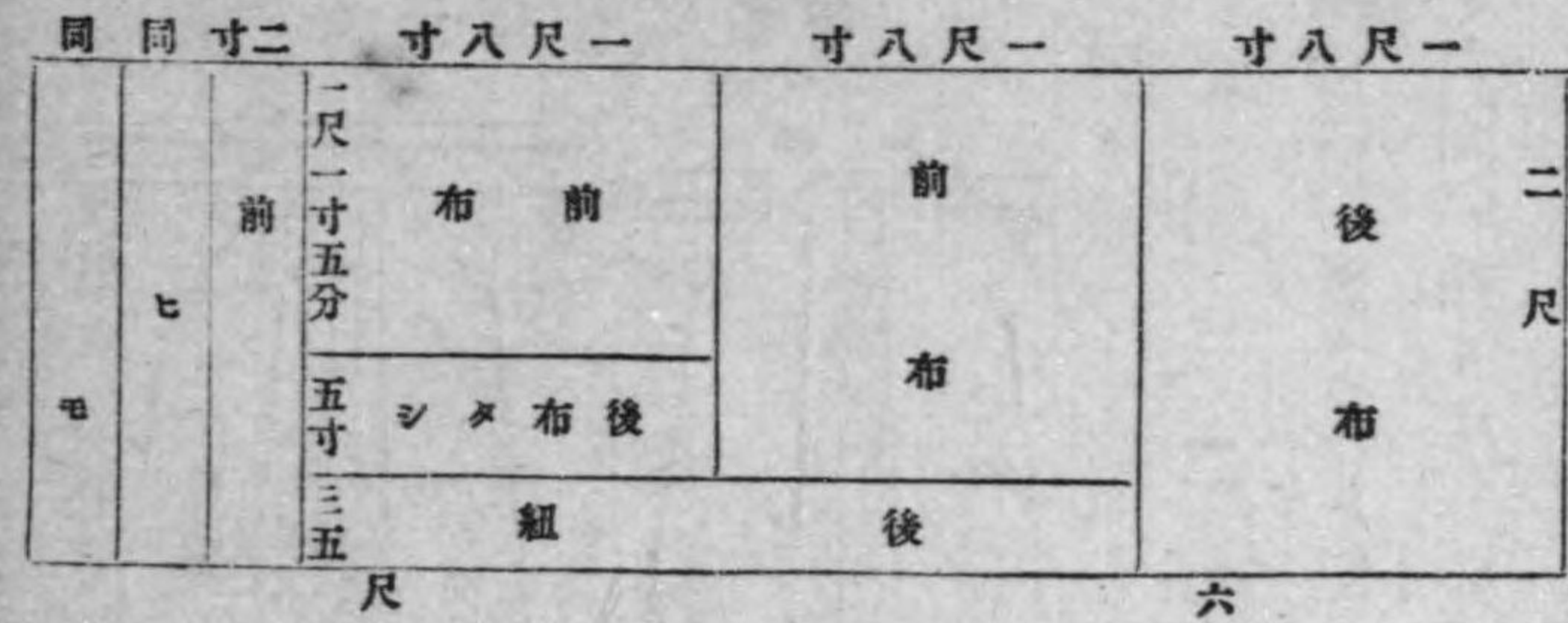


二、七八歳の女子用袴

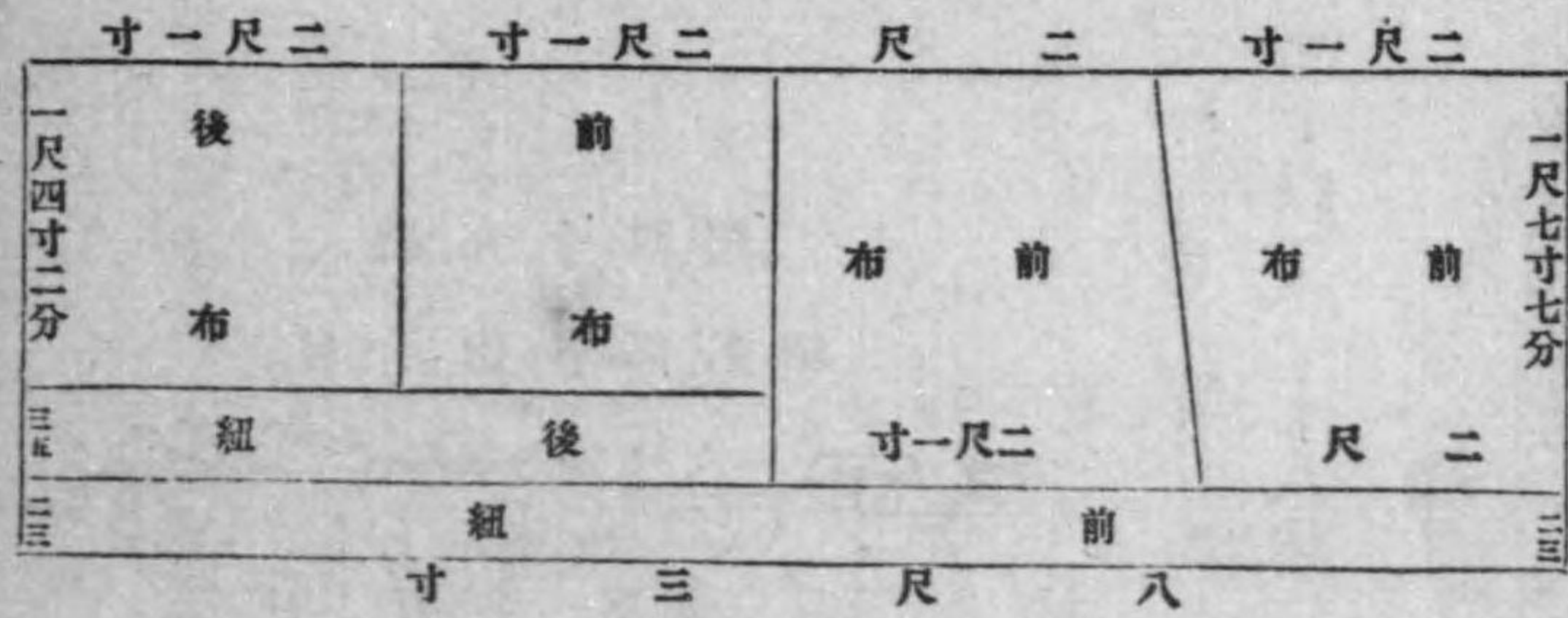
大幅(二尺)長さ八尺三寸の用布を以て、七八歳の女子用袴を作らんとせば第九十六圖の如くするのである。

三、十二三歳の女子用袴

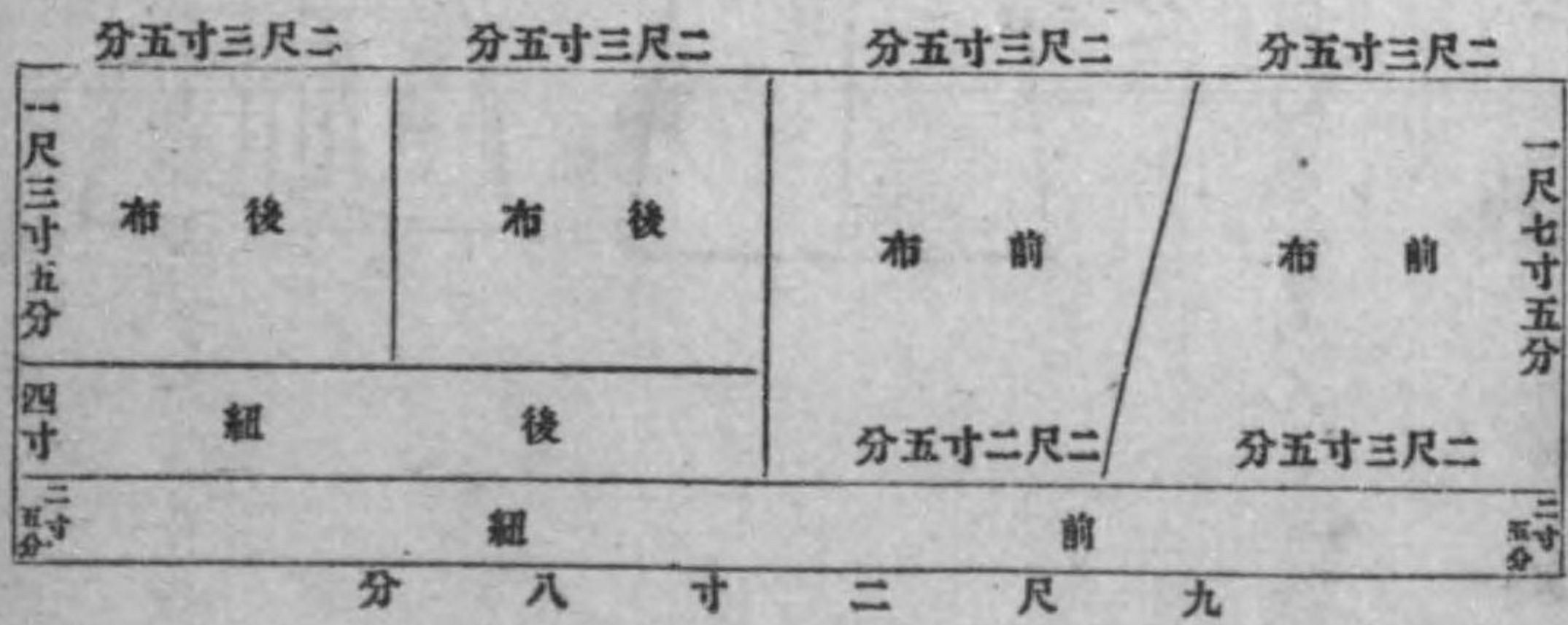
圖五十九第



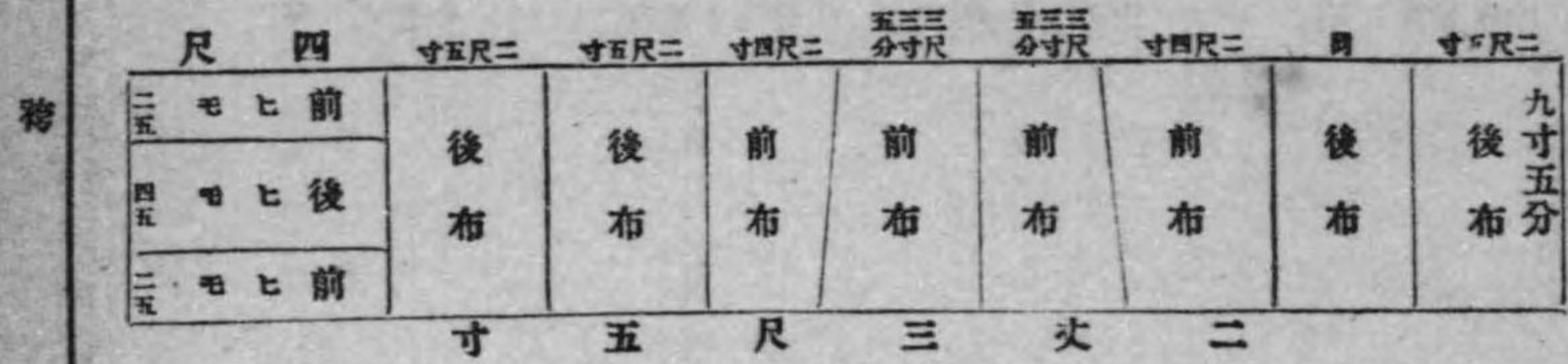
圖六十九第



圖七十九第



圖八十九第



大幅(二尺)長さ九尺二寸八分の用布を以て、十二三歳用の女子袴を作らんとせば第九十七圖の如くするのである。

四、本裁女袴 (並幅物)

並幅(九寸五分)長さ二丈三尺五寸の用布を以て、本裁女物袴を作らんとせば、第九十八圖の如くするのである。

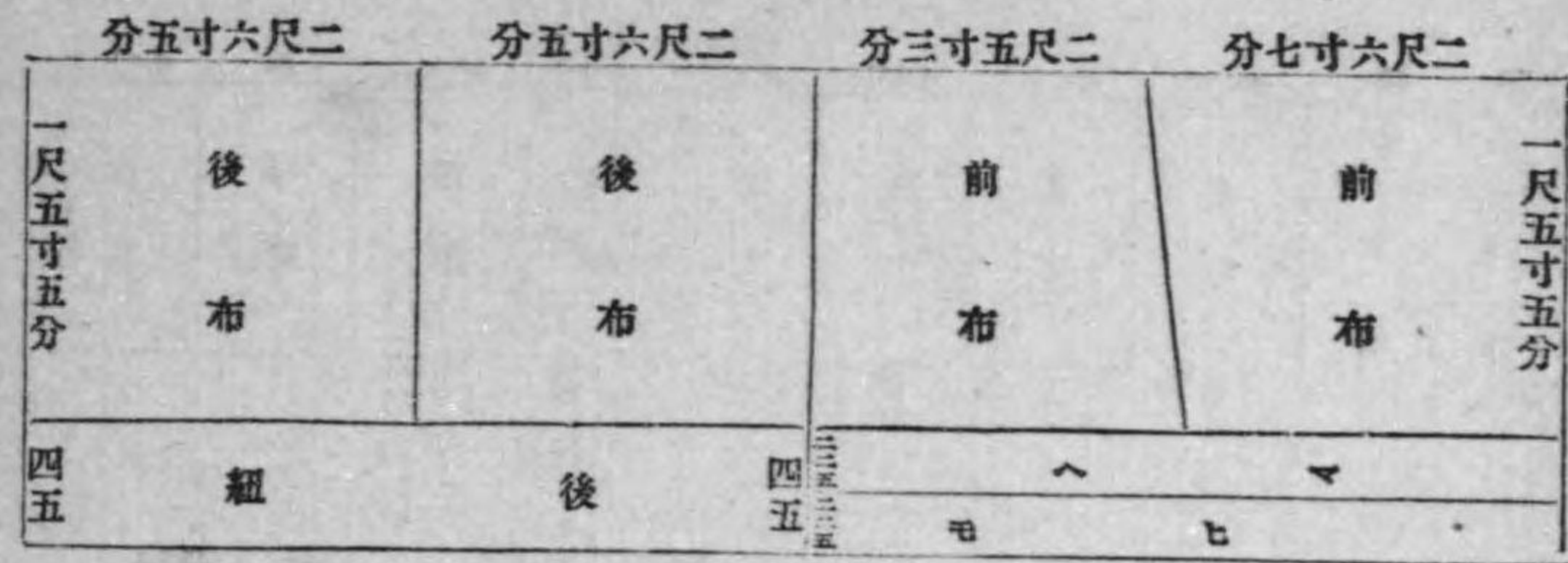
五、本裁女袴 (大幅物)

大幅(二尺)長さ一丈五寸の用布を以て、本裁女袴を作らんとするには、第九十九圖に示す如くするのである。

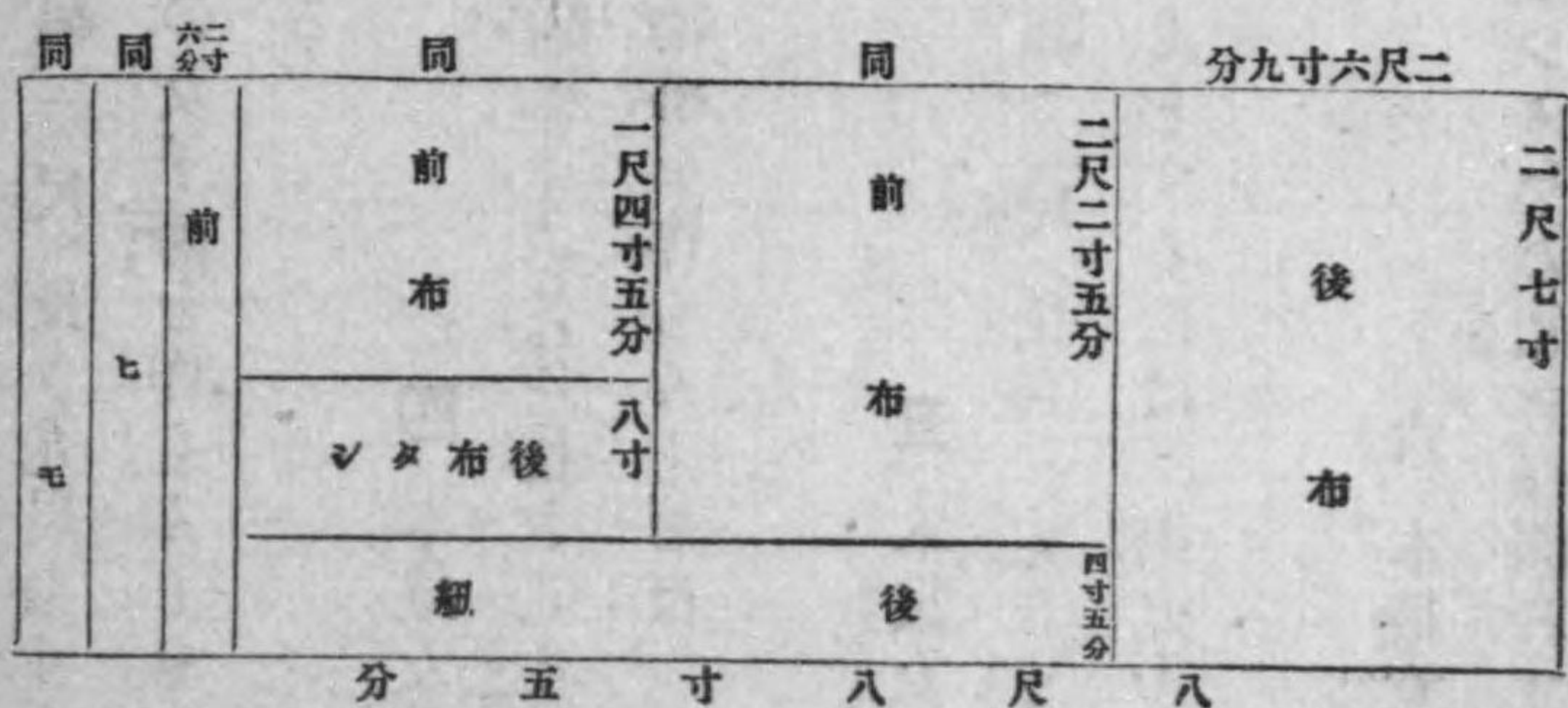
六、本裁女袴 (羅紗幅物)

カシメヤの如き材料にて、幅二尺七寸もあるもので

圖九十九第



圖百第



本裁女袴を作る場合は、第百圖の如くにするのである、之は用布の長さ八尺八寸五分のときに於ける裁方である。

第五節 女子袴の

籠標付方法

子供物も本裁も布に大小の差こそあれ、其の法は同一である。依つて茲には假に本裁の籠標付として記述することゝす

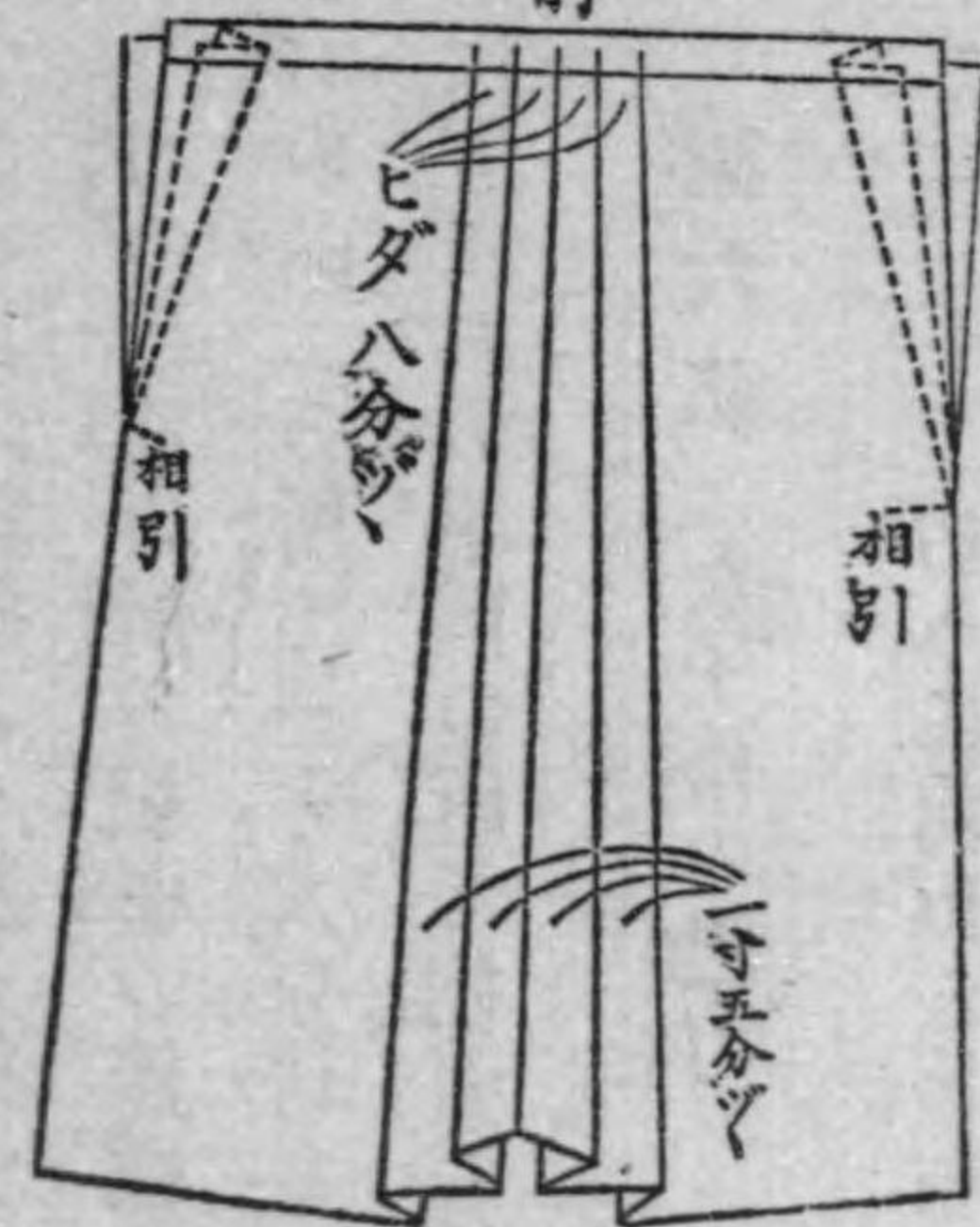
先づ初めに後布二枚を中表に重ね、其の布の右の手前の端より向ふへ後幅寸法に別襲積折込寸法の二寸を加へたる尺數を、後幅即ち蹴廻しの籠標として標をつけ、其の籠標より向ふで五分切り下げ、それより五分五分と裾拵即ち石付の標をつけ、其の籠標より左へ後丈を定め、又其所で同じ寸法に幅を定め、夫れより右の手前の所で相引の籠標をつけ、次ぎには前布を二枚之も中表に重ね、右の向ふの所で一寸六分切り下げて、更に五分五分と裾の拵代の標をつけ、次ぎに右の手前の所で相引の籠標をつけるのである。

第六節 女子袴の縫方

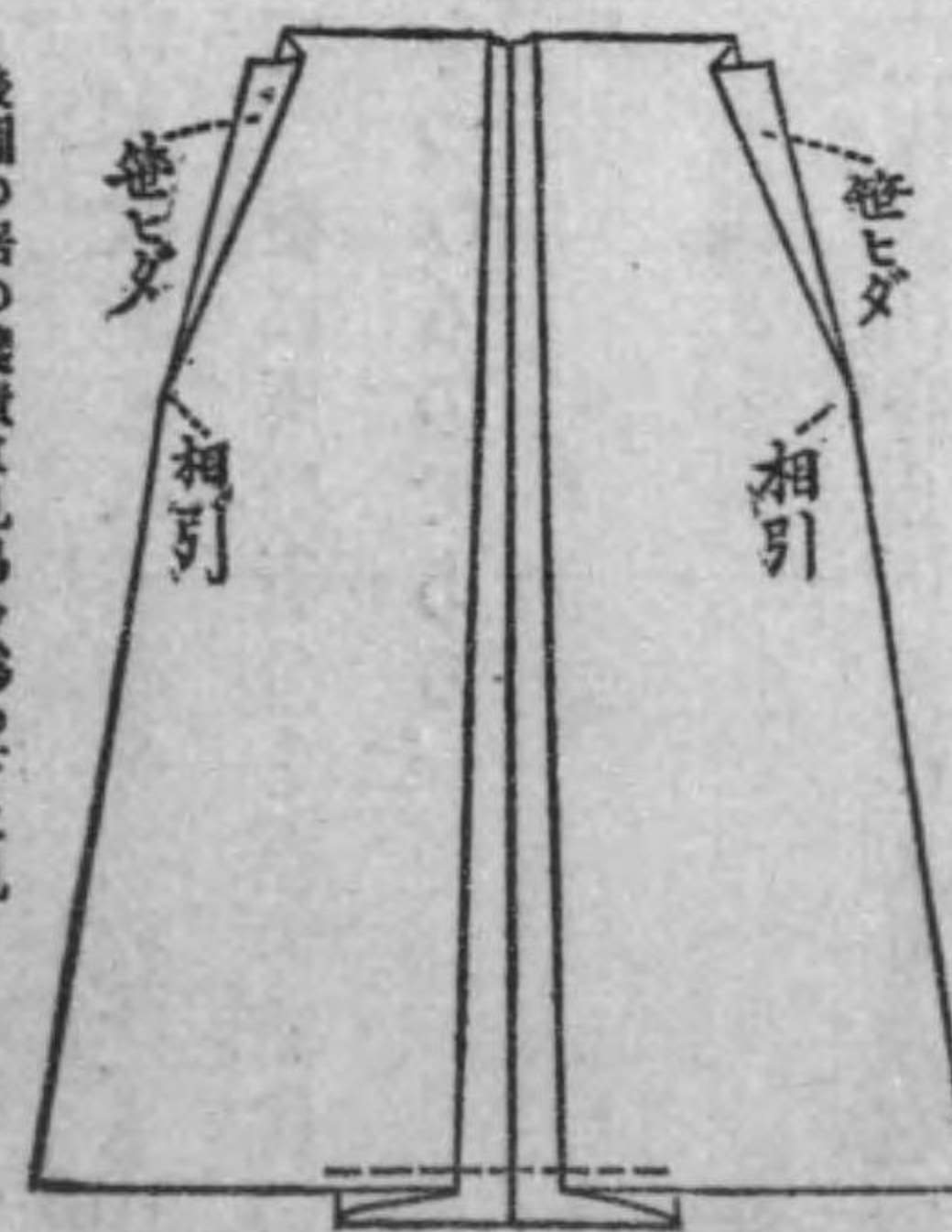
縫方としては、先づ初めに前布と後布とを二枚縫ひ合せ、夫れより左右の相引を縫ひ合せ、次ぎに前後の折り襲積の籠標をつけ、其の籠標より折り標をつけ、次ぎに正しく襲積を疊み、而して之を假とちをし、夫れより前後の笹襲積（相引の上を笹の葉のやうに表へ折り返し、更に二つに折りて縫ふ）

を容よく造りて拵け、次ぎには後紐を拵け其の中間に腰板紙を入れ、其の上
に飾り糸を縫ひ付けたるをつけ、次ぎには前紐を拵けてつけ、飾りとちをし
て仕上げるのである。(第百一圖参照)

第百一圖 女袴付前圖



後



後圖の裾の襷は見易き爲め下に
せしが點線通りの處になるのである

第七節 男子用袴の裁方

一、四五歳の男子用袴

袴地九尺五寸の用布を以て、四五歳の男子用袴を作
らんとせば第百二圖の如くするのである、圖に黒き部
分あるは裁ち落しのきれである。

二、七歳前後の男子用袴

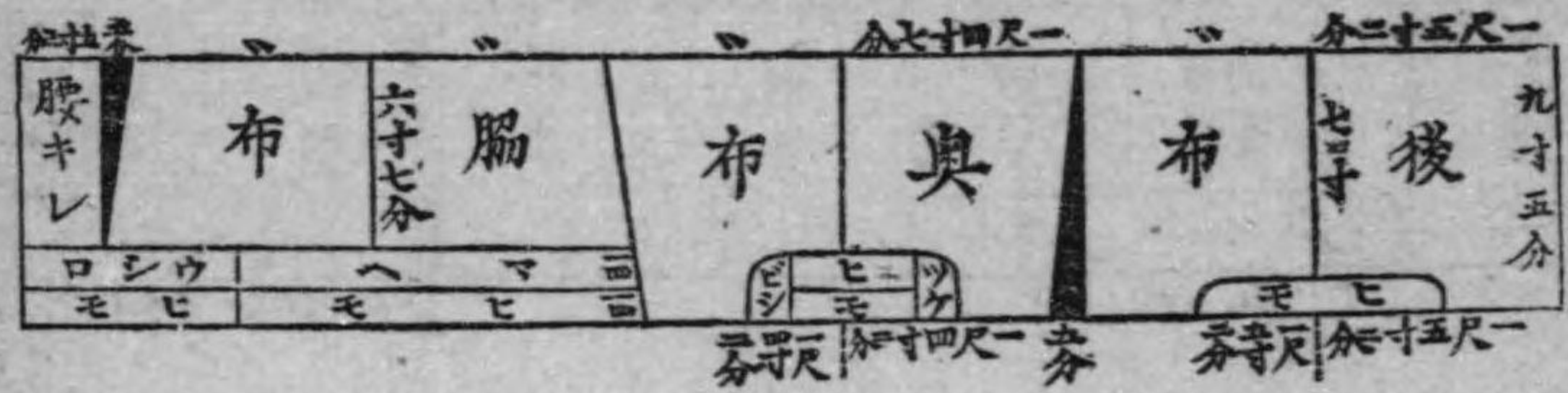
袴地一丈二尺の用布を以て、七歳前後の男子用袴を
裁断せんとせば、次ぎの第百三圖の如くするのである。
圖に黒き部分あるは裁ち落しの布である。
以下同じ。

三、十二歳前後の男子用袴

袴地一丈五尺二寸の用布を以て、十二歳前後の男子
用袴を作らんとせば、次ぎの第百四圖の如くする
のである。

四、十五歳前後の男子用袴

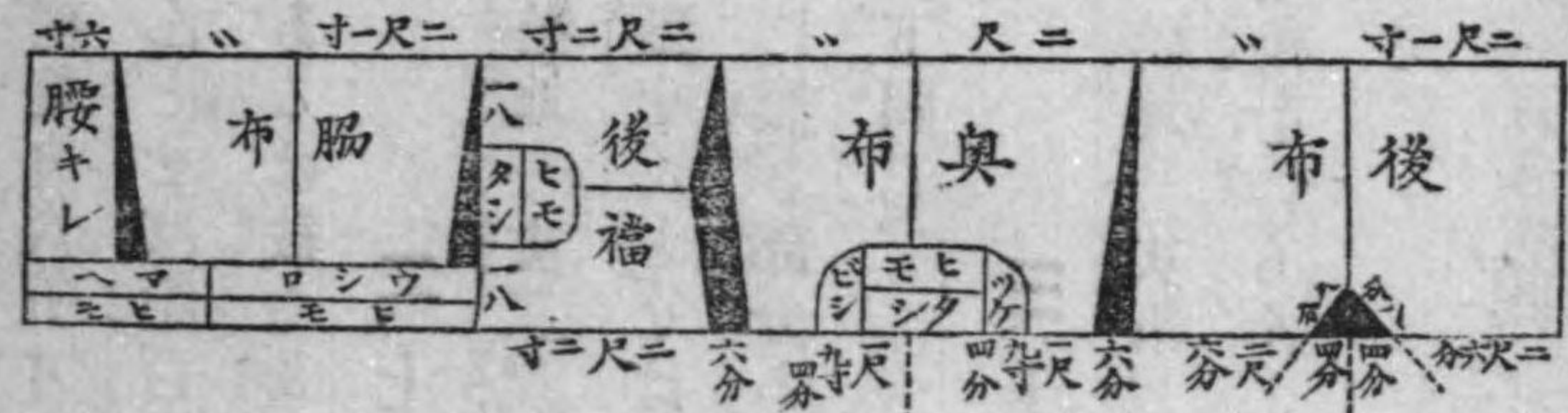
第百二圖



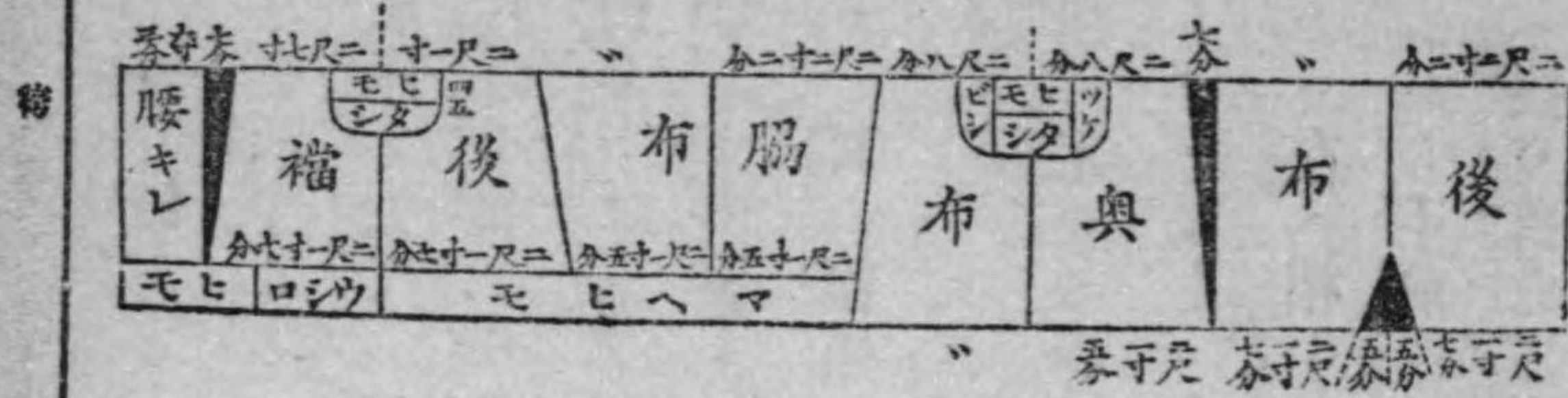
圖三百第



圖四百第



圖五百第



圖六百第



圖七百第



袴地一丈八尺の用布を以て、十
五歳前後の男子用袴を作らんとば
次の第百五圖の如くするのであ
る。

五、本裁袴 (襠高袴八布裁)

袴地二丈四尺五寸の用布を以
て、紐下二尺一二寸上りの襠高袴
を作らんとする場合は、次の第百
六圖の如くするのである。

六、本裁袴 (襠高袴十布裁)

袴地二丈六尺の用布を以て、本
裁襠高袴を紐下二尺二寸上りに作
らんとする場合は、次の第百七圖

の如くするのであ
る。

第八節 男袴の

筧標付方法

現今用ひて居る
袴は、襠高袴であ
る。(馬乗袴或ひは十番
袴とも云ふ) 舊幕時
代には平袴と云ふ
て、襠の低いもの
が多く用ひられた
ものである。

襠高袴の裁方としては、八布裁、十布裁等あるが茲には本裁八布裁の篋標付方法を示すこととする。

其順序として、初めに後布二枚を中表に重ね、其の輪を右として置き、次に右の手前より向ふへ蹴廻し、(後幅)八寸三分と定め、それより向ふの所で三分切り下げ、而して裾全體に五分の縮代の篋標をつけ、其の篋標より左へ後丈(紐下の寸法に容りの一寸六分を加へたるもの)を定め其所で裾と同様の寸法に後幅を定め、其の篋標より手前へ腰板の幅の二分の一だけの寸法にして腰幅の篋標付をなし、次に相引の篋標として右の手前の所より左へ後丈の三分の二の寸法に定めるのである。後裾は二枚を中表に重ね、其の右向ふで一吋三分切り下げをなし、次に五分の裾縮代の篋標をつけ、其の石付の篋標の向ふの所より左へ相引の寸法より二寸減たる寸法で相乗の篋標をつけ、次に左の向ふから手前へ半幅だけ間を置いてチヨト標をつけ、其の標から向ふの相乗へと袂り落して相乗とするのである。

脇布は之も二枚を中表に重ね、右向ふで八分切り下げ、それより五分の裾縮代の篋標をつけ、右の手前の所で相引を後布と同じ寸法に定め、之で脇布の篋標が済むのである。奥布之も二枚を中表に重ね、右向ふで八分切り下げをなし、五分の裾縮代をつけ、次いで前裾は半幅の布を二枚重ね、而して右の布端で五分の裾縮代の標をつけ、其の篋標より左方へ後裾と同じ寸法に相乗を定め、其の残りたる所を楯形に袂り取るのである。

第九節 男袴の縫方

男袴の縫方順序としては、先づ後布脇布の投を拵け(投とは女袴の項に併置積と記せし處)次に後奥布を縫ふて縫目を奥布の方へ返し、次に奥布と前裾とを縫合せ、縫目は前裾の方へ返し、夫れより前裾と後裾と合せて縫ひ、縫目は又も前裾の方に返して隠し、躰をして次に裾口を五分の折り代で三つ折に縫ひ、夫れより相乗りを後の方より袋縫にし、(絹物であれば相乗へ真綿をまき付

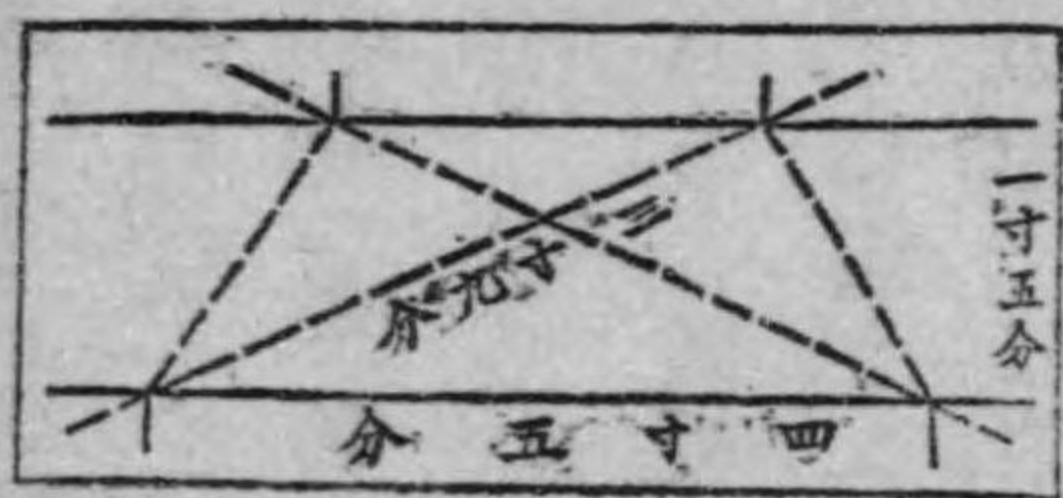
ける。夫れより前後の兩脇の布を裾より縫ひあげ、相引の處で糸を止め、其の止めを蛇腹かゝりにし、次に裾を拵け、襷積の折りくせを付けて襷積を疊むのである。此襷積は後の方より取り、次に前身を取り軽く火尉斗をかけるのであるが、初心の人として記憶すべき事は、後襷積を疊む時には、其の初めに上を左にして、左の手を相乗の下に入れて疊み始むる事、又前の襷積を疊む時は、始めに上を右にして右の手を相乗の下に入れて疊み始むる事である。襷積疊の次に前紐をつけ次に後布に腰板を付けて出來上るのである。

第十節 袴腰板の造り方

腰板の採り方 此腰板の採り方は、交叉式に尺度を使用すれば、正確に採れるのである。其方法は下の如くである。假りに五歳袴の腰板であるならば、其幅は四寸五分で縦は其の三分の一の一寸五分となる。然して交叉すべき尺

数は其の幅の四寸五分より六分(是は法則)を減きて得たる數、即ち三寸九分を斜めに左右より交叉して第百八圖の如き正確なるものを得るのである。然して此縦を幅の三分の一とする事と、幅より六分(法則)を減じて交叉寸法とすることは、袴の大小を問はず一定せる方法であるが、其の腰板の高さの高き方が上品である故、一般に三分の一に少し加へて採るのである。左に其の寸法を示すこととする。

圖八百第
圖方採板腰袴歲五



腰板の寸法 腰板の寸法は、其の年齢に順じて左の如くに定められて居る。

- 一、五歳袴の腰板は幅が四寸五分、縦が一寸五分、交叉尺は三寸九分である。
- 一、七歳前後の腰板は幅が五寸、縦が一寸七分、交叉尺が四寸四分である。

- 一、十一二歳の腰板は幅が五寸五分、縦が一寸九分、交叉尺が四寸九分である。
- 一、十四五歳の腰板は幅が六寸、縦が二寸一分、交叉尺が五寸四分である。
- 一、木裁襠高袴の腰板は、腰幅が六寸五分、縦が二寸三分、交叉尺が五寸九分である。

腰板の造り方、腰板の採り方によりて其の型を得たならば、之を第百九圖の第一の如くに腰きれ用布の上に正しく乗せ、次に第二の如くに張り付け、更に第三の如くに附菱の布を張り、次ぎには第四の如くに後紐を縫ひつけ、第五は其の表を示せる所である。次ぎに第六の如く後紐の縫ひ目を付菱にてかくして出来上るのである。

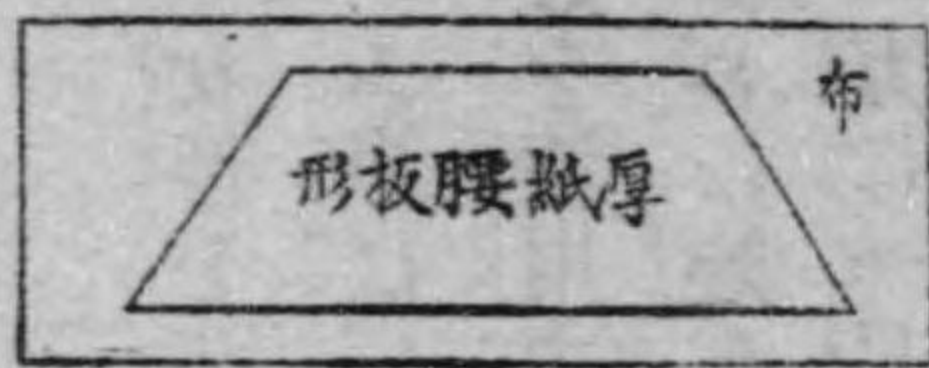
第十一節 男女袴要所の寸法

袴の筥標付には、一定則がある、茲に其の二三を示すこととする。
紐下寸法 紐下の寸法を知らんとせば、其の長着の寸法に六を乗けた數

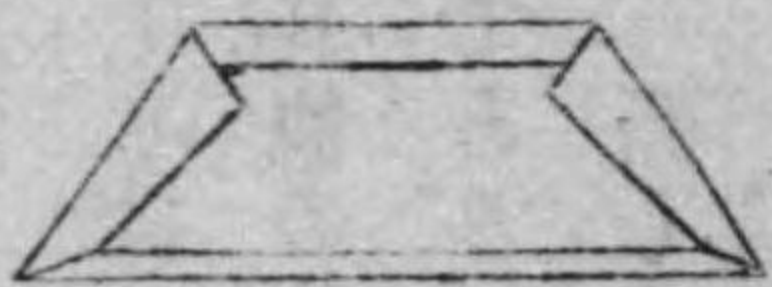
が紐下の寸法となる。

第百九圖

(表) 一第



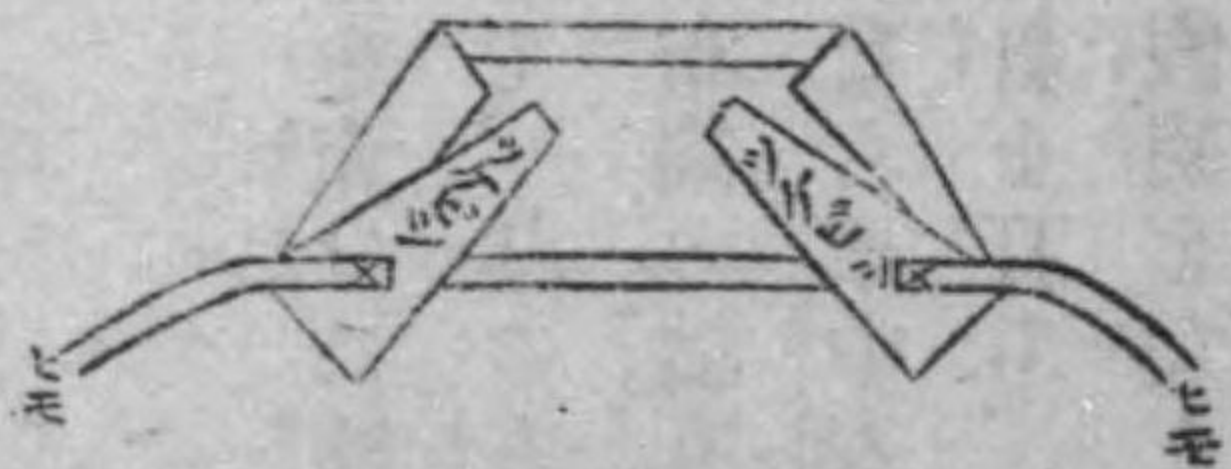
(表) 二第



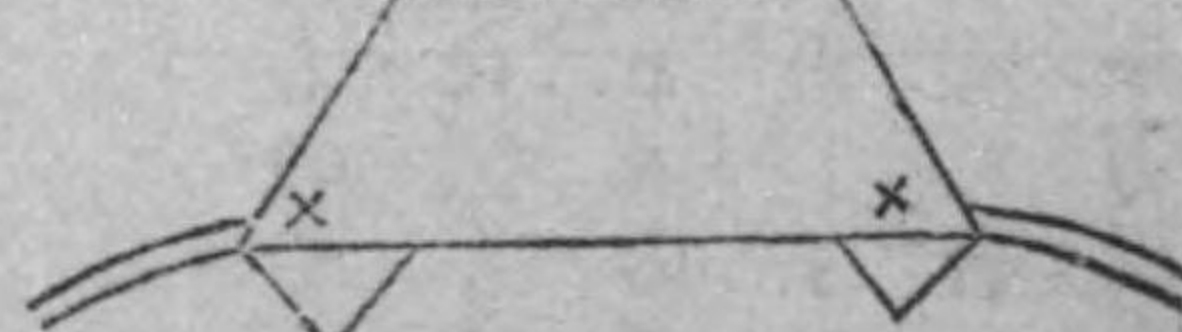
(表) 三第



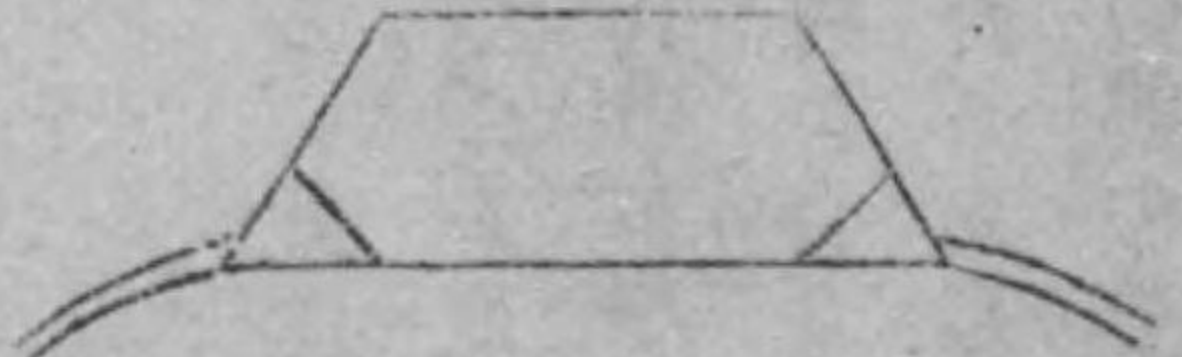
(表) 四第



(表) 五第



(表) 六第



後丈寸法 後丈の寸法を知る方法は、紐下の寸法に容りと紐幅寸法とを加へて得た數が、後丈の寸法である。
相引寸法 相引の寸法を知る方法は、後丈の三分の二、即ち後丈を三で除り、それに二を掛けて得た數が相引の寸法である。

相乗寸法 相乗の寸法を知る方法は、大小の袴を問はず其の相引の寸法より二寸を減き得た数が相乗の寸法である。

第七章 男女帯の造り方

第一節 腹合女帯の造り方

腹合せ女帯を造らんとせば、先づ第一に布を充分に練へるのである、此練へるといふ事は、布端其他の伸縮を直すことで、其の方法は「アイロン」か或ひは烙鏝を使用するのである。然し甚だしく布端の縮り居るものは其の布端を浅く斜めに鉄を入れ、而して伸縮を直したならば中表に正しく二枚を合せ、其の丈の方に一尺位づゝの間置きに真中に待針を打ち、次ぎに合せたる布端の方にも處々に待針を打ち而して其の周圍に假綴をなし、一方は丈の真中を一尺程明け置いて（茲は帯真を挿入する所）縫ひたる後、帯丈を定めて篋標をなし

たらば、左右の帯先を造り、（此帯先を完全に造るには其の地質に應じて適度の厚紙を二寸幅位に入れ之を一針ぬきに返し針にするのである）次ぎには、兩側より平鏝をかけ、次ぎに地質の厚き方へ折を返すのであるが、此折り代は平も先きもなるべく深き方が可い、取り分左右の帯先は三分強の折り代とする様に心掛くべきである。四角の所は横を先に折りて幅を縫ひたる系の所へ綴つけ、次ぎに縦を折りて横の縫込に綴つけ、次ぎには真の幅を帯皮の幅より一分狭くして二枚共に切り（帯皮の一方は強き地質で、一方は柔き地質の場合、其の帯の幅と同じ幅の寸法にする、又帯皮の地質厚くして、二枚真を入れる場合は、一枚は帯より一分狭くして裁ち、一枚は兩側共縫代折込丈に狭くして裁つのである）而して真の長さは、少なくとも五寸餘を長くしてとり、此真の一方へ真綿を引き、之を帯皮を平に正しく置きたる上に乗せ、次ぎに此真を綴付るのであるが、帯真は出来得る限り多く弛め込む様にするのを可いとする。大體から云へば五寸毎に指一本位の弛み工合にして綴付、次ぎに其の上にも真綿を引ききたる後、一尺縫ひ残したる處より、手を入れて

引返して表を出し、双方の縫目に五厘の着せをかけ、次ぎには左右の帯先に
 鋸の躰をするのである。此鋸の躰の方法は、始め右左の角で二分角か或は二
 分五厘角として、其の間を十二針の鋸の躰にして、飾りの躰とし、平の方
 は總て女針、男針の假り躰にするのである。出来上りたる帯は、仕上として
 「アイロン」か或ひは火熨斗をかけ、之を八つ折にして菱、若しくは三階菱と
 して飾り綴をするのである。

第二節 男帯の造り方

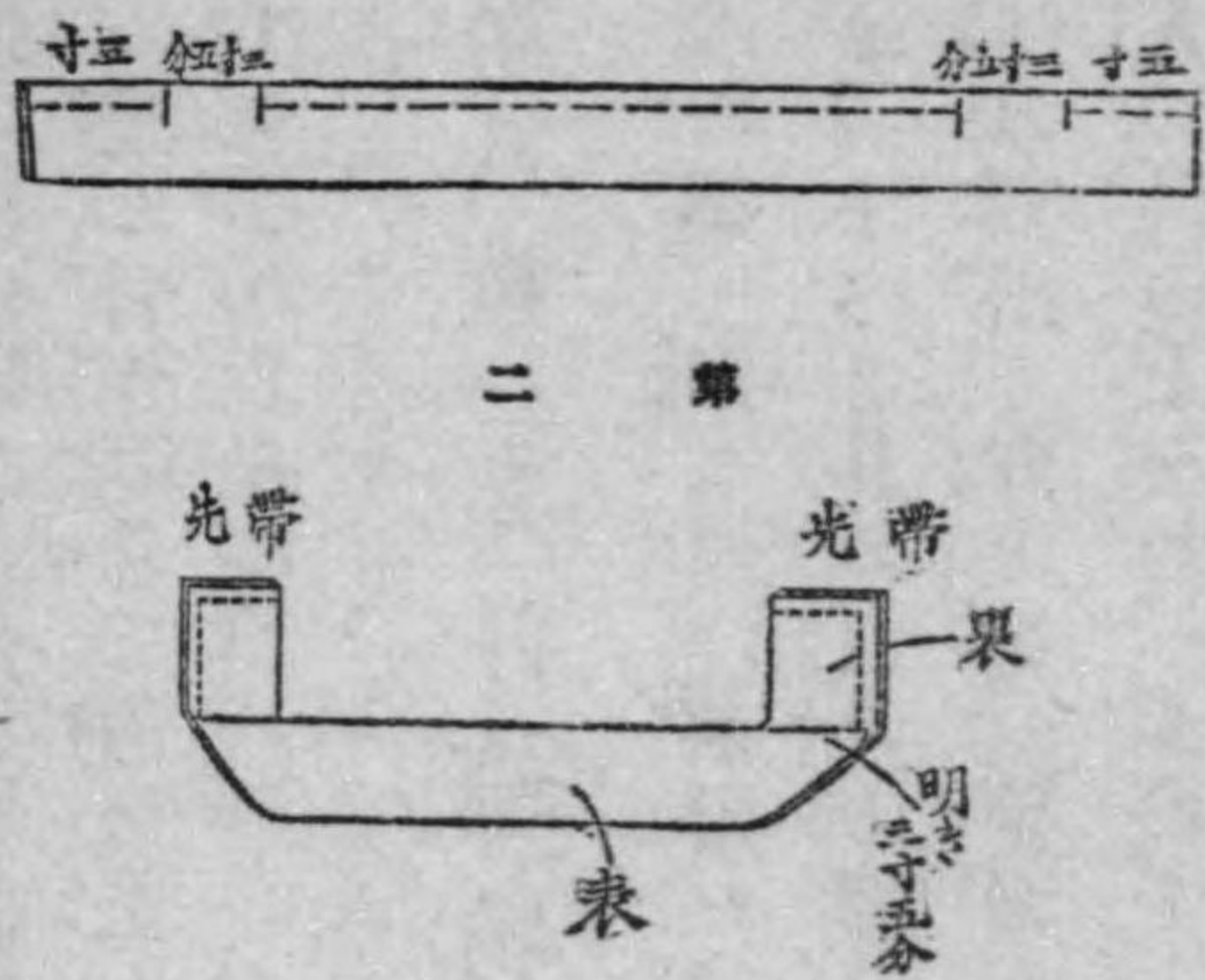
新仕立 此の男帯新仕立の方法は、始めに其の布を充分に練へる事は女帯
 と同様である。其の方法は、布裏から「アイロン」か或ひは火熨斗をかけて布
 の伸縮を直し、左右の布端の所は中よりも伸る位にするのであるが、若し火
 熨斗等で布端のよく伸ぬ様な場合は烙鏝をあて、伸すのである。其の當方は
 一方は縮臺にかけ、一方は左の手にて引き、而して烙鏝をあて、左右の布

端の伸方を同様にしたらば、幅を二つに折り、次ぎには丈五寸位づゝ間置に
 幅の筥標をつけ、布を弛まぬ様にして、左右の端に折り標しをつけ、其所を
 烙鏝でよく折りをつけたる後、眞を拵るのである。此帯眞は帯幅の眞中の厚
 さと、布端を折つた所の厚さとが同様になる様に加減して造るのである。帯
 眞が出来たらば其の片面へ眞綿を薄く引き、次ぎには帯皮を平に正しく置き、
 其の上に帯眞の眞綿の引きある方を下にして乗せ、よく釣合を見て待針を打
 ち、帯地と同じ色の縫糸二つに割るか、又は同色の羽二重糸で帯幅の筥標
 より一寸位入りたる所へ表に其の糸の現れぬ様に綴ちつけ、此綴付方は女帯
 の眞の様に指一本位の弛み工合にするのである。(帯眞を帯皮に綴ちつくる時は、其の
 帯地の一方が無地で他方が縞物か獨結入なぞの時、縞か獨結のある方に帯眞を綴
 付するのである。斯様にするのは綴付の糸が少し位表に出ても割合に目立ぬからである) 帯眞の綴付が終りた
 らば、次ぎは両端を幅筥標の處まで、布目を眞中に通して半返しに縫ひ、兩
 方から平鏝をあてたる後、引返して表を出し、(此引き返す以前に幅二分位丈の縫込の

所を斜に切り取り、また一方の折れる方も縫込を斜に切り取り置くのである。次ぎに角を正確にして、次ぎに布幅の振れぬやうに丈五寸位づゝの間置きに待針を打ち、縮けるのであるが、此縮ける針目は極細かに而して針目を斜に出さぬ様に正しく平に縮けるのである。地質の厚いものは、一針抜にして、布の弛まぬ様に引き張るやうにして縮け、二針、三針縮けたらば、向ふと手前の方とを針でこき、又縮け目も針にてこき、縮け目を正しくしながら、順次縮け行くのである。指で縮目をこくときは、地質を汚す事があるから、必ず針でこく様にするのである。出来上りたらば之を糸で假に綴て、壓をして後、厚紙等にて二ヶ所を巻き封じて仕上るのである。

縫ひ仕立 此の縫ひ仕立も前と同様に、充分に布を練へたらば中表にして幅を二つに折り、又丈を二つに折り、幅の輪を手前に丈の輪を左に正しく置き、其の布の右の端より左へ五寸の所へ（布端の所）チヨト篋標をつけ、其の篋標から左へ又三寸五分の篋標（引返し明き）をつけたらば、丈を左へ開きて篋

第百十圖
仕立帯造圖



標付した左右の五寸を返し針にして縫ひ、平は並縫にして（第百十圖第一の如く）次ぎに折代は出来得るだけ深く篋標をして、充分に折目を正しく折り、次ぎに帯眞を帯皮の折目の方に着く方は帯幅より五分位狭くして、又一方の折り返しの無い方に着く眞は、帯幅と同じ寸法にして狭き方に眞綿を引き、次ぎ

に帯地の折りのある方を上にして正しく置き、其の上に眞綿の引きある方に乗せ、丈五寸毎に指一本位の弛み工合にして折代へ綴つけ、其の上に薄く眞綿を引きたらば、之を引き返して表を出して正しくなし、次ぎに左右の帯先きを眞と共に裁ち落して次ぎは左右の帯先を三寸五分の明きの所より引出し（第百十圖第二の如く）

其の帯先を返し針に縫ひ、折代を三四分として折り、之を眞に綴ついたらば、明きより原の様に引き返して角を正しくして、次ぎに明きの三寸五分の所を縮け、仕上げするのである。

第八章 和洋端物

此の和洋端物類、即ち西洋前掛、寝冷しらず、シャツ、ツボン下、股引、半股引の類は、すべて其の人々の體格に適應するやうに裁斷すべきものである。其の寸法の割出し方の第一要素としては、半胸度を知ることである、其の方法は當人の乳の上を背へかけて一廻り紐などにてはかり、それが二尺あるとすれば、其の二尺は全胸度であるから、其の半數の一尺は即ち半胸度である。又全胸度が一尺二寸とすれば、半胸度は六寸である。總て此方法によりて半胸度を見出し、此半胸度を原として、之を其の各項裁方圖にある標準寸法に由て、各要所の寸法を比例の算式により知るのである。假りに標準寸

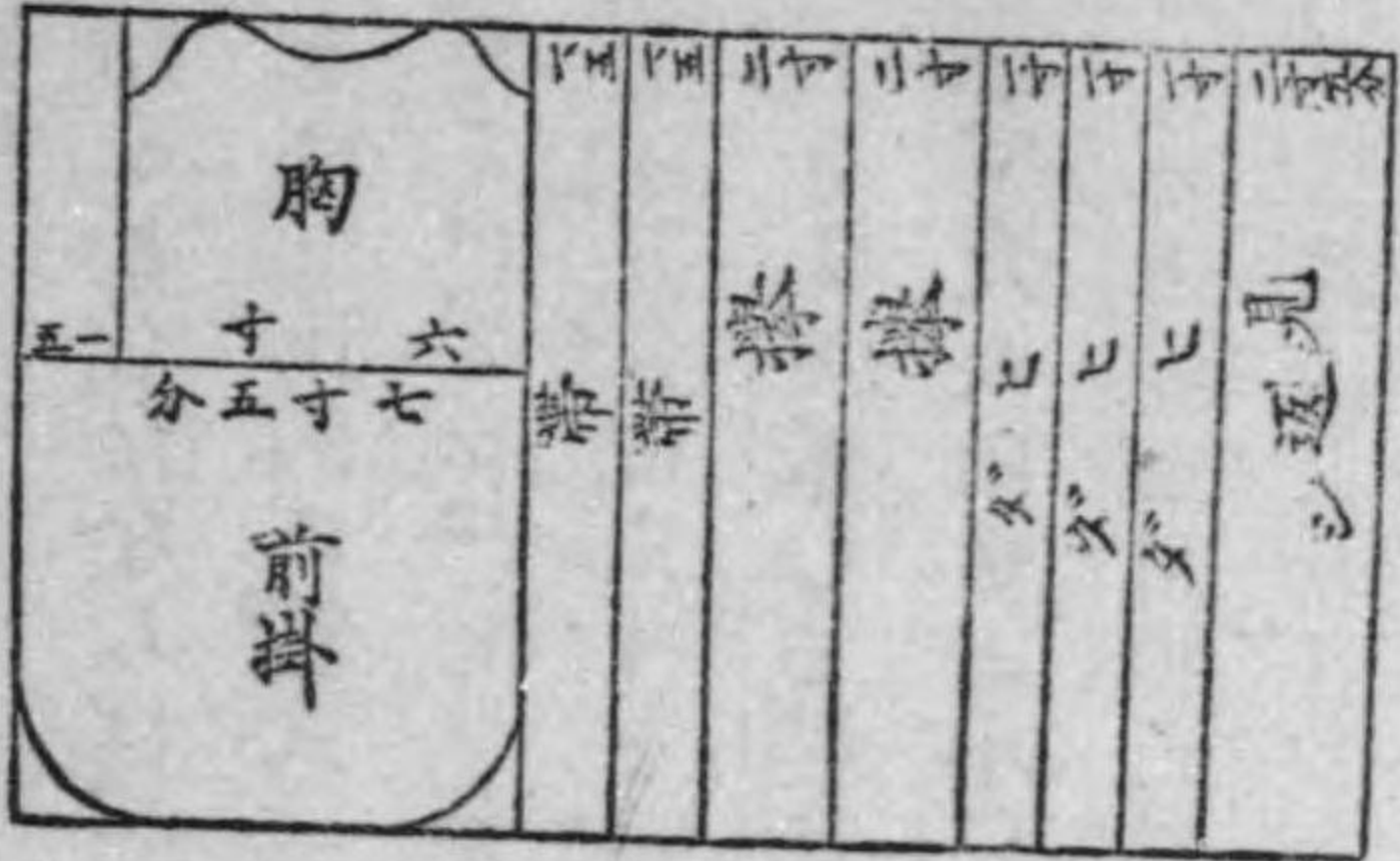
法の半胸度が六寸で、要所の寸法が七寸五分あるとして、若し半胸度が八寸の人であるとしたならば、要所の寸法（七寸五分ある所）は何寸何分になるかと云ふときは、比例の算式として次の如くするのである。

$$6.0 : 7.5 = 8.0 : x = 10.0$$

即ち七寸五分に八寸を乗け六寸で割れば答は一尺となる。此一尺は半胸度八寸の人として求むる要所の寸法である、此方法により各要所の寸法を割出すときは、大人にせよ小兒にせよ如何なる大きさの人でも、其の體格に應じて正確なるものを自由に裁ち得らるのである。然し茲に注意すべきことは此比例の算式により各要所の法寸を見出したならば、用布に形割りをするのであるが、其の形割りの以前に、一應新聞紙なぞで形を造り、其の形を以て用布を裁ち切る様にせられたきものである。

第一節 脊裨西洋前掛の裁方

大幅二尺長さ一尺二寸の天竺木綿か、或ひは金巾等の用布にて、二三歳の小児用のものを作らんとせば、第百十一圖の如くするのである。此裁方は半



胸度方法には依らぬのであるが、若し半胸度式により、大きく、又は小さく作らんとする場合には、半胸度を六寸として、各部の寸法により前述の比例式を應用して割出すのである。

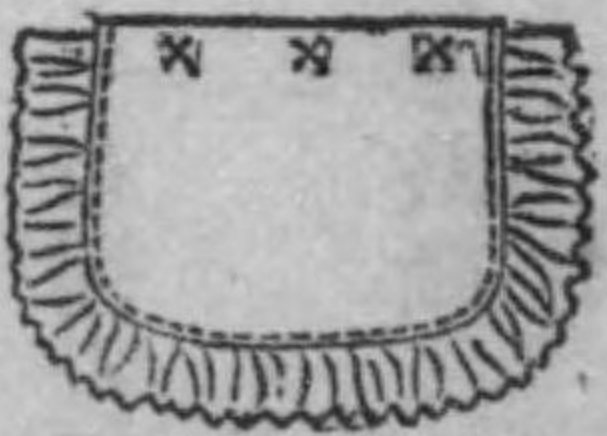
第二節 脊裨アプロンの裁方

先づ初めに、襷積布を長く三枚をはぎ、次に一方に端を荒く縫ひ、其の糸を引き締めて第百十二圖第一の如き襷積を造り、之を前掛布

圖二十百第 一 第



二 第



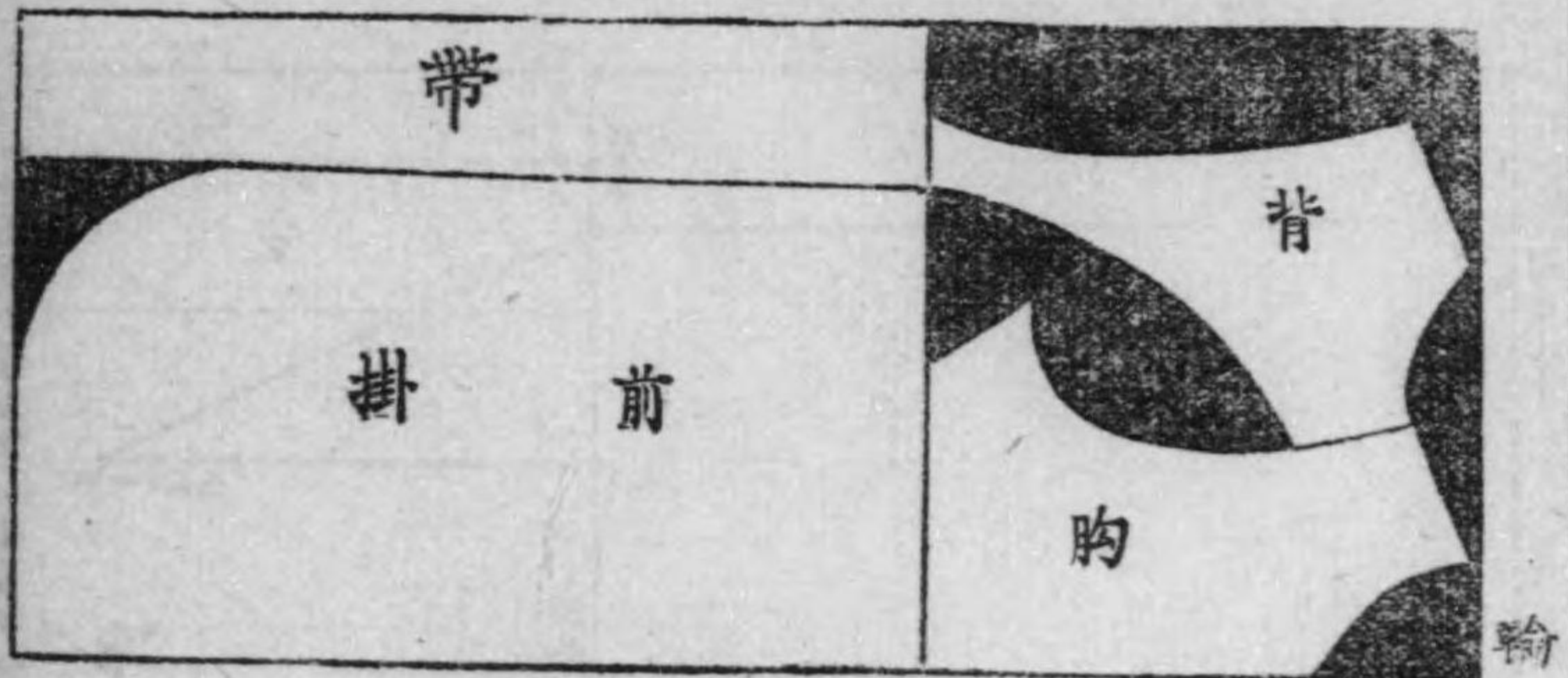
の三方へ第二の如くに縫ひつけ、其の所へ見返しの布を豎三筋に裁つて押へに縫ひ、次に帯布二枚を第百十二圖第二の×印の處へ裏表より狭みて下向に縫ひ付け、次に胸布を帯を縫ひ付た上に假縫ひに止め、次に下向とな

圖二十百第 三 第



り居る裏表の帯布を返して、前掛の縫目を隠して縮け、次に裨布二枚を二つに折り縮けて二本の紐を造り、第三の如く上部だけ綴つけて出来上るのである。

第百三十三圖

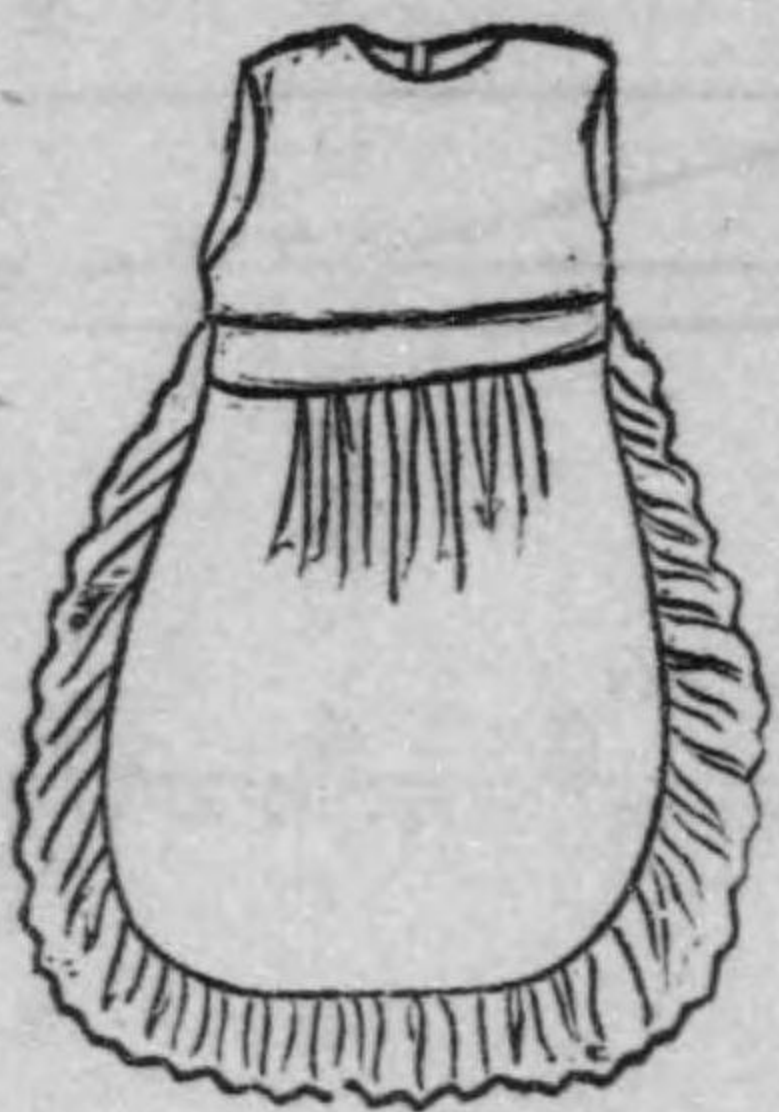


第四節 脊ボタン西洋前掛の縫方

縫方は、初めに胸の裏表二枚を中表に重ねて縫ひ、之を引き返して表を出し、次に脊の裏表で前脇を挟みて四ツ縫にし、其の上の所は脊布のみ二枚で縫ひ、之を引返して次に脊布で前身の肩を挟んで縫ひたらば、引返して形を正して、次に下の前掛を上幅と同じになるやうに、上部の布端の中央を縫ひ縮めたらば、以前に縫ひおきたる上の方を、裏表二枚の帯きれて挟みて縫ひ、左右の脇縫より外は裏表別に縫ひ、次に表の帯と

前掛と縫ひ合せて、此前掛の周圍にギヤタ襷積を作りたる襷積きれを縫ひつけ、次に裏帯を拵けつけ、脊にボタン穴を作り、第百十四圖の如く仕上るのである。

第百十四圖



第五節 寝冷知らずの裁方

此の寝冷知らずの方法も、前項の如く標準寸法として、半胸度六寸として、各要所寸法を割り出したものである。

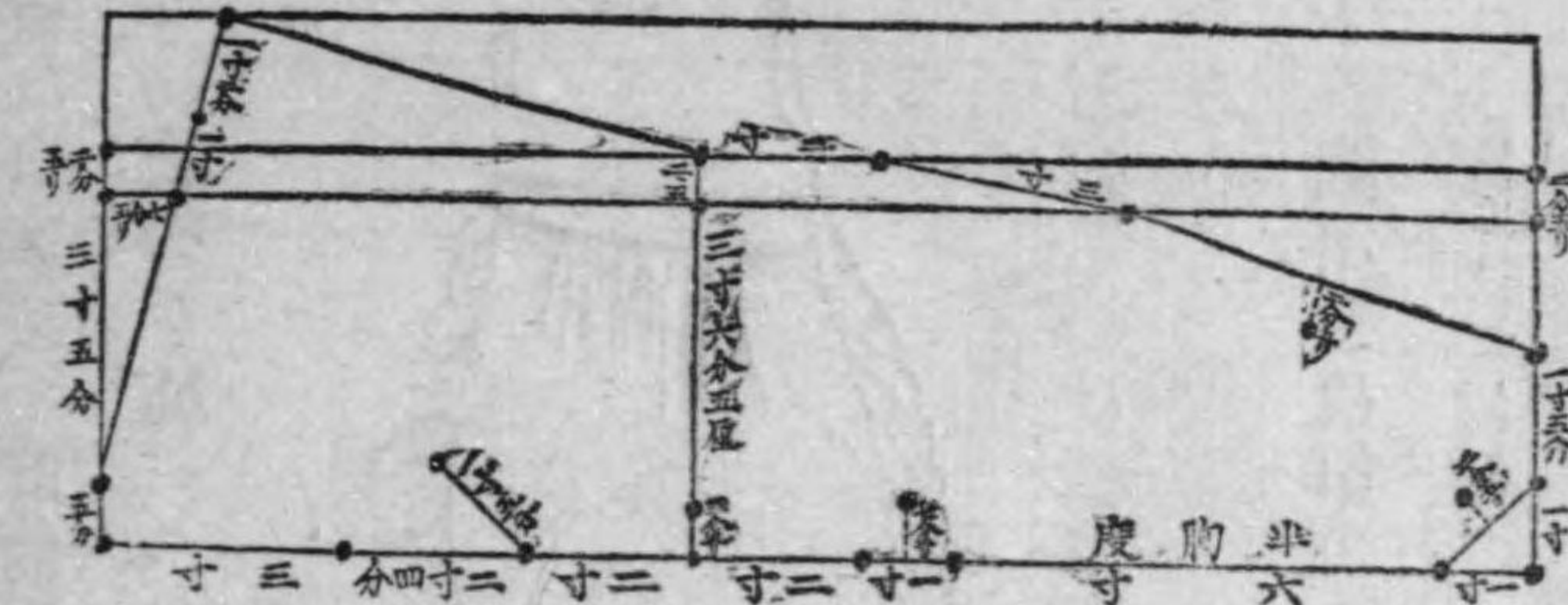
第百十五圖第一は標準寸法として、半胸度六寸の各要所寸法の割出しを示した所である。

第百十五圖第二は第一の直線、斜線、點により形を取つた圖である。

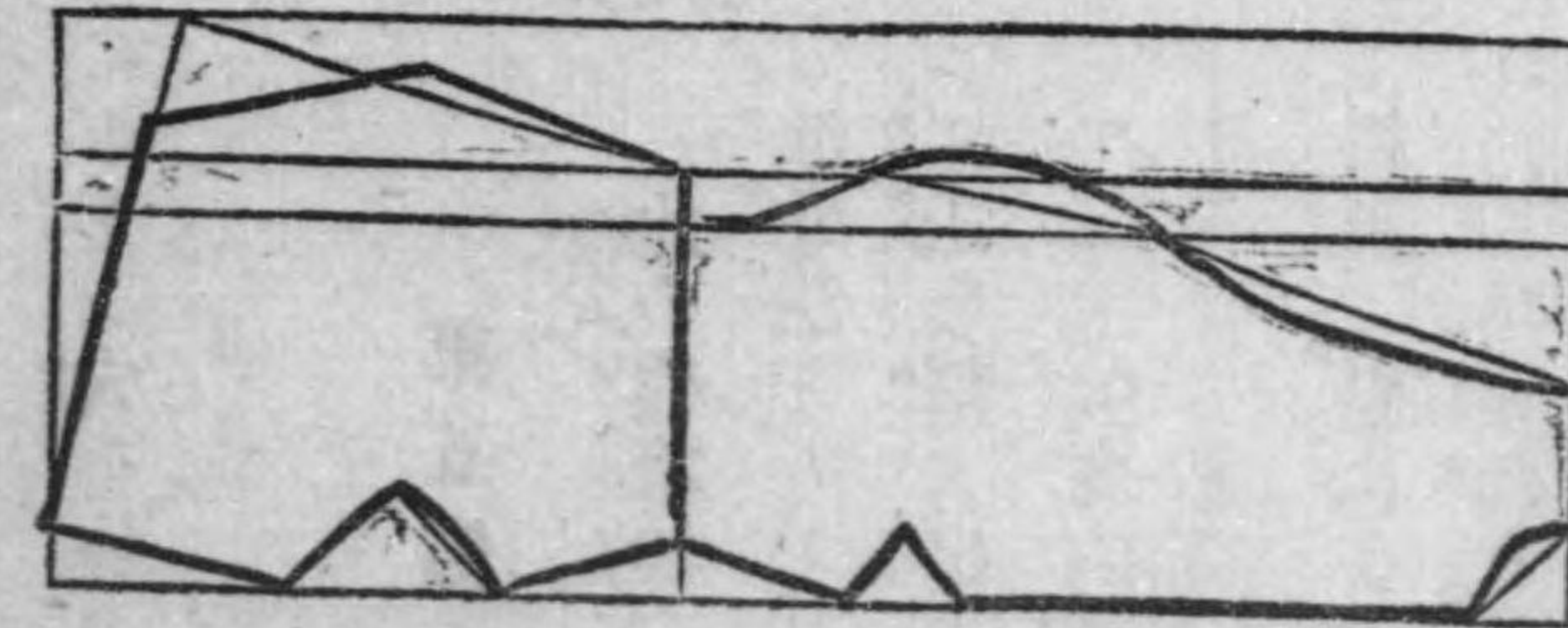
第百十五圖第三は第二に畫かれたる黒線により、之を裁断せる圖である。

圖 五十百 第

一 第



二 第



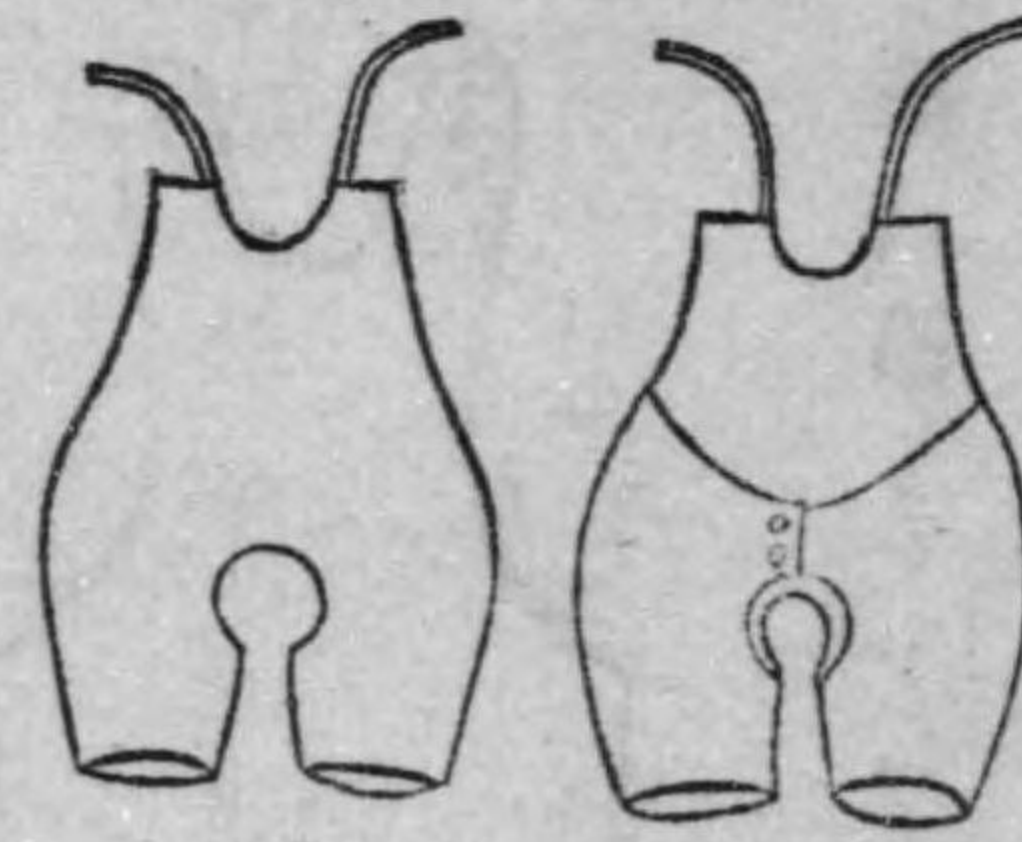
三 第



圖 六十百 第

圖 り 上 立 仕

前 後



第六節

寢冷知らずの縫方

寢冷知らずの縫方は、初めに前身の裾を縫ひ、次に後の裾を左右とも裏表を縫ひ合せて引返して表を出し、次に前で後布を挟み、四ツ縫にし、亦一方も同様に縫ひ引返し、次に股を締め襟紐をつけ仕上げるのである。

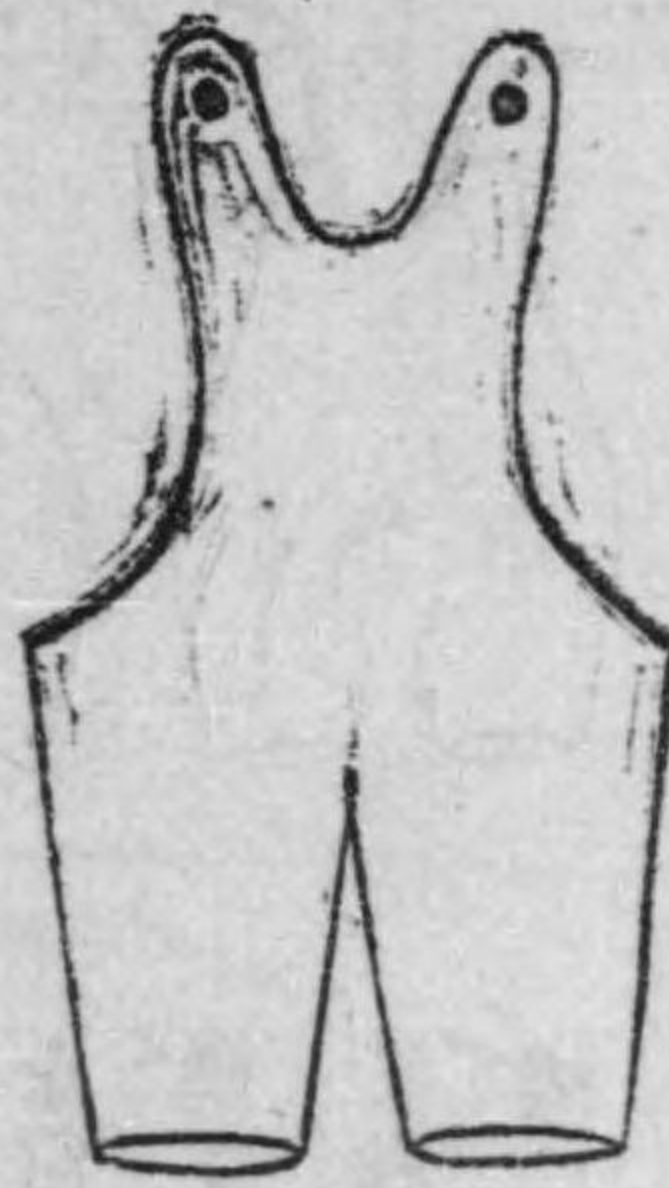
第七節

簡易なる寢冷知らずの裁方

是は第百十七圖の如く裁斷して、第二の如く仕上げるのである。

第百七十圖

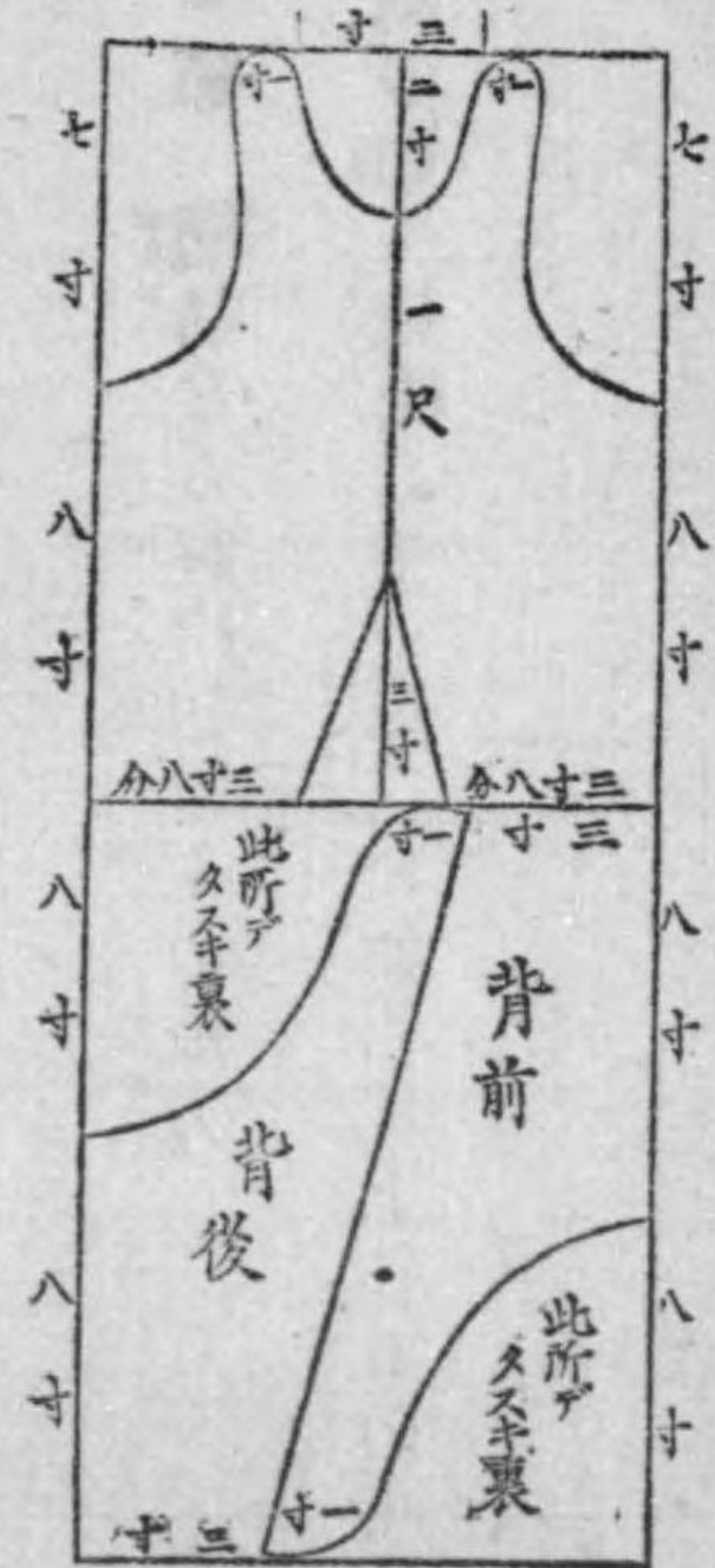
第二面



後面



第一面



第八節 シャツの裁方

此のシャツ裁断法は、標準寸法として半胸度を一尺二寸として、各要所の

寸法を示したものである。總べてシャツにせよ、他の物にせよ、半胸度を基として割出すのは、其人の體一ばいである故、多少の弛と縫代を加ふる様にせられたし。

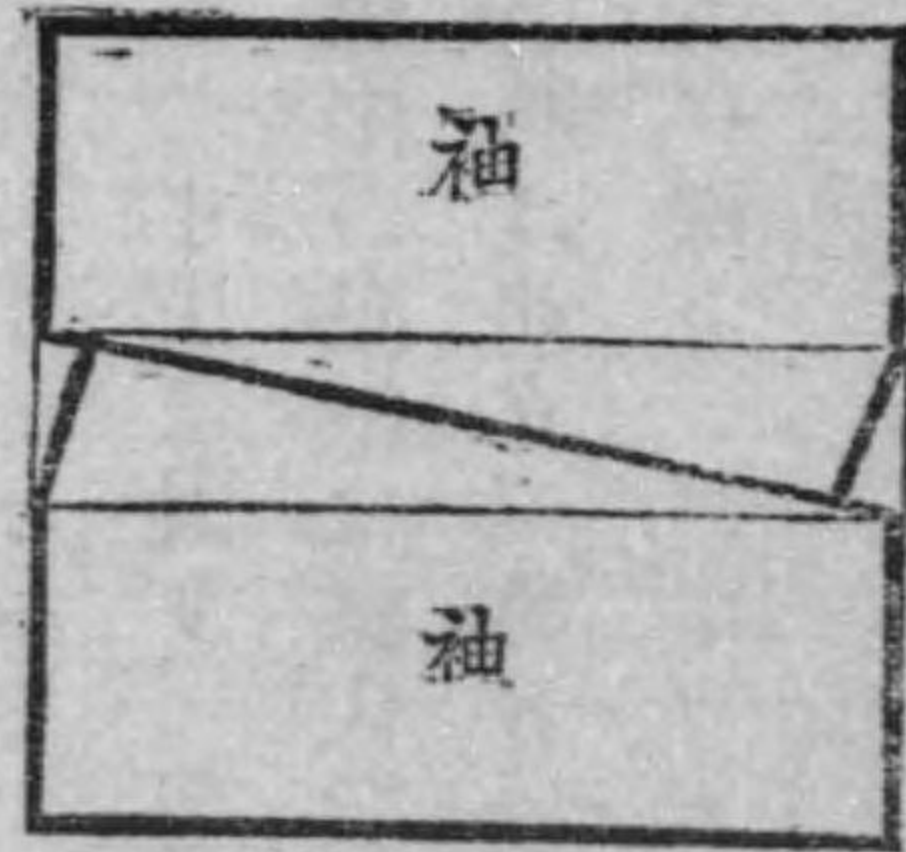
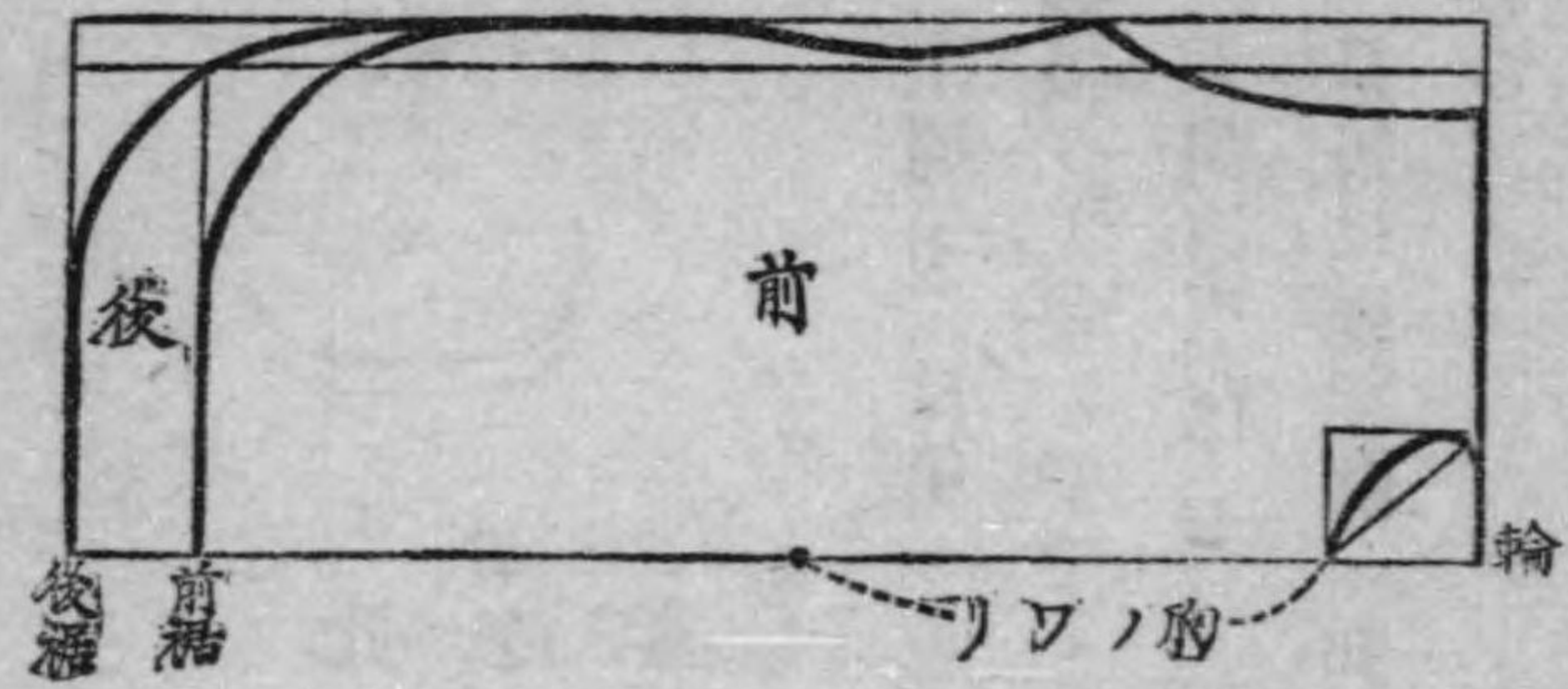
第百十八圖第一は半胸度一尺二寸として、各要所の寸法及び標付を示せるものである。

第百十八圖第二は、第一の直線、斜線、點、により、其の形を取た所である。

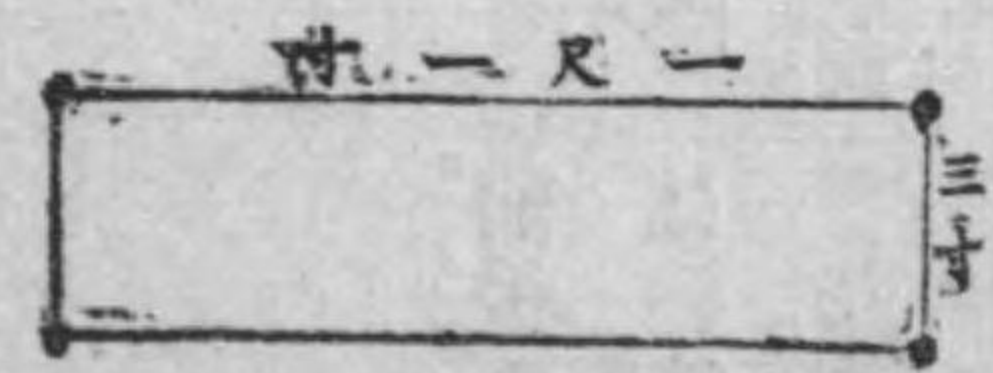
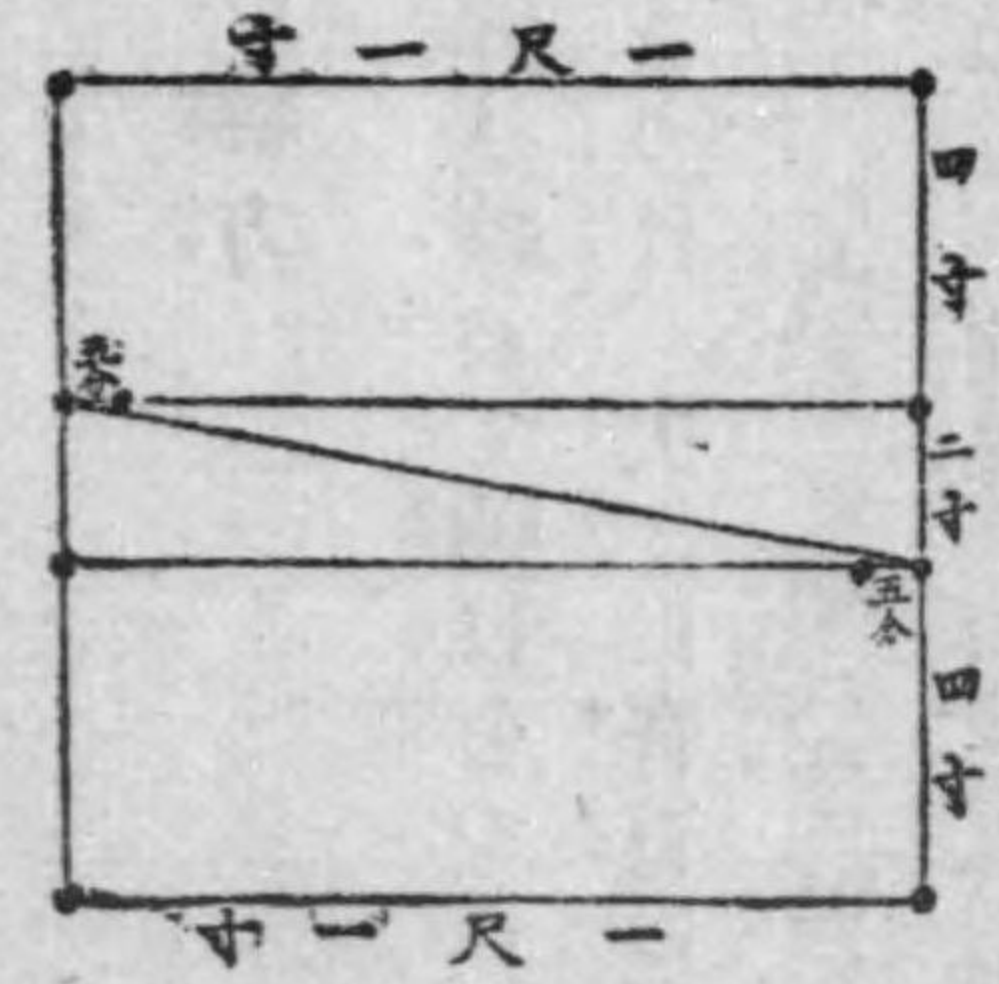
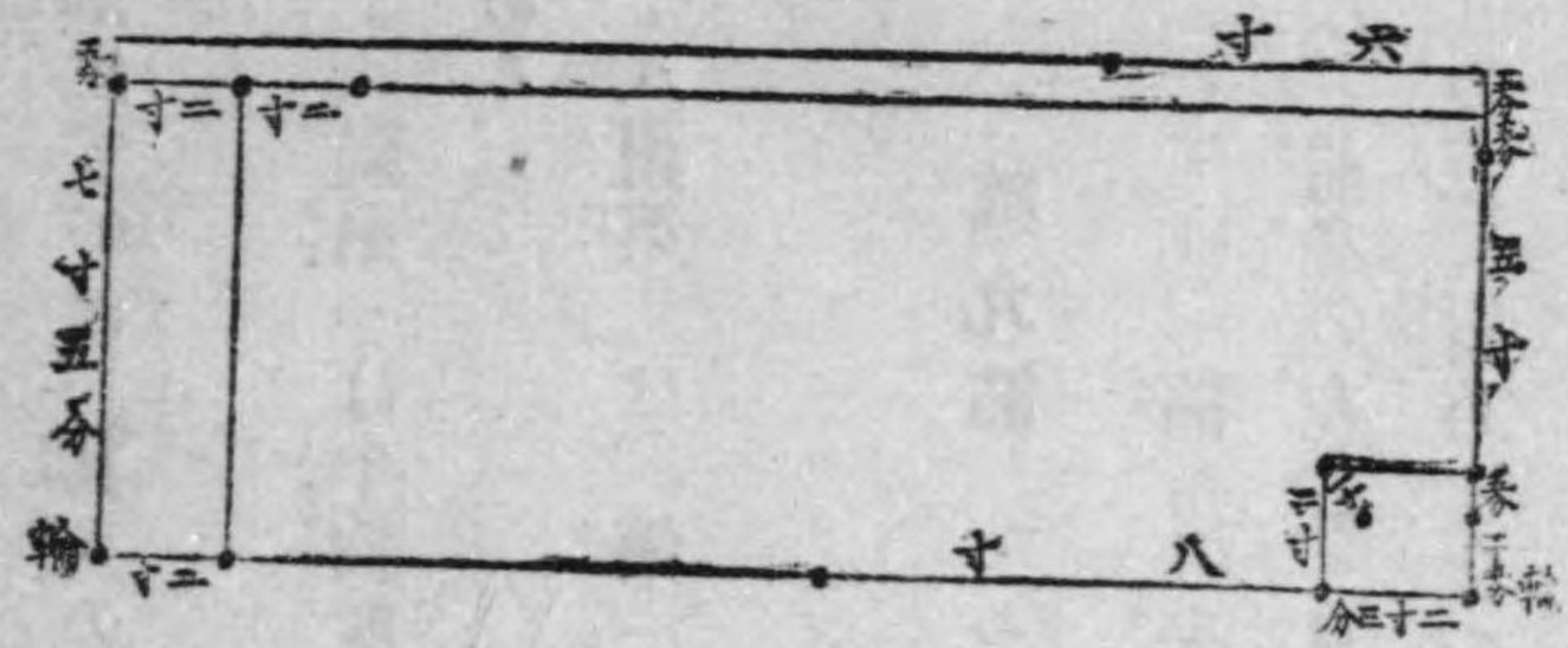
第九節 シャツの縫方

縫方としては、袖布の先きを縫ひ縮めて袖口をつけ、次ぎに前後の裾を縫ひたらば、前身の左右へ見返しをつけ、次ぎに脊首の所を襟一ばい縫縮めたらば、其の上に肩あてをつけ、次ぎに襟布を幅八分位にして表より縫ひ附け、之を裏で拵け、夫れより袖を縫つけ、兩脇と兩袖尻を縫ひ合せ、次ぎに胸

圖八十第
二第

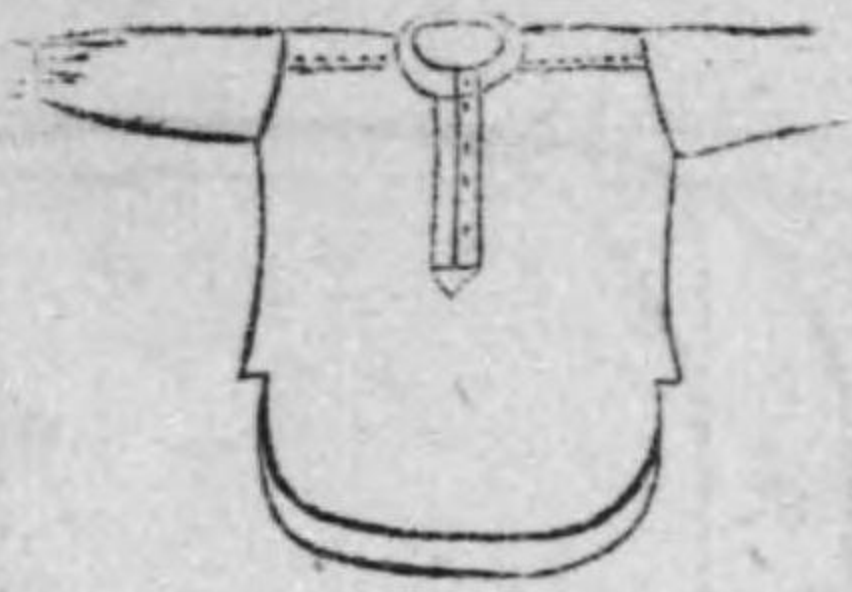


圖八十百第
一第



袖口等、ボタン穴を造り、第百十九圖の如く仕上げるのである。

圖九十百第



第十節 ツボン下の裁方

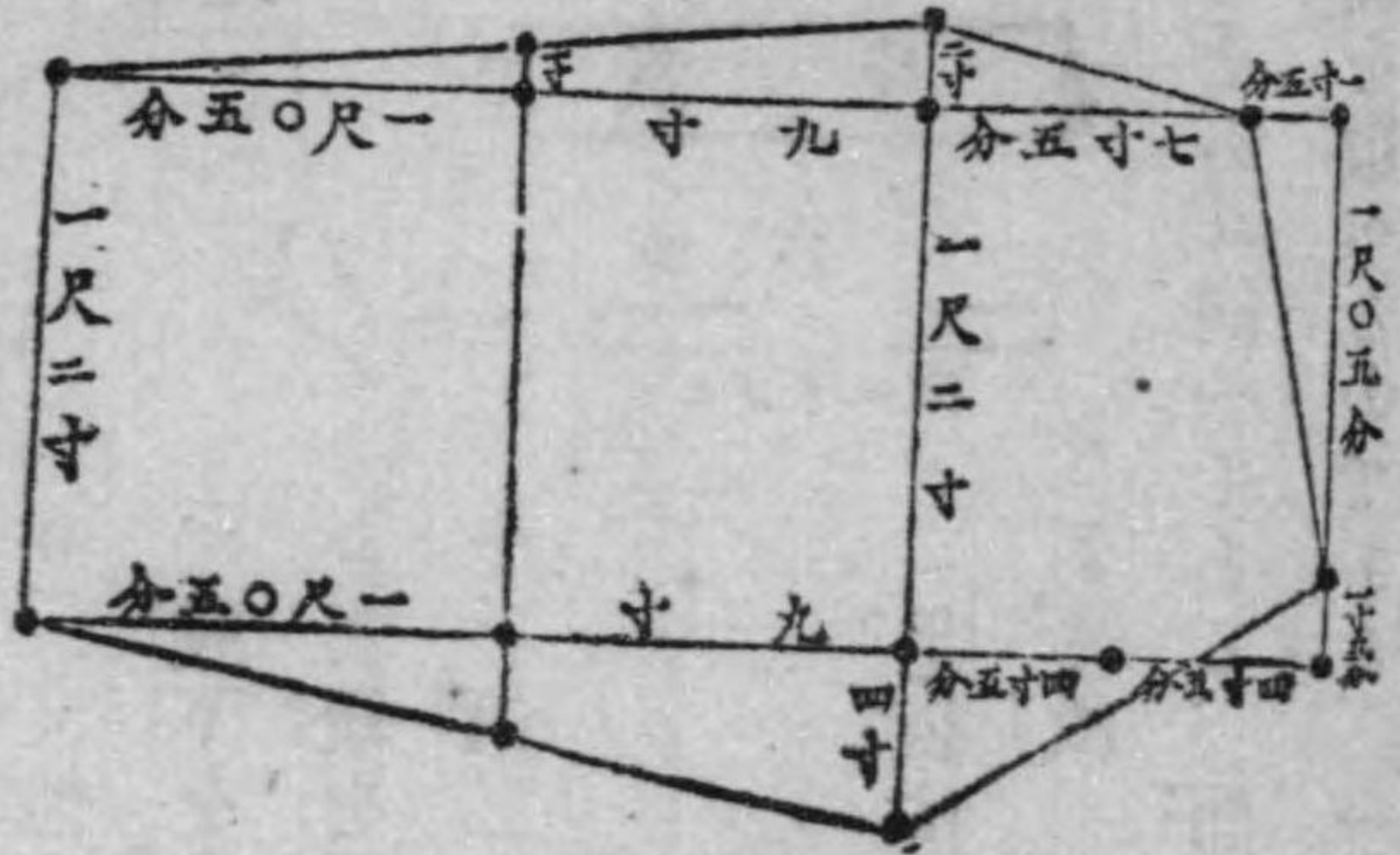
此ツボン下の裁断法も、前述の半胸度の方法に因て型を割出すのである。

第百二十圖第一は標準寸法として、半胸度一尺二寸として各要所の寸法を示したものである。

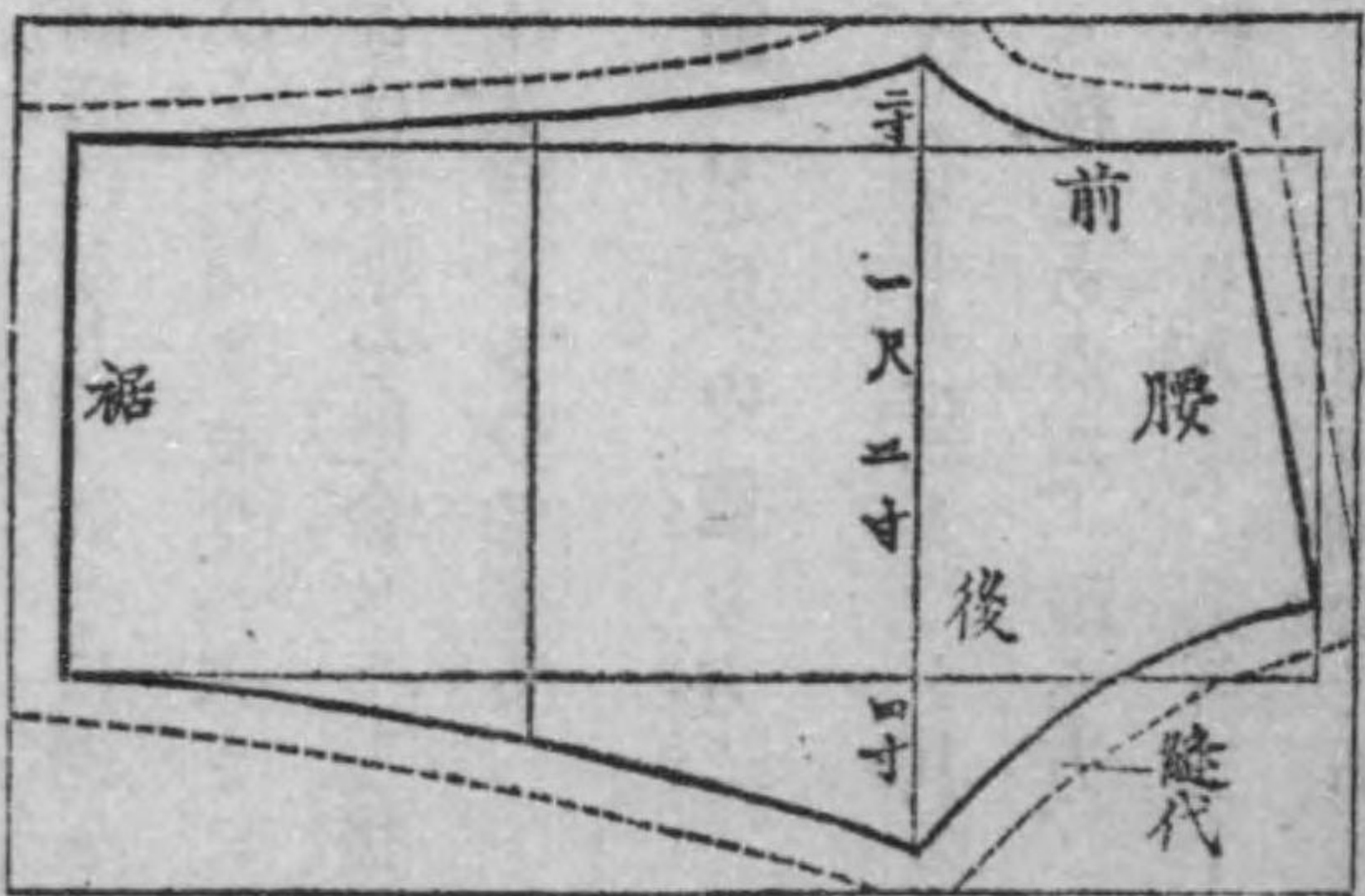
第百二十圖第二は第一の割出せし寸法に因り、型取をした所である、圖中の太き黒線が主要の型で、其の周圍の點線は縫代である。

第百二十圖第三はシツク、第四は前立、第五は腹帶、第六はビジヨ―紐である。是等は總て圖の如き形ちに採り、之でツボン下としての用布は採れたのである。

圖十二百第



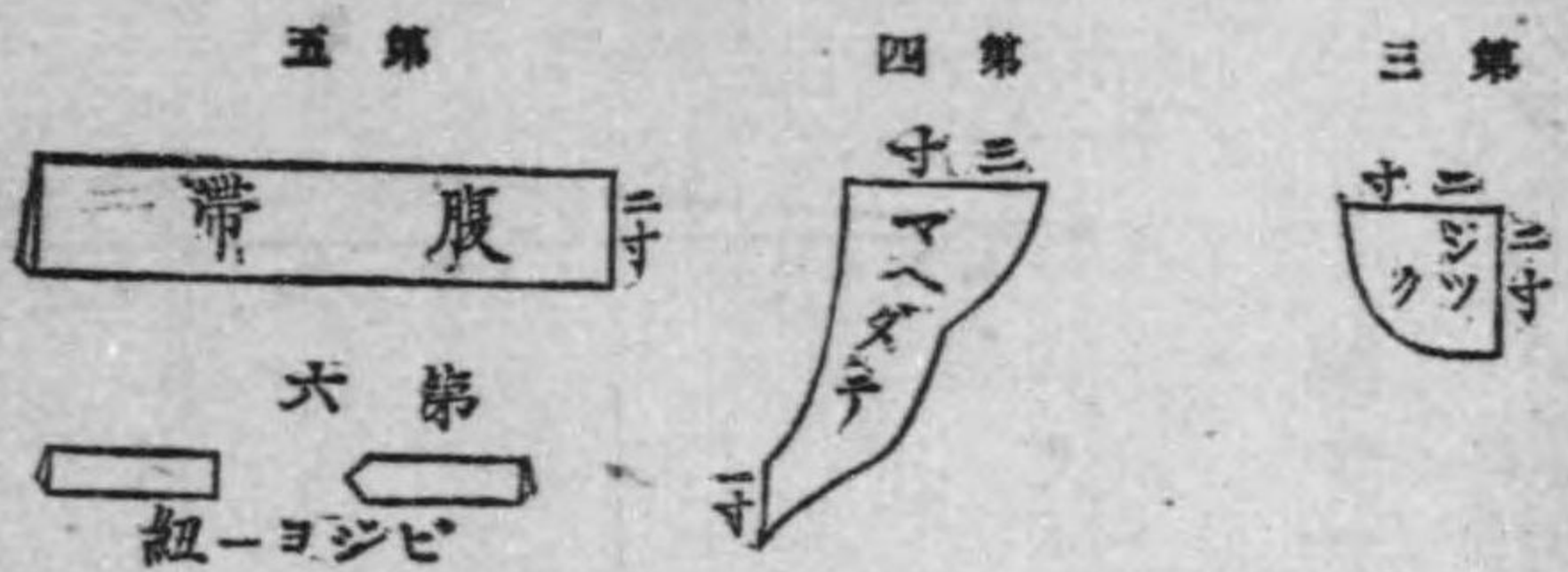
二第



第十一節 ツボン下の縫方

此ツボン下の縫方は、後部の袂止り(突起部)へシツクをあて、次に前部

圖 十 二 百 第



の袂りへ前立をば縫つけ、布はしを躰けにてとめ、次に腰部布の中間を五分位撮んで腰のくせをとり、之に腹帯及びビジョー紐をつけて第百二十一圖第一の如造り、又他の一方も同様になし、次に裾を三分位あけて股下を合せて縫ひ上げ筒を造り、次に裾を輪に造りて紐を貫し、次ぎは相乗を縫合せて（後部は帶下まで）第二の如くに仕上げするのである。

第十二節 足袋の造り方

足袋は、普通四紋より十二紋までと其の間に半紋がある故、凡て十七八種もあるが、裁ち方、仕立方は大の差こそあれ同一である。而して此紋数の取り方は、第百二十二圖の如く点線の間を數へるのである。一紋は鯨尺の六分五厘の割合である。

圖 一 二 百 第

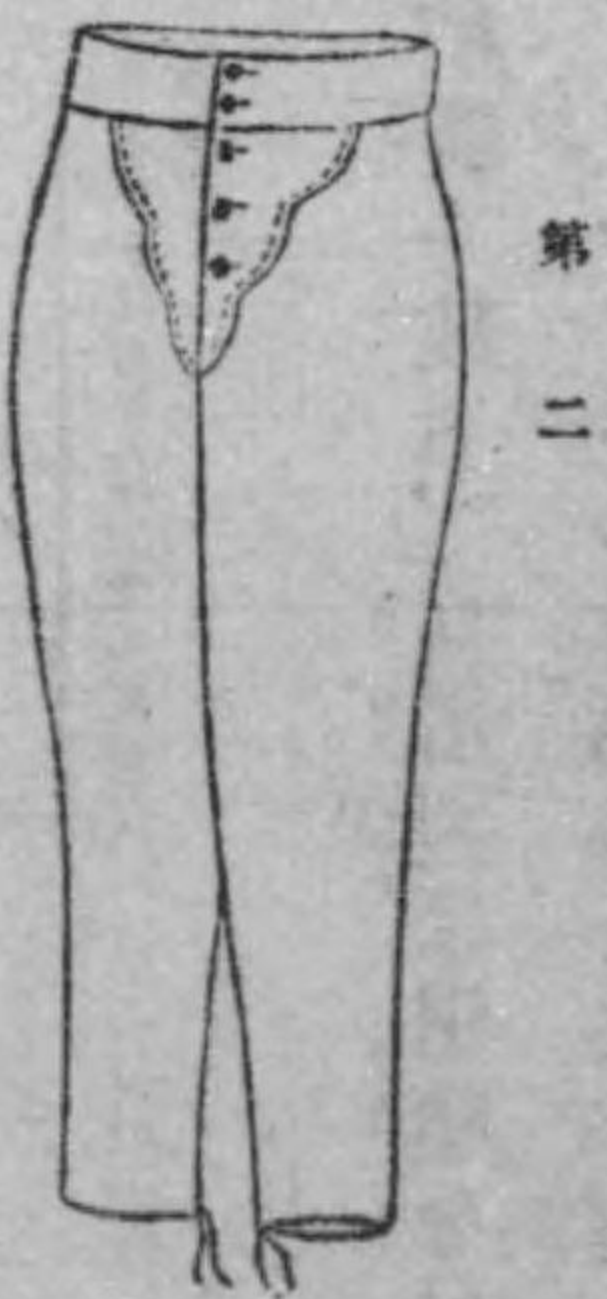
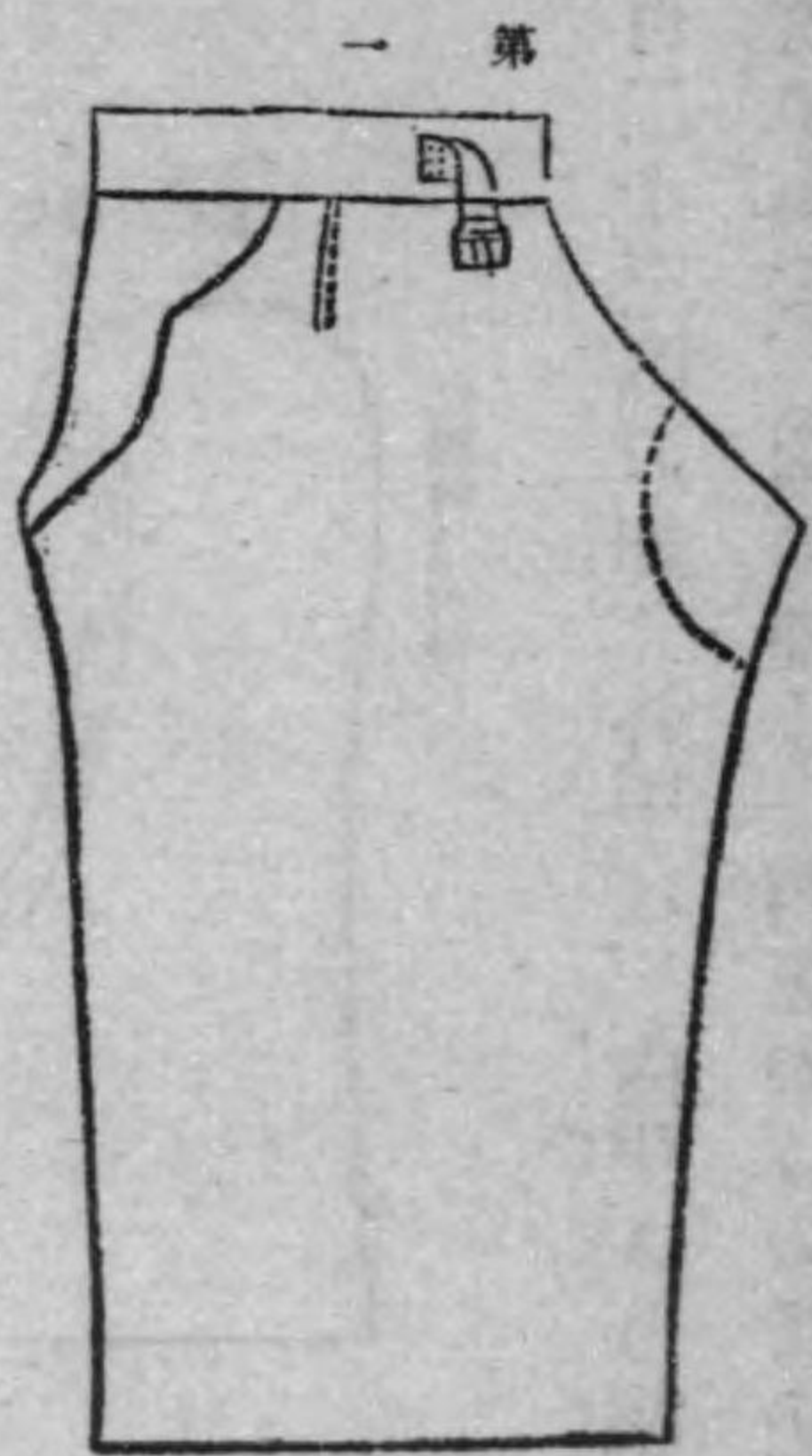
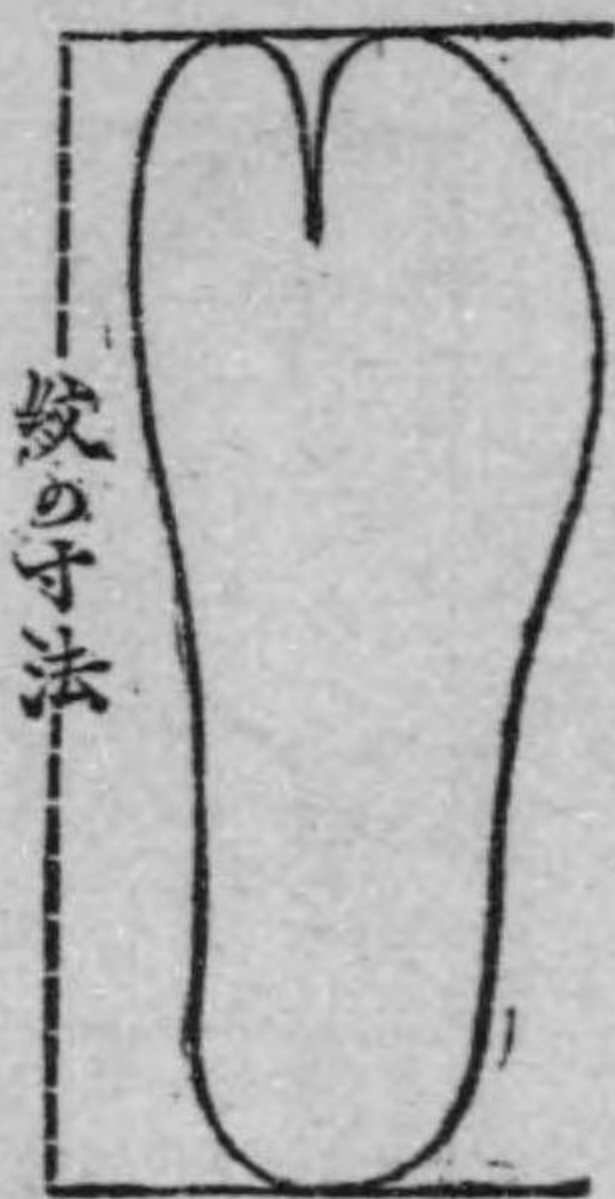


圖 二 二 百 第

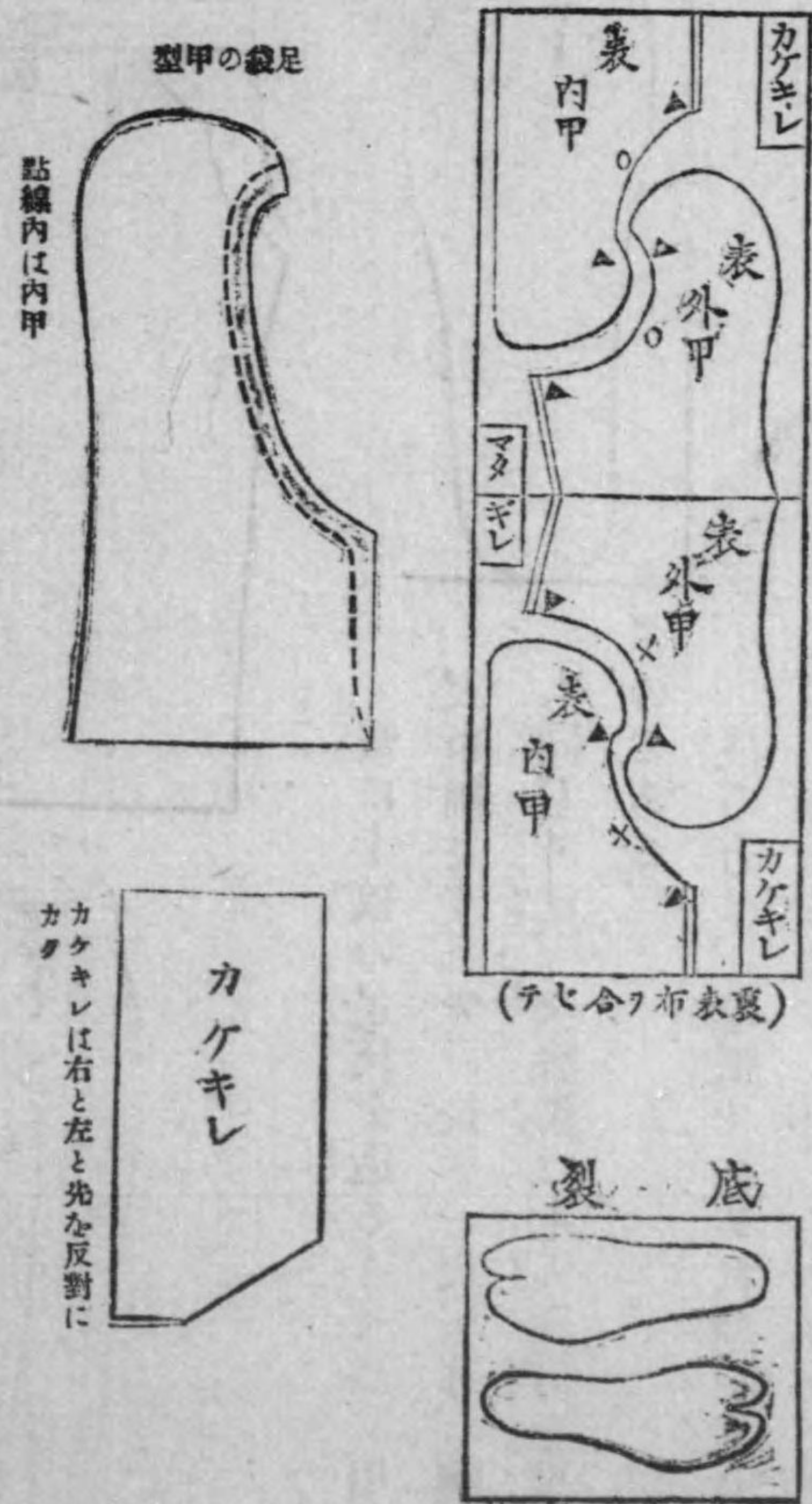


假に十紋の足袋を造るとせば、用布は表布幅九寸五分、長さ一尺二寸、裏布之も同じ寸法、又底裂は七寸四方を要するのである。

裁ち方は、厚紙で初めに型を造り、其の型に因て裁断のである。而して此型の造り方であるが、之は曲つた處、丸き處などあつて、夫れを正確に記述することは甚だ繁雜である故、茲には維

形を示すのみである。(第百二十三圖) (古き足袋を解之に因て型を造るも妙ならん)

第百二十三圖



第百二十三圖の如く外甲は、内甲より幅を稍廣く裁ち、又掛裂は甲馳を付ける所の布で、圖の如く一角をかくのである。又マタキレは指のまたの處へ

あてるのである。形は三角形に少し細長くするのである。

第十三節 足袋の縫方

足袋の縫方は、先づ掛袋の右左を區別し、裏表を定めて甲馳の付く割合を定め、次に其の間へ甲馳を挟んで縫ひつけ、次に圖中の... 印の處を裏と表に縫ひたらば、内甲と外甲とを裏と表とに重ね、標の×と×、○と○との處を▲標の間を四ツ縫ひにし、縫目を正しくして甲馳の掛糸をつけ、次にマタキレを取りつけ、底をつけるのである。此底の付け方は底を手前に甲を手向にして、底の方と真中と立の縫目とを合せ。内甲は底を弛く、外甲は甲を弛くして左右ともに裾をつけて引返すのである。

第九章 注意の數々

第一節 衣服の調製

衣服を調製する場合は、第一に品質宜きを選び、次に縞柄、模様、染色等のふさはしきものを選び、氣候と人品、年齢に應じて相當のものを選ぶべきである、濫りに流行を追ふが如きは一考すべきことである。

●毛布 織緯細くて弾力がある故、軽くして暖に而して柔軟で、容易に濕氣を通さず、其の上に皮膚の蒸氣を發散させ、體温を能く保つ等の効がある故、老人小兒等には頗る適當である、また防寒用としては之に優るものはない。

●絹布 輕軟美麗、最も肌に適するものは絹布である、然し其の價格高く、洗濯に不便であるから外出着としては兎に角、平常着に之を用ふることは實に甚しき不經濟である。

●綿布 其の質重くして硬く、外觀は絹布の如く美麗ではないが、價値廉くして洗濯に便利である、且つ熱の不導體で、能く體温を保つ等、最も經濟的で、平常着として頗適してをる、然し毛布の如き弾力なく、濕氣を吸收する質である故、度々洗濯して用ふべきである。

●麻布 體温を洩らすことが容易で、能く皮膚の水分及び空氣中の濕氣を吸收し、其の上之を蒸散することが速である故、夏季の衣服としては清涼を感じて着心はよいが、皮膚に直接着くるは、衛生に害がある故、注意すべきことである。

●小兒の衣服 殊に赤兒の衣服は、可成り軽く、而して軟かなる物を用ふべきである。衛生上より言へば、唐木綿でも宜いが、地織木綿が最も宜しい、殊に直接に肌に着くる物は、地質の薄い綿布を選ぶのが宜しい、小兒に綿重く袖長きものを着せては、手足の自由を失ひ、爲に發育上に非常の害を及ぼす故、充分に注意すべきことである。

●針の取扱ひ 裁縫をなす初めに、先づ針刺の針の勘定をして、さて終りたらば一々調べて取片づ

くるやうに注意すべきである。一本の針と雖も粗末にして紛失するやうなことが有てはならない、不注意の爲め小兒などが意外の怪我をなすことあれば、よく／＼心すべきことである。

●布の切端 又は短き糸屑のやうなものでも、粗末にせずに保存すべきである。絹布の裁ち落しは、總合せて坐蒲團、小兒の袖無羽織、或ひは袋、袴衝などにもなる、又た短かき糸屑も、暇を見て繫ぎ置き、之を機織の緯とするときは、見事な布となる、其他麻糸の屑、紙の裁片にせよ、之を取り集めて紙綴などに置いて置けば、入用の時に重寶を感するのである、總て家政は何事によらず、丹念が第一である。

第二節 衣服の保存法

●藏め方 脱ぎたる衣服は、直ちに畳まずに暫らくは衣桁又は衣紋竿等に掛け置き、能く空気に曝らし充分に湿気を抜き、柔らかな刷毛などで能く埃を拂ふのが肝腎である。一寸見て氣付かぬ織目や絹目の中に這入つた埃は、自然に地質を損じた汚點となる元であれば能く注意すべきことである。

●襟、紋所、縮入、是等の箇所も初めによく埃をばらひ、其の上糊氣のない白紙（油を吸収する質のもの用ふ、奉書は糊多ければ用ふべからず）を一々挿み置くやうにせよ、斯くなし置かねば、汚れは他に移り、また紋所は黒み、縫糸は色變りなどして、見苦しくなるものである。殊に襟は油に

汚れやすきもの故、目に見える汚れは揮發油を海綿に浸して柔らかに拭き、風に當てよく乾くを待つて藏ふがよい、また長く藏ひ置くには必ず掛襟にはづし置くべきである。

●麻布、生絹 是等とりわけ皺になり易い故、皺を生じた時は、霧を吹いて、皺を伸ばし、衣紋竿などに掛けて略乾いた時、取り下して再び畳み、壓を置き、更に掛けて乾し、十分に乾くを待つて藏ふやうにせよ。又縮入などの皺は、火熨斗を當て掛け乾にして、暫時空気に曝して後に畳むのがよい、總べて襪め易き色物は、霧を吹かず、火熨斗文にして壓をするがよい。

●藏ふ時は袖口等の壓し合はぬ様に、襟を入れ

違へにして、又晴着と常着とをよく區別し、殊に肌着、足袋等の如き汚れ易きものは一纏めにして、他の衣服を汚さぬ様に注意すべきことである。

●夜具蒲團、是等は使用後、直ちに畳まず、暫らく空気にあて、湿気を發散させ、汚や塵を拂ひ去りて後、藏むる様にせよ、總べて夜具の類は、時時日光に曝して、湿気を除去せよ、之を怠れば體温に蒸されて、一種の臭氣を醸し、爲めに健康を害するに至る故、注意すべきことである。

●折切の豫防 行李や葛籠などに入れずとも随分地質に依り折切の出来るものである。之を豫防するには時々疊直す人もあるが、夫れよりも柔かな紙で綿をくるみ之を折目々々へ入るが最も良き方法である。

●蟲干 一年の内梅雨の頃は雨多くて空氣濕り、

それが爲め衣服や器具等に黴を生ずる故、土用になり晴天の續いた時を選びて、衣服器具等を風通しよき處に曝し梅雨期の湿気を拂ふを土用干といふ。此の土用干をしたらば、秋の末に秋干といふを是非行ふがよい、此秋干は土用干より必要のことで、土用中の空氣は温度の高い爲め空氣中に砂からぬ湿氣が含まれて居るのみならず、蛾などが知らぬ間に卵を生みつけ之が自然に發生して衣服器具を害するのである。然るに秋には是等の憂は少しもない故、土用干を行なふて後、秋干は是非行ふべきことである。

●衣裳の蟲 衣裳を損ふ蟲を參考までに左に示すこととする。

△衣 蛾 三分位の小蟲で脊に赤き筋あるものである、此の蟲は年に二回發生する

のである。

△小衣蛾 衣蛾に似て少しく小形である、是れも年二回(夏の初めと秋の中頃)発生する。

△毛藍蛾 是れは小衣蛾と同様の蟲であるが、小衣蛾より稍大形である。

△衣魚 是れは銀箔を塗つた様な細長き蟲である、この蟲は日には弱い。

△姬松魚蟲 此蟲は芋蟲の様な形の小蟲である、毛織物を害するのは之である。

右の内、蛾は羽化すれば衣類に害を加へることなし、然し幼蟲の内は毛織物などに害を加へることが夥ましいのである。

●害蟲の豫防 此の豫防に手軽で效能のあるは、ベンゾール油である、此の油を衣類を蔵むる器物の底に少し注ぎ置けば、発生する憂は少しもない、又た既に発生したものがあれば、其衣類を油紙などで別に包み、ベンゾール油を少し滴し、厳しく封じ置けば悉く死で仕舞ふのである。

第三節 汚點抜き法

總べて衣服に汚點のつきたる時は、なるべく速く経過する時は、其の汚點が充分に抜けぬのみに加に除くがよい、汚點を生じた時、直ちに適當の手當をすればたやすく抜き得らるゝものも、時日日常其の方法を心得置き、見出したるときは其の

汚點の性質を知り、直ちに適當の方法により抜き取る様に心掛くべきである。然し汚點にもいろいろあれば、地質にも絹物、木綿、毛織物、交織物等あり、其の抜き方も夫れ々に異つて居る故、困難きものは其の道に巧なる汚點抜、或ひは紺屋等の専門家に依頼する方が安全である。されば茲には日常最もつきやすい汚點抜法の簡單なるものを記述する。

●汗の汚點 まだ乾かぬ内であれば、其處だけ水でザツと振り洗ひすればよいが、久しくなつた場合は、アンモニアを水に落して其の香ひがあるか無きかを適度として洗へば、地質、色合を損せずして能く抜ける。又た永き時を経て錆の如き色になりしときは、植酸(藥品)を薄く溶して洗ひ、後ら清水にてすすぐのである。

●油の汚點 是れに羅紗か毛織物を布き、其の上の汚點の部分のをせ、新らしき筆に揮發油か或はベンジンを含ませて充分に塗りつけ、其の上より吸取紙(西洋紙でもよい)をあて、能く吸込せ、次ぎに烙鏝を熱くして吸取紙の上より押へれば、大抵のものは取れる、此の一回にて充分に抜けぬ時は再び繰返すのである、而すれば如何なるものでも綺麗に抜けるものである。

●襟垢 之を除くには、軟かき餅を少し暖めるか或は焼たての麵麩の軟かき所にて拭ふがよい、甚しき垢の着きたるものは揮發油をつけて擦り其の後ち微温湯を以て濯ぐのである、此方法でも抜けぬときはアンモニア水にて洗ふのである。
●乳、茶の汚點、牛乳或ひは人の乳でも、衣服につくときは嫌な汚點となるものである。此の汚點

を拭くにはエーテルか或ひはベンジンを塗り、之を
を吸取紙で吸はせるのである。之は木綿物の方法
であるが、絹物であれば幾分か跡が残る故、其の
時は海綿にアルコールを含ませて静かに拭へば宜
敷い、又茶の汚點も此の方法で宜敷いである。

●血液の汚點 之は唾液をかけ能くもみ、清水を
注ぎつゝ洗ふのがよい。

●小便の汚點 子供を持たれた婦人方は、心得べ
きことである、これはアルコールの薄いのへ極少
量の硝酸を加へ、之を以て拭ふのである、然し硝
酸は劇薬である故、分量を過せば地質を損する
恐れがある故注意しなければならぬ。

●酒の汚點 酒のかかりたる時は、乾かぬ内に煙
草の煙を吹きかへし、奇妙に効がある。

●醬油の汚點 之は乾かぬ内に充分に吸ひ取り、

其の後地質を引張上より湯を注ぎかければよい。
●煙草の脂の汚點 之は生味噌を溶きたる水で洗
ひ、味噌の汚點が出来たらは微温湯で洗ふがよい。
●澁の汚點 之は白砂糖を擦付け、よく揉みて洗
ふがよい。

●蠟の付きたるときは、其の上に紙を敷き、紙
の上に灰を薄く置き、其の上に又紙を敷き、紙
の上より火熨斗を掛けるのがよい。

●墨の汚點 之は飯粒を其の所に揉つけて洗ふ
か、又はアイボレットの溶液に浸して置き、よく
洗ひて後、清水で注ぐのである。

●石油の汚點 之は其の所を火の上に晒してよく
發散させるのである。

●松脂の付きたるときは、揮發油、又は石油で
洗ひ、後火の上に晒して油氣を發散されるので

ある。

●ペンキの付きたるは、松脂の方法と同じであ
る、別方法としてはテレメン油を揮發油のかはり
に用ふるのである。

●鐵錆の汚點 之は其の汚點の付きたる地質が白
きものであれば稀鹽酸をコップ一杯の水中に四五
滴入れ、此の中に三四時間浸し置くのである。

●鞆 この鞆の付きたる時は、大根卸の搾り汁で
洗ひて後清水で濯ぐのである。

●雨 衣類に雨のかかりたる時は、直ちに手拭

第四節 衣類の洗濯

衣服に垢付き汚れたる時は速に洗濯を爲し、清
潔にすべきことは勿論のことである。汚れた物を
其の儘に藏ひ置くか又は用ふるのは、健康上大

を清き水にて絞り、雨に濡れた所と、濡れぬ所の
間をよく擦り、けぢめの分らぬやうにし、その上
に美濃紙などを置き其の上を、ぬるき火にて火熨
斗をかけて乾かすのである、然し色の變り易き物
は、乾きたる手拭で擦るのである。

◎注意 總べて汚點の付きたる處のみを洗ひし
時は、其の處のきわたぬ様に、周圍
にうすく霧を吹き、日光に當てぬやう
に乾かすのである。

に害のあるのみではない、其の爲めに地質を損す
るものであれば、常に能く洗濯をして清潔にする
様心がくべきことである。

●洗濯用品 この薬品には幾多の種類があるが、第一としては、バスターソープである。このバスターソープの製法は洗濯師の虎の巻ともいふべき秘法であるが、其の原料は簡單なものである。製法は曹達灰四十匁と小糠一升とをよくかき交せたものである。若し悪き小糠であれば絹ふるひにてふるふがよい。

●用水 水には軟水と硬水との二種がある、軟水は蒸溜水、雨水の如きもので洗濯用水としては純良のものである。硬水は井戸水、川水等で是れには石灰、鹽類等の質を含んで居る故、石鹼などを付けて洗濯すると、石鹼の主成分が是等の含有物と化合して、肝腎の効能を失ふのみならず、地質を損じ、光澤を失ふに至る。然し雨水を溜め、蒸溜水を求むるも容易のことでない故、硬水を軟水にして用ゆるがよい、此の硬水を軟水にする方法は、井戸水にせよ川水にせよ之を充分に沸騰させ、一升の水に炭酸曹達を五分の割合で入れ、夫れが溶解した時に桶に移し、暫らく置けば底に沈澱物が出る故、之を濾せば完全な軟水となるのである。

●絹 毛織物等動物性のもの、洗濯には、バスターソープ十匁に水一升の割合で掻ませ、之に材料を浸し、軽くもみ、清水（井戸水にてもよし）にてそぎ、日光にさらすのである。然し色の褪易きものは、初めに醋酸水に浸した後、以上の方法で洗ひ、艶を出すものは洗ひて後再び醋酸水に浸し、其の上で清水でそぎばよいのである。

●麻、木綿等の植物性のものを洗濯するに、世間ではよく長く水に浸して置けば垢がよく落ちると

云ふて、一夜も漬けて置くが、此様にすれば繊維が戻り、折角落ちた汚れを再び繊維の中に吸ひ込む故これは宜くない、之等の洗濯方法は、バスターンブ十升を一升位の温湯に加へたものに、一二時間浸し置き、後ち取出してよくもみ、清水にてそぐ、日光にさらすのである。

●半襟 之は其汚點のある場所に、バスターンブの粉をつけてもみ、後清水にてそぐのである。

●總べて色の褪やすきものは、初めに醋酸水に浸し、其の色素の褪せぬやうにとめ置き、後ち前の方法にて洗ひ、之に艶を出すには、再び醋酸水に浸し、その後清水にてよくそぐのである。

●糊付け 糊には姫糊、麥糊、澱粉糊、布糊等の種別があるが、絹物、麻布等には是非布糊を用ふべきである、殊に絹物に他の糊を使用するときは

酸酵作用を起し爲めに光澤を失ひ、色を褪さすことがある、何れの場合も布糊を用ふるが最も宜敷方法である。

●火熨斗 火熨斗をかける場合は火熱を餘り高くせず、又一回で皺が充分伸びぬとて、再び引續き同一の處にかけるのは宜敷ない、此様な場合は初めかけた所の熱の冷めるを待つて、更に第二回を掛けねば地質の爲めに不利益である、次ぎに如何に熱度が低いとて直接に布に當てるときは、其部分だけ妙な光澤が出て甚だ見苦しきものである。總べて火熨斗をかくるには其の地質の縮まず、又伸び過ぎぬ程度に引伸しながらかくるのである。火熨斗をかける時に附きたる皺は、容易に伸び難きものである故、注意すべきことである。

(をばり)

327
692

大正四年一月二十日印刷
大正四年一月廿五日發行

裁縫祕術寶典

定價金五十錢

不許
複製

著者兼
發行者

東京女子家政學院
東京市小石川區大塚上町十四番地

右代表者

矢澤辰五郎
東京市小石川區大塚上町十四番地

印刷者

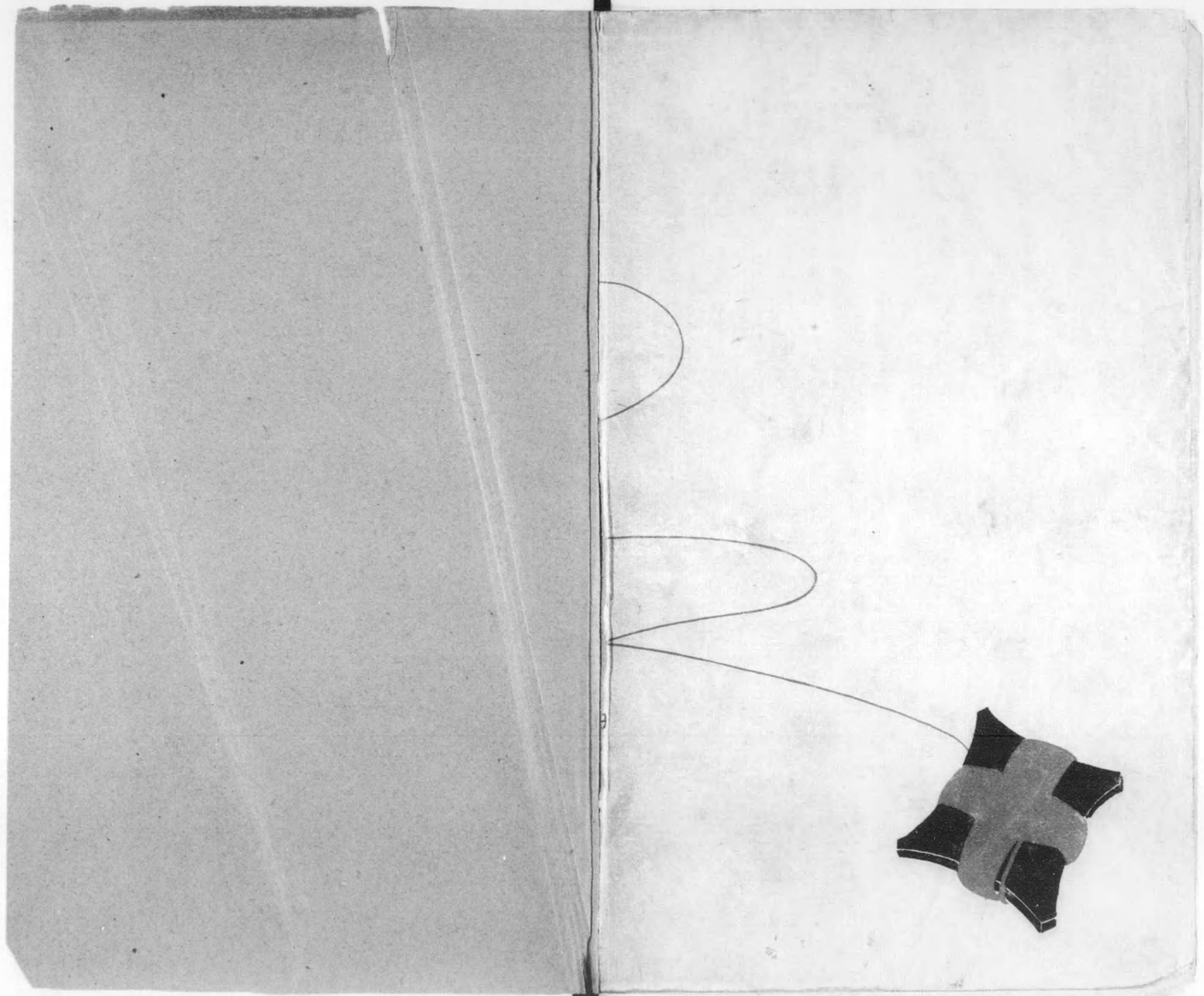
荻原勝次郎
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所

博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所

東京市小石川區大塚上町十四番地
東京女子家政學院



527
692

9.9.15

終